

飛行船支援母艦若宮

h. hokura

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

*9/05スロウスタート編とご注文はうさぎですか？編を番外編に集約しました。
ブルーマーメイド所属・飛行船支援母艦若宮は飛行船の補給や修理を支援する飛行船
工艦だった。

そして艦長を務めるのは神城綾、実は彼女にはある秘密があつて・・・
ウィキペディアにあつた「航空母艦は飛行船支援母艦として運用されて」を見て書いて
みたものです。

ハイスクール・フリートの世界観を使っていますが、用語や設定も一部作者の都合で変更しており、主人公がTSしています。

・章を『ブルーマーメイド編』『横須賀女子海洋学校編』『番外編』に変更。

目次

ブルーマーメイド編

飛行船支援母艦若宮

古庄 薫と神城 綾

乗艦体験学習 1

乗艦体験学習 2

乗艦体験学習 3

乗艦体験学習 4

乗艦体験学習 5

乗艦体験学習 6

乗艦体験学習 7

乗艦体験学習 8

ブルーマーメイド強制執行課 1

60

56

49

43

37

30

24

19

11

1

65

ブルーマーメイド強制執行課 2

71

ブルーマーメイド強制執行課 3

77

ブルーマーメイド強制執行課 4

83

知名 もえか 1

89

知名 もえか 2

95

知名 もえか 3

101

知名 もえか 4

105

知名 もえか 5

110

知名 もえか 6

115

横須賀女子海洋学校編

神城 綾と古庄 薫

119

横須賀女子学校祭 1

126

横須賀女子学校祭 2

132

横須賀女子学校祭 3

138

横須賀女子学校祭 4

143

合同演習 1

148

合同演習 2

153

合同演習 3

158

合同演習 4

161

合同演習 5

166

合同演習 6

169

合同演習 7

174

番外編（スロウスタート及びご注文はう
さぎですか？）

綾とてまりハイツ

177

水着とライチ 1

184

水着とライチ 2

190

水着とライチ 3

196

花名と綾 1

203

花名と綾 2

209

花名と綾 3

215

星尾女子文化祭 1

221

星尾女子文化祭 2

227

星尾女子文化祭 3

233

夏祭り 1

238

夏祭り2	244
お泊り会1	249
お泊り会2	254
お泊り会3	260
花名服を買いに行く1	264
花名服を買いに行く2	269
花名服を買いに行く3	274
花名服を買いに行く4	278
花名服を買いに行く5	282
花名服を買いに行く6	286
花名服を買いに行く7	290
花名服を買いに行く8	296
花名服を買いに行く9	304

ブルーマーメイド編

飛行船支援母艦若宮

『ワイバーン01着艦します、作業員は回収準備について下さい。』

『ワイバーン05発艦準備に入ります。』

洋上を航行するブルーマーメイド所属・飛行船支援母艦若宮の飛行甲板上で無人飛行船の発着が行なわれている。

『こちら飛行管制室より艦橋へ、11地区の搜索を完了、引き続き13地区の搜索を行います。』

若宮の艦橋で艦長席に座る女性が、座席に据え付けられた艦内通話機を戻す。

「副長、今後の本艦の進路を変更します、13地区の搜索終了後は17地区へ向かって下さい。」

「了解です艦長・・・整備局が何か？」

眼鏡掛けた切れ者といった感じの副長が、艦長の傍らに来て声を潜める。

「・・・搜索範囲をもっと広げるとの事です、明確な理由の説明はありませんが。」

美しい黒髪を肩まで伸ばした艦長は溜息を付いて答える。

若宮は消息不明となった横須賀女子海洋学校の教育艦の搜索に借り出されていた。

「どうなっているんでしょうね、海洋実習に参加した艦が行方不明になるなんて。」

本来若宮は海洋実習の支援を行なう為に出航してきたのだが、突然消息不明となった教育艦の搜索を命令されたのだ。

「分かりません、しかし参加した艦が全て消息不明というのは異常過ぎますね。」

はつきり言って前代未聞な話しだが、何が起こったのかは情報がまったく入っていない。

最初に指示された搜索範囲も集合地点の西之島新島沖だったのに、今はもつと広範囲に広がっている。

艦長も副長も事態が尋常では無くなって来ている事を感じていたが、海上安全整備局が何を意図しているか分からないでいた。

「そう言えば海洋実習に参加している教官艦さるしまの古庄指導教官と神城艦長は同期でしたね。」

副長は艦長に顔を寄せて聞いてくる、それは個人的な会話の為だったのだが。

「……ええ、優秀な女性です、彼女が何かミスを犯すとは思えないのですが。」

副長に顔を寄せられ、神城艦長は何故か落ち着かない様子になる、それは神城艦長が女性とのコミニケーションに未だに慣れていないからだ。

ブルーマーメイド所属艦故乗員は当然女性ばかりだということもある。

それは何故と言われれば答えは簡単だ、神城艦長は副長や乗員達と違い生まれながらの女性では無かったからだ。

ブルーマーメイド所属・飛行船支援母艦若宮の艦長である神城綾。

彼女は横須賀女子海洋学校に入学するまでは、神城薫という名の男性だった。

神城薫が東舞鶴男子海洋学校の受験を目指していたある日、彼は学校で突然倒れてしまった。

そして病院で目覚めた薫を待っていたのは医者 of 驚愕すべき次の一言だった。

「君は検査の結果女性だった事が分かりました。」

要は身体は男性だったが、遺伝子的には女性、つまり半陰陽だったのだ、彼、いや彼女は……

本人がパニックに襲われたのは言うまでも無い、ただ母親だけは至極冷静だったが。

結局、その母の説得もあり、薫は女性になる為の手術を受ける事になった。

そして身体の調整と女性としての教育に一年間費やし、晴れて横須賀女子海洋学校に入学する。

女性となった為に……いくら何でも男子高である東舞鶴男子海洋学校には行けないからだが。

名前も神城薫から神城綾に変えて。

その時、初めての（当たり前だが）女子だけの生活に戸惑っていた綾をフォローしてしてくれたのが、古庄薫だったのだ。

同じ教育艦で3年間過ごし、親友と呼べる程親しくなった、少なくとも神城艦長にとつてはそうだった。

女性となった自分に始めて出来た友人、学業でも女子海洋学校での生活でも助けられたのだ。

卒業後、古庄薫は横須賀女子海洋学校の指導教官に、神城綾は若宮の艦長に、それぞれ進む先が分かれたが、それでも連絡や時間が合えば会ったりしたものだ。

今回の海洋実習についても、『面白い娘達が居て楽しみよ。』1週間前に彼女から有った連絡を見て元氣そうだと安心していた。

それだけにさるしまがも消息不明と聞いた時、神城艦長は酷く心配させられたのだ。

艦橋の窓から洋上を見ながら神城艦長は溜息を付く、その艦長に副長が更に身を寄せてくる。

「ふ、副長、ちよつと顔が近いですよ。」

もう顔と顔が触れ合ってしまう程の距離、良い匂いもして落着かない、いくら身体が女性になり、何年も女の世界で生きて来たとはいえ、やはり男としての方がまだまだ長

かった神城艦長としては、簡単には慣れそうもなかった。

もつとも副長の方は気にもしていない、まあ彼女の方は同性同士だと認識しているからだ。

余談だが神城艦長のこういった所が副長や乗員達に可愛いと好評なのだった。

「あ、すいません．．．でもお耳に入れて置いた方がよろしいかと思ひまして。」

先程より更に声を潜め副長が言ってくる。

「整備局に居る友人が漏らしていたのですが、実習に参加している教育艦が反乱を起こした、という情報があるそうです。」

「反乱ですか？それは穏やかではありませんね。」

教育艦の乗員は横須賀女子の生徒達、神城艦長の後輩達だ、彼女達がそんな事を仕出かすとは考えたくもない話だ。

「ええ、ただ真偽の程は分かりません．．．ただ海上安全整備局がこれに対し強硬手段を取ろうとしているという話も流れている様です。」

「．．．．．」

教育艦の反乱が事実だとしたら事は横須賀女子だけでは済まない、ブルーマーメイドの存亡にも繋がってしまう。

今頃、横須賀女子海洋学校の宗谷真雪校長は苦慮しているだろうと神城艦長は心が痛

んだ。

宗谷校長は神城綾として横須賀女子に入学する際、事情を唯一知る人間として配慮してくれた人だ。

古庄指導教官と共に神城艦長にとっては最大の恩人なのだから。

そんな時だった、艦長席の艦内電話がコール音を鳴らす。

「はい艦橋です。」

『こちら無線室、救難信号を受信しました、13地区です。』

受話器を取って呼び出しに出た神城艦長に報告が入る。

「発信した相手は分かりますか？」

『船舶ではありません、低出力なので、救命ボートからだと思われます。』

ボートに積まれている非常用救難信号発信機からという事らしい。

「飛行中の無人飛行船を使って発信地点を割り出して、飛行管制室に連絡して下さい。」

『了解です艦長、20分で終わらせます。』

「お願いします。」

そして神城艦長は通話先を飛行管制室に切り替えて呼び出す。

「飛行管制室、艦長です、救難信号を受信、無線室が発信地点を計測後連絡して来ますので、飛行船を向かわせ下さい。」

『飛行管制室、了解です。』

「今回の実習参加艦のどれかでしょうか？」

指示を終えた神城艦長に副長が問いかける。

「それはまだ分かりませんが・・・兎に角、発信地点確認後、本艦も向かいます。」

「了解です艦長、救難体制に入ります。」

神城艦長が頷くの確認した副長は、艦橋後部にある艦内放送器に向かい、マイクを取り上げる。

「全艦救難体制に入ってください、繰り返しします全艦救難体制に入ってください。」

そして艦内放送器横のレバーを倒し、アラーム音を響かせる。

2時間後、救難信号の発信地点に若宮は到着していた。

その前に発信地点に到着していた飛行船の映像から、それが救命ボートであり、女性らしい人影を確認していた。

ただその要救助者は飛行船の接近にも反応を示さず、神城艦長はそれが気掛かりだった。

『こちら艦首見張り、救命ボートを確認、右舷30度、距離500。』

「機関停止、救命艇の発進準備を急いで下さい。」

見張り員からの報告を聞いた神城艦長が指示する。

「機関停止。」

「救命艇の発進準備急げ。」

機関員と副長の復唱が重なる。

神城艦長は艦長席から立ち上がり、艦橋の窓に寄ると、双眼鏡を構えて救命ボートの方を見る。

洋上で波に揺られる救命ボートに若宮の救命艇が接近して行くのが見える。

どうか無事であつて欲しい、神城艦長は願つた。

『救助班より艦長へ、要救助者を收容完了、意識は有りませんが、大きな外傷は認められず。』

「ご苦労様です、要救助者の身元は分かりますか？」

要救助者を收容した救助班からの報告を聞いた神城艦長が問いかける。

『ブルーマーメイドの隊員です、氏名は……』

要救助者の身分証明証を救助班員が確認している様子が無線越しに聞こえてくる。

『古庄薫二等保安監督官です。』

「……!?!」

神城艦長は思わず艦長席から立ち上がってしまった。

「薫さん……が？」

唐突な再会に呆然となる神城艦長を、副長や乗員達は心配そうに見つめるのだった。横須賀女子海洋学校とブルーマーメイド、そして海上安全整備局を巻き込んだ「RA T t ウイルス」事件の一端に神城艦長と若宮乗員達が初めて遭遇した瞬間だった。

若宮

若宮型飛行船支援母艦

(元イギリス・ユニコーン型飛行船支援母艦)

基準排水量14,950トン

全長194.9 m

最大速度24.0 ノット

搭載飛行船15隻(補用5隻)

乗員45名

イギリスとの協定により日本に引き渡され、若宮と改名される。

飛行船の母艦として運用されると共に他艦の飛行船の補給や修理、整備を支援する飛行船工作艦。

また飛行船や補給物資、人員の輸送を担う事もある。

その為、ブルーマーメイド内では、便利屋と呼称されている。

しかしこの呼称は乗員達には不評であると伝えられている。
艦長は神城綾二等保安監督官。

古庄 薫と神城 綾

「攻撃目標晴風。」

私は何をしようとしているの、その艦は教え子の乗った艦なのに・・・

「本艦は攻撃を受け・・・晴風は反乱を企て・・・」

違う、攻撃を仕掛けたのは私の方、晴風は悪くない、何でそんな事を・・・

止めて。

止めて。

止めて。

ヤメテ、ヤメテ、ヤメテ、ヤメテ・・・

「・・・!?!」

気付くと私はここ何日で見慣れてしまった天井をぼんやりと見ていた。

暫らく混乱した状態が続いたが、それが収まってくると私は深い溜息を付く。

ここは病院、海洋実習中に意識が途絶え、気付けばここに居た、そして蘇る忌まわしい記憶。

自分の教え子を攻撃し、反乱の汚名を着せた。

上半身を起こし、汗まみれになった身体を自身で抱きしめた、湧き上がってくる震えを抑える為に。

私の名は古庄 薫、横須賀女子海洋学校の指導教官だ。

あの日、海洋実習の為に集合地点の西之島新島沖に私は教官艦さるしまの艦長として居た。

それは何時もと変わらない海洋実習だった、海洋研究機関の人間が同行している事を除けばだが。

連中は西之島新島に上陸後、何かを回収して来た様だったが、その内容は機密と言う事で教えてくれなかった。

異変が起こり始めたのは晴風が遅刻するとい連絡が来てからだだった。

その辺りから私は意識がはつきりしなくなっていた、いや副長や他の乗員達も同様だった。

まるで自分が自分で無いような感覚、やがて私は一つの考えに支配されてゆく。

遅刻するなど許しがたい、晴風に罰を、痛みを与なければならぬ……

心の奥で間違っていると思っっているのに私はその考えから逃れられなくなっていた。

そして乗員の晴風接近の報告に躊躇う事無くこう命じた。

「攻撃目標晴風。」

さるしまの砲撃に必死に回避運動をする晴風、止め様としても、身体も意識も私には従ってくれなかった。

そして凄まじい衝撃、沈み始めたさるしま、そこで私の記憶は途切れる。

私は自身を抱きしめていた腕を外すと病室の外を見る。

ここで目覚めたからも私の地獄は続いた。

まず来たのは海上安全整備局の人間達、執拗に何があったのか、それだけを尋問された。

彼らは私の質問をまったく受付なかった、晴風が他の教育艦どうなったのか、答えてはくれなかった。

時間も日付の感覚も失われ、悪夢に苛まれるだけが続いていたある日。

私の元を訪れたのは、宗谷 真霜一等保安監督官だった。

彼女は私の後輩で、今はブルーマーメイド安全監督室情報調査室所属の人間だった。

宗谷一等保安監督官のお蔭でようやく私は状況を知ったのだが、正直言つて悪夢が酷くなっただけだった。

武蔵を始め海洋実習に参加した艦艇の殆どが行方不明、晴風は未だに反乱の疑いを掛けられたまま。

唯一救われたのはさるしまの乗員が全員救助されていた事だろう、ただ何処に居るか

は教えて貰えなかったが。

あと、私を救助してくれたのが若宮だと言う事も知った。

そうか彼女の艦に助けられたのか、私は横須賀女子海洋学校時代からの親友の顔を思い出す。

ふと病室の時計を見ると、宗谷一等保安監督官が帰ってから2時間立っている事に気付く。

少し横になっているつもりが眠ってしまい、あんな記憶を夢の中で思い出していたらしい。

その時だった、病室のドアがノックされ、私は思わず緊張させられる。

ここ何日か整備局の尋問は無かった、どうも宗谷一等保安監督官ははっきり言ってくれなかったが、裏で色々な動きがあり、私の尋問どころでは無くなっているらしい。

「どうぞ……」

取りあえず私は中に入ってもらおう事にする。

扉が開き入ってくる相手を見て私は驚かされた、まあそれは良い意味でだったけど。

だって私の病室に入って来たのが、先程思い出していた親友、飛行船支援母艦若宮の艦長である神城 綾二等保安監督官だったからだ。

「身体の方はどうですか？」

ベット横に置いた椅子に座った綾が聞いてくる。

「何とか動けるといふ所かしら、まあ病室以外行く所なんてないんだけどね。」

上半身を起こし枕を背もたれにして私は綾と会話する。

「ああ、そういえば救助してくれたのは貴女の艦だったのよね、お礼が遅れて御免なさいね。」

「いえ、自分の責務を果たしただけですよ。」

私の礼に綾はそう言つて笑う、なるほど彼女らしい答えだ。

「それよりもっと早く来たかったのですが、帰港予定が延びてしまつて。」

「……」

申し訳ない様に言う綾の言葉に私は押し黙る、多分それは……

海上安全整備局により綾と乗員達は海上に隔離されたのだ、私を救助した為に。

聡明な綾の事だ、事情は察しているだろうが、それに気付かないふりをしているのは私を思つてくれての事だろう、この辺も彼女らしいと言える。

「気にしなくても良いわ、来てくれたんだからね、でも驚いたでしょ私を救助した時は。」

「ええ救助者が古、薫だったから驚きましたよ。」

私が軽く睨むと綾は言い直す、まったく女子海洋学校時代から変わっていない。

他人行儀になるからと何度も言っているのだけだ。

そんな彼女に状況を忘れつい意地悪な事を言ってしまう私だった。

「今日はセンス良い服ね・・・誰に見立ててもらったの？」

「誰って、自分で・・・」

「あ・や。」

「休暇で学校時代の友人に会いに行くと言ったら、乗員の皆に色々・・・何でああも張り切るんだか。」

鬱そうに言う彼女に私は思わず噴出してしまふ。

同性である私でも思わず見惚れてしまう美人な綾だが、致命的な欠点がある。

それが服装のセンスだ、女子海洋学校時代に初めて乗員の皆と外出する為に集合した場所に来た綾の服装に、私達は急遽その日の予定を全てキャンセルし、彼女を洋服店に連行した。

そして半日近く掛けて綾に服装についてレクチャーしたのだった、もつとも後半は着せ替え人形扱いになってしまった綾を見て、私達が新しい趣味に目覚めかけたのは、彼女には絶対秘密である。

まあそれでも卒業までに改善したとは言えず、今も綾のセンスは相変わらずだ。

それを若宮の乗員達も心配して色々しているのだろう・・・玩具扱いと言うのも否定

出来ないが。

「いいじゃない、それだけ皆に慕われているって事でしょ。」

まあ彼女には話さない方がいいだろうと思いきや、そう言っておいた・・・、けつしてその方が面白いと思つた訳は無い、多分。

「・・・まあいいです、それより大分顔色が良くなつてきた見たいですね、良かった。」

「そう・・・かしら?」

確かに先程までの重苦しさが多少和らいでいる事に私は気付き目の前の親友を見る。

きつと綾のお蔭だろう、本人には悪いが目の前の変わらない親友を見て安心したのかもしれない。

「何笑つてるんですか?人の顔を見て・・・」

どうやら私は笑つていたらしい、綾はそれを見て拗ねた様に睨みつけるが、彼女の都合余り様にならないのはご愛嬌だ。

「くす・・・綾貴女はこれからも変わらないでね。」

「えつと、どう言う意味・・・」

「綾はそのままが良いという事よ。」

「何ですかそれ?」

1人納得した私に綾は困つた表情を浮かべて溜息を付くのだつた。

その後暫らく話をして綾は帰って行った、今度は洋上で会おうと約束して。数週間後、私達は約束通り洋上で再会する、晴風を救援に向かう途上で。

乗艦体験学習 1

「乗艦体験学習ですか？」

他の飛行船支援母艦に対する飛行船と関連機器の輸送を終え、基地に帰港しようとしていた若宮にそんな通信が入って来た。

送って来たのは横須賀女子海洋学校の指導教官である古庄 薫、若宮艦長神城 綾にとっては女子海洋学校時代からの親友だ。

『ええ、若宮で引き受けてもらえないかと思ってね。』

薫らの言葉に綾は考え込む、色々と疑問が沸いてくるからだった。

乗艦体験学習とは、女子海洋学校の生徒達が実際のブルーマーメイドの艦艇に乗り、その任務を体験するものだ、いわゆる職場体験と言えるかもしれない。

実際、綾も横須賀女子に在学中にやった覚えがある正式な学習項目だ。

だからそれ自体別に問題は無いのだが不可解な話しには違いない、何故なら……「幾つか聞かせて下さい……何故この時期なんですか、それと何故若宮なんです？」

綾の記憶が正しければ乗艦体験学習は1年間教育艦に搭乗した後に行なわれるからだった。

あと若宮が選ばれた理由だ、綾としては自分の指揮する艦を卑下する訳では無いが、ブルーマーメイド所属の最新鋭艦艇に比べれば魅力の有る対象とは思えなかった。

何しろ飛行船支援母艦と言いつつ、実際は工作艦や輸送艦扱いだ、改インディペンデンス型を始めとした艦艇達の方を生徒達は選ぶ筈だ、まあこれは実際乗艦体験学習に若宮が選ばれた事が無いからだ。

『時期については、これは今回の対象生徒が晴風の乗員と言う事だからよ・・・あの事件の後に晴風が沈没した事は神城艦長も知っているわよね。』

あの事件とは暴走した武蔵の浦賀水道進入の事だ、RATトウィルスによる一連の事件は海上安全整備局により全て隠蔽されている、だから綾も全てを知っている訳では無かった。

一応教育艦の消息不明は通信と戦術ネットワークの途絶とそれによって起こった混乱が原因とされ、武蔵の暴走も艦内システムの故障とヒュウマンエラーが重なった為とされている。

もつとも綾を始めとしたブルーマーメイドの一線に居る者達はそんな発表を鵜呑みにしてはいなかったが。

話が逸れたが、その武蔵を強制停船させたブルーマーメイド艦隊の作戦に晴風が参加した事は、綾も知っている、何しろ救援に向かった薫指揮のてんじんを始めとした艦艇

に対する補給任務に付いたのが他ならぬ若宮だったからだ。

その後、若宮はてんじん達を追って横須賀に向かったが、速力が遅かったので、着いた時には全てが終わった後だった、そして晴風が帰港直後沈んだ事を綾はその時知らされたのだ。

『その後サルベージされ復帰する事になったのだけど、工事の予定や事件の後始末で実習予定が切迫してしまつて、それで乗艦体験学習を前倒しにする事になったの。』

つまり時間の都合と言うわけだ、それなら綾も納得出来ない事も無いのだが。

『あと何故若宮か、と言うのは割かし簡単な理由ね、私が一番信頼出来るブルーマーメイドの人間が居るからよ。』

「えっと・・・古庄指導教官？」

真つ直ぐにそんな事を言われ綾は思わず動揺してしまふ。

『彼女達は学生としては過酷過ぎる体験を最初の航海でしたわ、加えて乗艦した艦を一度失つた。』

教育艦の消息不明事件直後から晴風が過酷な試練を受けた事を綾は薫から聞かされた事がある、もつとも機密事項扱いだつたので詳しい内容は教えて貰えなかったが。

そして最後には乗っていた晴風を失う羽目になった、確かに学生の身分としては過酷の一言だろう事は綾にも想像出来る。

『今はシヨツクの強さで呆然としているからまだまじだけども、時間が経てば……』
「そのシヨツクに押し潰される娘も出てくるかもしれないと？」

薫の言いたい事を察して綾は続ける。

「言いたい事は理解しましたが、私はカウンセラーではありませんよ。」

それなりの対応をするなら専門のカウンセラーが適任だと綾は思うのだが。

『ありきたりのカウンセリングなんかに期待してないわ……それに整備局にその事を任せる気にはならないし。』

「……………」

薫の言葉には不審と嫌悪感が満ちている、まあこれは事件に最初から巻き込まれ、その後を受けた仕打ちもあつたからだ。

もちろんそんな事を綾は知らされていないが、彼女も整備局の一連の対応には不信感を募らせていたので薫が憤慨しているのも何となく理解出来ると思つている。

『だからこそ神城艦長に任せたいの、貴女ならあの娘達を任せられるわ、もちろん私も協力するけど。』

そこまで信頼してくれるのは嬉しいが責任を感じてしまうなど綾は思った。

「信頼に答えられるか分かりませんが最善を尽くしますよ。」

『お願いね、あとこの件については宗谷校長も承認していますので、正式な辞令が降りる

筈です。』

宗谷校長も関わっているらしい、まあ彼女だったらそうだろうなと綾は思う、自分の時も大いに助けられたものだったからだ。

「分かりました、詳しい打ち合わせは辞令が降り次第と言う事で良いですね。」

『ええ・・・そんな場合ではないけど貴女とまた海に出られるかと思うと嬉しいわね。』

「そうですね？、まあ海洋学校後初めてになります。」

2人の間に沈黙が流れる、卒業後それぞれの道に分かれた為共に海に出る事など無くなってしまった。

『それでは連絡を待ってます神城艦長。』

「はい古庄指導教官。」

受話器を戻した綾は視線を海へ向けて呟く。

「私も嬉しいですよ薫。」

乗艦体験学習2

「皆さんは来週から乗艦体験学習をしてもらいます。」

陸での講義に明け暮れていた晴風の乗員達は臨時の教室である会議室で指導教官である古庄 薫から告げられる。

「あの・・・古庄教官、乗艦体験学習ですか？」

困惑する皆を代表して艦長である岬 明乃が質問する、あまりにも唐突だったからだ。

海洋学校の学習項目に乗艦体験学習は確かに有ったが、入学時に貰った予定表ではそれは大分先の事だと明乃を始めとした晴風の乗員達は思ったからだ。

「ええ、これは実習予定の都合で急遽決まったの岬艦長。」

質問してきた明乃を見ながら古庄教官は答える。

「晴風の復帰にはもう少し時間が掛かります、だからその後の実習予定を考えると、前倒し出来る項目は行なうと言う事になりました。」

晴風は武蔵と一戦で帰港直後沈没してしまった、その後サルベージされ現在修復中だった。

その間当然海洋実習は出来ず、明乃達は陸上で講義を受ける形となっていたのだ。「分かりました古庄教官、岬 明乃以下晴風の乗員は来週より乗艦体験学習に入ります。」

明乃がそう言って敬礼すると、他の乗員達も立ち上がって同じ様に敬礼する。

「結構です・・・まあ困惑する気持ちも分かりますが、見聞を広める為と思つて下さい。」

答礼しつつ古庄教官は明乃達を見ながらそう説明する。

「それで古庄教官、私達が体験乗艦するのどんな艦なんですか？」

明乃の質問に古庄教官は普段彼女達が見た事のない得意げな笑みを浮かべて答えた。

「飛行船支援母艦若宮よ。」

「飛行船支援母艦若宮、元はイギリスのユニコーン型飛行船支援母艦、イギリスとの協定により日本に引き渡され若宮と改名。」

講義が終了後、晴風の乗員達は今度乗艦体験する事になった若宮について、ココちゃんこと納沙 幸子が解説してくれるのを聞いていた。

「飛行船の母艦として運用されると共に他艦の飛行船の補給や修理、整備を支援する飛行船工作艦ですね。」

「工作艦って明石みたいな艦って事か？」

そう聞くのはメイちゃんこと西崎 芽依水雷長だった。

「そうですね、ただ明石は艦艇、若宮は飛行船と言う違いがありますが。」

幸子はそう解説しながらタブレットで明石と若宮の画像を表示させ皆に見せる。

「通常の飛行船支援母艦には無い、飛行船修理施設と補給部品の保管倉庫を持っていきます、だから主に他の艦艇の後方支援が任務ですね、まあその他に飛行船や補給物資、人員の輸送もやっているみたいですね。」

「そうか、多くの任務を請け負っている訳か凄いな・・・」

そう感心するのは副長兼クラス副委員長である宗谷 ましろ、なおシロちゃんと明乃に呼ばれるが本人は受け入れていない。

「・・・まあそうとも言えますが、えっとこれって？」

幸子がましろの言葉に苦笑しつつ画面をスクロールして何かを見つけたのか驚きの声を上げる。

「ココちゃん？」

「あ、すいません実は任務記録を見ていたのですが、若宮は半年前に武器密輸組織が立てこもる小島に艦砲射撃をした事があるみたいですよ。」

明乃の問い掛けに幸子がタブレットから顔を上げて説明する。

「へっ若宮は支援母艦だよな、それが艦砲射撃したのか？なあ普通そんな事するかタマ？」

その説明に芽依は驚き、隣に居たタマちゃんこと立石 志摩砲術長に聞く。

「・・・聞いた事無い・・・若宮は・・・」

「確かにそうだね、第一若宮が積んでいる艦砲つて・・・」

志摩の言葉を聞いて明乃が幸子に問い掛ける。

「近接防御用ですね・・・10.2cm、後は機関砲位ですか。」

ちなみに晴風の主砲は12.7cm単装砲だ、つまり若宮のはそれより威力や射程距離の小さな砲と言う事になる。

これではかなり至近距離に寄らないと艦砲射撃を出来ない事になる。

しかも晴風より大きな艦体でだ、艦砲射撃に詳しい志摩や芽依が驚くのも無理は無いだろう。

「それ以外にも島に突入する強制執行課のスキッパー部隊を発進させたり・・・若宮つて色んな事をさせられている見たいですね。」

苦笑いしながら幸子が説明すると明乃も同じ様に苦笑を浮かべる。

「その若宮ことは大体分かったけど・・・艦長さんつてどんな人なのかな?」

そう言つて聞いてきたのは、航海長であり航海委員を勤める知床 鈴、通称リンちゃんだつた。

鈴としては多少改善したとはいえ、まだ晴風の乗員以外との接触は慣れていないから

だが。

「えつとですね、艦長は神城 綾二等保安監督官……年次的には古庄教官と同期の方ですね。」

「古庄教官と？」

明乃が幸子の説明に驚きの声を上げる。

「はい、しかも同じ武蔵に乗艦されていた様です。」

つまり成績優秀な生徒だった訳だ、まあ艦長をしているくらいだから当然かと皆思ったのだが。

幸子は更に情報をスクロールしながら先を読み進んでいく。

「武蔵では飛行船オペレーターとして優秀な成績を、あ、それ以外にも飛行船の指揮や整備でもですね、それがあつて卒業後に若宮の艦長候補の1人選ばれたみたいです。」

「なるほど……飛行船全般の運用に長けていると言う事で艦長候補になった訳か。」
ましろが更に感心した様に言う。

「1年間の選考期間を経て正式に艦長に就任、艦艇の指揮についても優秀な成績を残していますね。」

「そうだったんだ。」

「うんそれは凄いな……尊敬をせざるをえないな。」

乗艦体験学習3

その日、若宮は横須賀女子海洋学校の専用棧橋に接岸していた。

もちろん乗艦体験学習で晴風の乗員達を乗艦させる為だ。

「艦長、古庄指導教官以下晴風の乗員が到着したそうです。」

若宮の副長から艦長の神城 綾に報告が入る。

「分かりました、それでは行つて来ますので、担当の乗員も来る様に指示を。」

「了解です艦長。」

艦の指揮を副長に託すと綾は艦橋を出てゆく。

艦内を通り舷側に出ると棧橋上に薫を前に集合しているセーラー服の少女達。

そんな少女達を見て、ふと綾は自分が横須賀女子に入学した時の事を思い出す。

自分もかつてあのセーラー服を着て学校生活を送つたのだと懐かしさを感じると共に浮かんだのは。

初めて女子の制服を着せられた事だった、セーラー服の特にスカートの頼りなさと言つたら・・・

頭を振つてその記憶を追い出すと掛けられたタラップを降りて薫達の方へ向かう綾。

その綾に気付いた薫が微笑みながら敬礼をすると晴風乗員達も全員敬礼をしてくる。

「古庄 薫以下晴風乗員、お世話になります。」

「「よろしくお願いします。」」

敬礼に続いて薫がそう挨拶すると乗員の少女達も続く。

「ようこそ若宮へ、艦長の神城 綾です、こちらこそよろしくお願いしますね。」

敬礼を返しつつ微笑んで答える綾、その姿に薫以外の少女達は顔を赤くしてしまう。

事前に顔を知っていたのだが、やはり実際の本人を前にして少女達は改めてその美しさに圧倒されている。

「・・・?」

もつとも綾の方はその理由が分からず、緊張でもしているのかと見当違いの事を思っていたが。

「こほん、神城艦長。」

内心で『ほんとに鈍いんだから。』と呆れながら薫が先を促す。

既に綾の後ろには晴風の生徒達を担当する乗員達が集合を終わって待機している。

「えっと、失礼しました、皆さんは各科担当の指示に従って下さい。」

担当の乗員へ後を任せ綾は少し離れた所に居る薫の傍に行く。

これから各科事に艦内を見学する予定だった。

「それでは皆さんこちらへ着いて来て下さい。」

担当の乗員に導かれて晴風の生徒達は若宮へ乗艦して行く。

「あまりうちの生徒達を惑わさないで欲しいですね神城艦長。」

「・・・言っている意味が分かりません古庄指導教官。」

隣に立つて意地の悪い笑みを浮かべ言ってくる薫に渋い表情の綾は答える。

そんな綾に肩を竦めると薫は改めて親友の顔を見て言う。

「ではあの娘達を宜しくね綾。」

「ええ薫。」

綾もまた親友である薫の顔を見て答えるのだった。

教え子達の様子を見て周ると言う薫と別れ綾は艦橋に戻ってくる。

「お疲れ様です艦長、皆どうでしたか？」

艦長席に座った綾に副長がタブレットを渡しながら聞いてくる。

「多少緊張していたみたいですが、まあ大丈夫でしょう。」

渡されたタブレットの報告に目を通しながら綾は答える。

「・・・彼女達の姿を見て懐かしいと思うあたり私も歳を取ったなと思いましたが。」

多少自嘲気味に話す綾に副長は微笑みながら答える。

「それを言ったら若宮乗員の全員がそうですよ、では出航準備に入りますが？」

「ええ、お願いします。」

敬礼をすると副長は出航準備の為艦橋要員達に指示を始める。

「艦長、晴風乗員の見学は終了、各科にて待機に入りました。」

若宮の出航準備が整った頃、副長から報告が入る。

「分かりました、では晴風の艦橋要員が艦橋に来たら出航します。」

若宮艦内の見学が終わり、晴風乗員達は各々の所属科の勤務場所待機に入った。

後は晴風艦長である岬 明乃以下の艦橋要員が来れば出航となる。

「艦長、晴風艦橋要員到着しました。」

明乃達の担当乗員が彼女達を引き連れて艦橋に入ってくる。

綾は艦長席から立ち上がって明乃達を迎える。

「皆さんようこそ、それでは若宮は出航します、よろしいですね?」

「はい神城艦長。」

明乃は綾の問い掛けに敬礼して答える。

「では出航します、機関始動、錨を上げて下さい。」

明乃の返答に頷き綾は指示を出し始める。

「機関始動。」

「錨を上げ!」

乗員達が指示を復唱し動き始めるのを明乃達は興味深げに見ている。

若宮は晴風と比べれば遥かに巨大な艦だ、艦橋で働く乗員は倍もいる。

「機関始動、問題なし。」

「錨を上げました、全タラップ収容完了です艦長。」

「管制センターより出航の許可が下りました。」

晴風乗員達も出航時の作業は見慣れているつもりだったが、自分達の倍はいる乗員達が、各々役割を果たし連係する姿には圧倒されてしまう。

これが本物のブルーマーメイド艦なのだ・・・

特に明乃は同じ艦長である綾から目が離せなかった、連係する乗員達に所々での確な指示を出している。

それがまるでオーケストラの指揮者、個々の力を引き出しそれを全体の力に高めてゆく。

まさに理想の艦長像を明乃は綾に見ていたのだった。

出航後、若宮は洋上での飛行船の展開や救助訓練を繰り広げる。

もちろんここでも綾の指揮とそれに完璧に答える乗員達の姿があり、晴風の乗員達は興奮を隠し切れ無かった、何しろあの堅物のましろさえ、若宮の副長に「副長としてどうあるべきか？」と興奮した様子で熱心に聞いていたくらいなのだから。

「岬艦長、ご苦労様でした、本日はここまでにしておきましょうか。」

やがて日が落ちる頃、綾は明乃達にそう言つて微笑んでくる。

「あ、はいありがとうございますました神城艦長。」

明乃達は多少疲れた様だったが満足げな表情で答える、それを見て綾は頷いて見せる。

「いえ、明日もその調子でお願いしますね。」

「……はい。」

明乃達は敬礼をすると担当乗員に連れられ艦橋を出てゆく。

「かなり張り切っている様ですが、あんな調子で明日から大丈夫ですかね？」

副長が苦笑いを浮かべながら近付いて来て綾に尋ねてくる。

「まあ初日と言う事で、彼女達も素人と言う訳では無いでしょうから。」

綾は苦笑しつつ艦長席を立つ。

「私は一旦艦長室に下がります、後の事はお願いします。」

「了解です艦長。」

副長の敬礼に答えると綾は艦橋を後にする。

そのまま艦長室へ向かおうとしていた綾はその前に海風に当たろうと、飛行甲板下のデッキに向かった。

だが綾はそこに先客が居る事に気付く、そしてその相手に軽く驚く。

「お疲れ様神城艦長、少し付き合つて貰つても良いかしら？」

指導教官の古庄 薫だつた。

乗艦体験学習4

「教官がこんな所で油を売っていて良いんですか？」

デッキで声を掛けられた綾は薫と並んで、彼女から貰ったサイダーを手に聞く。

「実習時間は終わったしね・・・やるべき時にやるべき事をしたならば後は何をしても問わない、この艦の流儀でしょ。」

綾の多少皮肉の籠った問いに薫は悪戯っぽい笑みを浮かべて答える。

そう綾はやるべき時にやるべき事が出来るなら、他の場面で皆が樂する事を大目に見ている。

これは若宮における綾の方針、薫の言う所の流儀だった、これに対してはブルーマーメイドの一部の人間からは規律が保てないと批判を受ける事が多々ある。

だが常にガチガチになっていたら咄嗟の時に動けなくなる、それでは意味が無い言うのが綾の考えだ。

「・・・それって誰に聞いたんですか？」

とは言え批判の対象になりやすいのでその流儀は他の人間には話さない様に綾はしているのだが。

「この艦の副長によ、貴女の事を聞いたら嬉しそうに色んな話をしてくれたわ。」
「彼女がですか・・・まったく。」

若宮で初めて出会った時は、規則に厳しい融通の利かない女性だったのだが、今では艦内では一番オンオフの差が激しくなってます。

まあこれは綾の影響が多々有るのだが本人は気付いていない。

「ふふふ・・・それであの娘達はどうかしら？」

綾の事をかわかう親友の顔から教官の顔に戻り質問してくる薫。

「まだ初日ですから・・・どう向き合えば良いか、悩み処ですね。」

溜息を付いて答える綾に薫は内心やはり任せて良かったと思つた。

薫として全てが簡単に済むとは思つてはいない、大切なのは明乃達晴風の乗員に自分達を見守ってくれる人間が居る事を分かつてもらう事だと考えている、様は孤独に陥らない事だ、陥れば待つているの絶望だけだ。

「それで良いと思うわ、流石は綾ね・・・それじゃ早速お願い出来るかしら？」

「・・・それって教官の仕事だと思いませんが。」

再び親友の顔に戻り薫は楽しそうに言ってくる、それに対し綾は顔を顰めて答える。

「もちろんフオローはします、だからお願いしますね神城艦長。」

そう楽しそうに言つて薫は「それじゃ後で。」と言つて艦内に戻つて行く。

それを見て再び溜息を付くと綾は薫が入って行ったハッチとは別のハッチを見て声を掛ける。

「そんな所に居ないで出て来て下さいい岬艦長、それに皆さんも。」

暫らくの静寂の後、ハッチから艦長である明乃と艦橋要員の娘達がぼつの悪い表情を出て来る。

「あの・・・何時からお気づきになっていたんですか？」

明乃が気まずそうに聞いてくると、綾は肩を竦めて答える。

「私と古庄教官が話し始めた時からです・・・ちなみに教官も気付いていましたよ。」

つまり最初からと言う事になる、しかも教官にもばれていた事になり皆更にぼつが悪い表情になる。

「その・・・盗み聞きするつもりはなかったんですが、申し訳ありませんでした。」

明乃はそう言つて頭を下げながら言う。

「貴女達がそんな事するとは思っていませんよ岬艦長。」

微笑みながら綾は明乃の謝罪に答える、まあ教官と現役の艦長の会話に生徒達が割り込むのは無理な話だとは想像出来るからだ。

「あの・・・神城艦長と古庄教官とは同期とお聞きしたのですが。」

ましろがおずおずと聞いて来る、明乃達他の艦橋要員もそれが気になるのか綾を見つ

めている。

「ええ、同じ教育艦で3年間一緒にね、所属科は違ったけど。」

綾は飛行科で薫は航海科所属だったのだが、入学式での出会いもあつてか付き合いは長い。

「だからあんなに親しげだったんですね。」

明乃がそう呟くと綾は皆を見渡して微笑みながら答える。

「皆さんだつてそうなりますよ、今同じ場所で同じ時間を共有しているんですから。」

その言葉に明乃達はお互いの顔を見合わせる。

「だから今を、同じ場所で同じ時間を共有している事を大切にしてください、それが有れば例え……」

そこで綾は言葉を途切れさせる、明乃達はそんな彼女を不思議そうに見る。

実は綾はこう続けるつもりだった「例え失つたとしてもそれを乗り越えられるから。」と……

綾も薫もこれまでに何人かの同期を事故などで失っている、それだけブルーマーメイドの職務は厳しいと言う事になる。

明乃達もやがては遭遇するだろう、確かに前回の事では晴風の乗員に幸いにも死傷者は出なかった。

だがこの先そんな幸運が続く訳が無い、ましてやブルーマーメイドになればその可能性は高くなる。

そんな時、同じ場所と時間を共有した仲間の思いを引き継ぐのは生き残った者の責務だと綾は思う。

とは言え今話して萎縮させる事も無いだろうし、何より人に言われるより自分自身で体験しそう考える様にならないければ彼女達の為にならないだろう、まあその為の助言なら幾らでもして挙げるつもりだが。

「いえ何でもありませんよ。」

だから綾はそう言うと言うと慈愛を含んだ笑みを明乃達に向けるだけだった。

「何か非常に気になるんだけどな．．．」

「．．．うい．．．」

「うう．．．何んなんでしょうか。」

志摩や芽依は不服な、鈴は不安そうな声を挙げるが、明乃やましろ、幸子は綾がその続きを語ってはくれないという確信があった。

様は自分で気づけと言う事なのだろう、そしてその為には幾らでも手助けをしてあげますと、綾は言いたいのだろうと明乃は思い何だか心が軽くなってくるのだった。

図らずも明乃達が見守ってくれる存在を認識した瞬間だった。

「さてそろそろ戻った方が良いでしょう、食事や入浴の時間が立て込んでいるのでしょ。」
懐中時計、艦長になると支給される物、を見て綾は明乃達を促す。

「あ、そうだった皆食堂へ行くよ。」

「そうです艦長、遅れたら皆に迷惑が掛かります。」

「と言うか食事抜きですよ古庄教官だったら。」

「冗談じゃねえぞ、食事抜きなんてやってられるか、タマ急ぐぞ。」

「うい、今日はカレーの日、逃す訳にはいかない。」

明乃達は慌てて行くこうとするが、ましろの「艦長、敬礼を・・・」との声に、皆綾に敬礼をする。

「「「失礼します神城艦長！」「」」」

「はい、皆ご苦勞様。」

綾の敬礼を受け、明乃達はデッキを出て行く。

「皆の航海に幸あらん事を。」

見送りながら綾はそう呟く、それが果たして叶うか分からないにしても、彼女はそう祈りたかった。

乗艦体験学習5

何処までも霧が続いている。

「酷い霧ね．．．」

若宮の臨時左舷航海管制員、見張りに就いた山下 秀子が呟く。

体験学習の一環で晴風の乗員達はそれぞれの科で業務を担当していた。

と言っても正規の乗員ではないのであくまで補助だが。

秀子も正規の航海管制員と共に見張りに立っていたのだが、正規の乗員に呼び出しがあり、艦内に戻ってしまったので今は一時的に彼女1人だけであった。

まあ晴風の航海管制員としての経験があるので秀子はそれほど緊張はしていなかった。

「ははは、何か出そうな雰囲気．．．って縁起でもない。」

双眼鏡を覗き込みながら秀子は呟く、どうも1人だと変な考えをしてしまうと苦笑しながら。

頭を振って再び双眼鏡を覗き込む秀子の視界に何かが入ってくる。

「えっ．．．?」

それは船の様だった、しかしそれなら知らせが入る筈だ、秀子は首を捻る。

改めてよく対象を見ると、中型の帆船だった、ただ船体が霧に覆われているせいで詳しい特徴はもちろん船名すら判別出来ない。

躊躇していたの一瞬で、秀子は直ぐにインカムを通して艦橋に一報を入れる。

「こちら左舷管制、距離6百に船舶を発見、方位020、本艦とすれ違う進路を取りつつあり。」

『こちら艦橋、確認します、距離6百に船舶、間違いありませんか?』

艦橋でこの時間帯に当直に就いている乗員から確認の連絡が入る。

「はい、間違い・・・あ、あれ?」

もう一度確認しようとした秀子の視界からその帆船は消えてしまった。

『左舷管制、報告は明瞭に願います、間違いありませんか?』

「その・・・対象の船舶を見失いました、確認出来ません。」

呆然となりつつも、管制員として状況を報告する秀子。

『了解しました・・・山下管制員は正規管制員が戻りしだい艦橋へ出頭して下さい。』

「了解です。」

何となくもやっとした気持ちを抱きながら秀子は答える。

そして正規管制員戻って来ると秀子は艦橋に向かう。

「ご苦勞様です、状況をもう一度説明してもらえますか？」

艦橋に着いた秀子を待っていたのは、艦長の綾と副長の天音だった。

これには秀子はかなり動揺させられた、もちろん事情を聞かれると思っていたが、艦長と副長まで出て来るほどとは思っていなかったからだ。

時間的に言えば艦長と副長の当直時間は終わっている、つまり2人は呼び出されたと言う事になる。

秀子もこれはかなり大事になっていると思いい顔を青くしつつ報告をする。

「0440、距離6百に船舶を発見、船種は中型の帆船と思われませんが、船名は不明、艦橋へ報告中に見失いました。」

報告を聞いた綾は乗員の1人に顔を向ける。

「その時間の前後に若宮の周囲に他の船舶は確認していません。」

レーダー担当の乗員らしい女性が答える。

これってまずいんじゃないかと秀子は益々顔を青くする、不適切な報告をしたと言う事で何か言われると・・・

「分かりました、山下管制員、ご苦勞様でした、下がって下さい。」

「えっ・・・？」

だが綾から言われた言葉は秀子の想像したものとは違った。

「あの……良いんでしようか？」

思わず聞き返す秀子を綾は静かに見つめ返す、なまじ美人なだけに妙に迫力があり思わず固まる。

「山下管制員、貴女が海洋学校で管制員として最初に教官に教えられた事を覚えていますか？」

意外な問い掛けに秀子は答えられない。

「見たものを素早く、正確に伝える、それが何かを考えるのは上の仕事だと、教わった筈です。」

確かに秀子はそう教わった事を思い出す、そしてこう付け加えられた事も。

『それを忘れた者は大きな錯誤を起こす。』と……

「……そう言う事です、理解して頂けましたか？」

「はい……失礼します。」

秀子はそれ以上何も言えず、敬礼をすると艦橋を出て行く。

「少しきつかったでしょうか？」

それを見送りながら綾深い溜息を付くと傍らの天音に問い掛ける。

「どうでしょうか？人によつては叱責する様ですから、艦長はまだ良いほうだと思いますが。」

天音はそう言つて肩を竦める。

「それにしても……初めてで遭遇するとは彼女達は運が良いのか悪いのか分かりませんね。」

「確かにそれは微妙なところですね。」

綾と天音は苦笑する。

「ところで艦長、部屋にお戻りになられますか?」

天音が時計を確認すると聞いて来る、2人共就寝中に呼び出されたのだ。

「いえ、こうなつてはもう寝られませんし、このまま待機しているつもりです、副長は下がつても構いませんが。」

懐中時計を見て綾は答える、とても眠る気にはなれなかつたからだ、ただ天音を付き合わせる程では無いと思つて彼女には下がる様に言つたのだが。

「艦長が待機なされるのなら副長の私もそうします、まあ眠れないのは同じですし。」

どうやら下がる気は無いらしい、生真面目な彼女らしいと綾は微笑む。

「分かりました……では眠気覚ましのコーヒーが欲しいですね、もちろん副長の分も。」

「了解です、直ぐに手配を……」

天音も微笑んで頷くと艦内通話器を取り上げて主計科に連絡を、いや出前を頼む。

それを横目に見ながら綾は艦長席に座りなおし目を瞑る、別に眠くなつた訳では無

かった。

これからの事を考える為にだ・ ・ ・ 厄介事はこれで終わりでは無いだろうから。

乗艦体験学習6

翌朝・若宮第3会議室

晴風の乗員達は乗艦体験学習中の教室としてこの会議室を使用していた。

08:00、乗員達は次々と会議室に集合して来る。

「皆お早う。」

艦長の明乃はそう言つて皆を見渡し、ふと元気の無い山下 秀子に気付く。

「ねえメイちゃん、しゅうちゃんどうしたの？」

気になった明乃は芽依に聞く。

「分かんないんだよな・・・朝来た時からああでさ。」

芽依は肩を竦めて答える、その秀子は同じ航海管制員である内田 まゆみに声を掛けられているが、ずっと俯いたままだった。

これは『海の仲間はみんな家族。』と常に考えている明乃にとっては由々しき事態だった。

「しゅうちゃん、何かあったのかな？話してみてくれないかな。」

その声にようやく秀子は顔を上げる。

「あ、艦長……」

秀子は明乃を見ると再び顔を伏せる、早朝の事を話すべきだが、どうしても躊躇してしまう。

とは言え何かあれば艦長への報告は乗員としては義務だ、例え乗艦体験学習中でもあつても。

だから秀子は有った事を、明乃や他の乗員達に話す。

「それは……うーんどう対処すべきなのかな？」

艦長になってまだ日の浅い明乃はどう判断すべきか迷ってしまう。

「神城艦長の言われる事は間違いいではないと思うが……」

副長であるましろも困惑気味に言う、確かに航海管制員Ⅱ見張り員は目であり、考える役目では無いが。

「でもな……何かしらの説明はあつても良いはずだぜ、これじゃ山下が納得出来ねえのも分かる。」

機関科の柳原 麻侖機関長、通称マロンちゃんは腕を組みながら憤慨した様に言う。

その辺は明乃達も同じ気持ちだ、秀子の見たものが何であれ、まあ皆それが何かおおよそ見当はついていたが、何故綾がちゃんと説明してくれないのかが分からないからだ。

「……岬艦長？」

当惑気味でざわついた晴風の乗員達に会議室に入って来た古庄 薫指導教官が戸惑った声を掛けてくる。

「あ……全員整列！、お早うございます古庄教官。」

明乃の声に乗員達は整列し敬礼をする。

「ええお早うございます皆さん。」

「総員着席。」

薫が敬礼を返すと明乃の号令で着席する乗員達。

「それでは本日の実習について……と言いたいところですが岬艦長何かありましたか？」

先程の皆の姿に薫は何かあると思い、明乃に確認する。

「はい実は……」

流星は教官だと明乃は思いつつ、秀子が見た物、その時の綾が取った対応、皆が疑問に思った事を説明した。

「そう言う事ですか、山下さんの見た物については私には何んだとは言えませんが、神城艦長の対応について言えば……まあ彼女だからと言う所ですね。」

「……？」

明乃達は顔を見合わせる、綾だからと言う点が良く理解出来なかったからだ。

「神城艦長は職務をきちんと果たしたのであれば、例え学生だったとしても、その言葉を頭から否定しません、山下さん・・・貴女はそう見なされ、報告は問題無いと判断されたんです、自信を持ちなさい。」

「えつと・・・」

思わず誉められ（？）秀子はあたふたしてしまふ。

「ただ山下さんの見た物についての説明が無かつたのが皆納得が出来ないと言う点については理解します、だから神城艦長に聞いてみましょう。」

「それって良いのですか？」

現役ブルーマーメイドである綾に学生である自分達がそんな事をしてもし良いのかと、明乃は心配になったので確認してみる。

「学生として疑問に思った事を質問するのは別に問題はありません、神城艦長はそういう点についても理解のある艦長ですから。」

その辺は綾らしいと薫は内心微笑んでしまふ、だからこそ艦長として敬愛されているのだと。

「もちろん神城艦長の職務を妨げない限りですが、彼女は教官では無いですからその点は留意する必要があります、その辺は私が確認しますので実習終了後岬艦長と山下さんは残って下さい。」

「はい教官。」

明乃と秀子の2人が返答すると、薫は微笑みながら皆を見渡す。

「それでは実習の方をがんばって下さい、では解散。」

明乃以下晴風の乗員達は立ち上がり薫に敬礼をすると、それぞれの実習場所に散って行く。

敬礼を返し、教え子達を見送った薫は思案顔をする。

「取りあえず綾の当直時間を確認しないと・・・まあそれは副長に聞けば大丈夫でしょう。」

あの副長、綾の行動を数分刻みで把握している様だしと薫、何だかストカーじみているかと苦笑する。

敬愛されるのも大変だが、まあがんばってと薫は親友にエールを送るのだった。

19:00

教官の薫は明乃と秀子と共に若宮の艦長室前に来ていた。

副長の話では綾は18:00に当直終了後食事を済ませて、もう艦長室に戻っている筈だった。

「神城艦長、指導教官の古庄 薫です、入ってよろしいでしょうか?」

ドアをノックし薫が呼びかける、傍らに居る明乃と秀子は緊張した面持ちだ。

『古庄教官？ええどうぞ。』

答えを聞いた薫はドアを開け艦長室に明乃と秀子を伴って入室する。

「どうかしましたか古庄教官？・・・岬艦長に山下さん？」

艦長室の机に座ってタブレットを見ていたらしい綾は、薫と共に入って来た明乃と秀子に目を丸くする。

「少し時間を頂きたいのですが構いませんか？」

敬礼をして薫はそう切り出す。

「それは別に構いませんが、お二方が来たと言う事は・・・」

薫の後ろで同じ様に敬礼をしている明乃と秀子を見て、綾は事情を察する。

「ええお察しの通り神城艦長に岬艦長と山下さんが聞きたい事があるとの事で連れてま
いりました。」

「・・・分かりました、まあ座って下さい皆さん。」

綾はそう言つて座っている執務机の前にあるソファに着席する様に薫達を促す。

「ありがとうございます神城艦長。」

「あの、失礼します。」

「し、失礼します。」

3人が着席するのを見ながら、綾はやっぱり厄介事からは逃げられないと内心溜息を付

く
の
だ
っ
た
。

乗艦体験学習7

ソファに座る明乃と秀子を見ながら綾はどうしたものかと考えていた。

彼女達の聞きたい事は何となく察している綾だったが、納得してもらえない話が出るか自信が無い。

「・・・取りあえずコーヒーでも飲みますか？」

綾は立ち上がると艦長室に持ち込んでいるコーヒーメーカーに向かう。

「えっ、神城艦長にそんなお気遣い無く・・・」

明乃が慌てる、学生の身で現役ブルーマーメイドの艦長にそんな事をさせる訳にいかないと思つて。

「気にしないで下さい、ああ2人共コーヒー大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫ですけど・・・」

「私も・・・」

明乃と秀子は恐縮しながら答える。

「2人共気にしなくても大丈夫よ、神城艦長にとっては趣味みたいなものだから。」

横目で見ながら薫は何処か楽しそうに言う。

「まあそんな所です。」

綾は苦笑しつつコーヒーの準備を始める、まあ確かに間違いで無いのだが。

ちなみにこれは若宮が立ち寄った港にあった街で偶然知った喫茶店の影響だったりする。

そのコーヒーがまた美味しかったのだ、だから綾は無理を言って豆を貰ったのだ。綾はその時知り合ったウイトレスでありマスターの娘さん、まだ中学生だったを思い出す。

ブルーマーメイドを目指して来年受験したいと言っていたが・・・そう言えば頭に乗せていた生き物はなんだっただろうかと綾は思い出す度に考えてしまう。

「さあどうぞ、砂糖とミルクもありますよ。」

入れたコーヒーを3人の前に置くと綾も自分用に入れたものを手に席に座る。

「あ、はい頂ます。」

「い、頂きます。」

緊張した明乃と秀子はそう言って、砂糖とミルクを入れて口を付ける。

「あ、美味しいです。」

「本当だ。」

明乃と秀子は笑顔を浮かべる。

「うん、何時飲んでも美味しいわね。」

薫もコーヒーに口を付けると綾に微笑んで言う。

「古庄教官は前に神城艦長が入れたコーヒーを飲んだことがあるんですか？」

明乃が香りを楽しみつつ飲んでいる薫を見て聞いてくる。

「ええ、綾、いえ神城艦長が私の部屋に来た時にね。」

お互い休暇が合った時に、綾が薫の部屋を訪ねる度にわざわざ豆を持って来て入れているのだった。

本当に2人は仲が良いんだなど、感心すると共に何だか羨ましい明乃だった。

「さて岬艦長に山下さん、お2人が私に聞きたい事とは一連の対応と・・・何を見たかですかね？」

コーヒーを一口飲むと綾は明乃と秀子に問い掛ける。

「はい、その一応は古庄教官にお聞きしたのですが、ああ何を見たかについては・・・」
薫の顔を見て明乃は答える。

「古庄教官の言われた通りですよ、私は山下管制員が職務を果たし、貴女が見た事は間違いないと判断しました。」

薫の言った事を肯定して綾が明乃と秀子に答える。

「もしかするときつい言い方だったかもしれませんが・・・その点は許して下さい。」

明乃と秀子に頭を下げつつ謝罪してくる綾に2人は慌てた様に答える。

「いえそれは気にして・・・いや気になりましたが古庄教官に言われたし。」

秀子はそう言つて薫を見る。

「そうですね神城艦長ならそう判断すると思ひましたから。」

どや顔(?) をする薫を見て綾は苦笑する。

「まあそういう事です、そしてお2人がもつとも気にしている、何を見たかですが・・・何だと思ひますか?」

表情を引き締めると綾は明乃と秀子を見て質問してくる。

問われた明乃と秀子はお互い顔を見合わせる。

「・・・ここには私達しか居ませんから、言つても構いませんよ。」

躊躇している明乃と秀子はその視線を薫に向けると、彼女は頷いて見せる。

「その・・・幽霊船ですか?」

恐る恐る明乃は綾に答える、それが海に生きる者達にとって禁忌である事は学生の身でも知っているからだ。

「正確には識別不明船と言いますけどね、まあおうむねそれで間違つていません。」

綾は肩を竦めて言うとう艦長室に深い沈黙が落ちのだった。

乗艦体験学習⑧

「識別不明船ですか？」

明乃はそう言つて首を傾げる、当然秀子もだが。

「まあブルーマーメイド内の正式名、様は役所用語と言うわね。」

薫はコーヒーを一口飲むと明乃と秀子に教官として解説する。

一応国際機関であるブルーマーメイドがオカルトマニアが使うような用語を使えないと言うのもある。

『識別不明船』なら密輸船や海賊も含めるから体面を保てる訳だ、もちろんこんな話しは明乃達学生には話せないが。

「貴女達が遭遇したものはそんな船の一つだと思つて下さい……海の上では見たくも無い物をこらからは嫌と言うほど見る事になりますから。」

綾の言葉に明乃と秀子は顔を見合わせる。

「それほど深刻に考えなくても今は構いませんよ、ただ心構えだけはしておいて下さい、貴女達がこれから生き、守り、往く海は様々なものをその中に隠しているのだと言う事を。」

諭すように綾は明乃と秀子に微笑みながら話す。

「他に聞きたい事がありますか？」

「あの・・・神城艦長は今までにそんな船を見た事があるんでしょうか？」

明乃が躊躇いがちに綾に聞いてくる。

「そうですね・・・」

暫し考え込んでいた綾が話し始める。

「前方を横切っているのが見えるのに終始レーダーに映らなかつた船とか、すれ違つた船の船名を後で照会したらもう何年も前から沈没・失踪のリストに載っていたものだったとか。」

「・・・・・・・・」

思わず明乃と秀子は身体を震わせ言葉が出ない。

「ブルーマーメイドのデータベースにも載ってますから後で見ると良いですよ、では本日の講義は終了です。」

「結構貴女も意地が悪いわね、さっきの話ってブルーマーメイド内では有名なやつよね・・・」

話がまだ有るからと言って明乃と秀子を先に帰し、残つた薫は2人きりになるとそう言つて綾を見る。

「まあそうですけどね．．．私も艦長になった直後に散々聞かされ脅されたものです。種を明かせば、前者はレーダーシステムの故障が原因で、後者は密輸組織が偽装の為使用した、と言うのが真相だ。」

今頃明乃達はデータベースの記述を見て無然とした表情で居るかもしれないと綾は苦笑する。

まあこれは先達から後に続く者達へのささやかなエールと心構えを教える為の逸話なのだ。

「確かに私も先輩の教官から散々聞かされたけどね。」

薫はそう言つて肩を竦める、ある意味ブルーマーメイド内の伝統みたいなものなのだ。

「でも．．．あの娘達が見た物については貴女旨く話を逸らしたわね。」

「流石に薫は誤魔化せなかつた様ですね、そうです彼女達の見た物は先程の話とは別なんです。」

薫の指摘に綾は真剣な表情で答える。

「例の『帆船』実はこの海域では結構有名な『識別不明船』なんです、民間の船舶はもちろんブルーマーメイドやホワイトドルフィンの艦艇にも目撃例があるんです。」

艦長室に何とも言えない沈黙が落ちる、綾と薫は暫し持っているコーヒークップの中

身を凝視する。

「あまりにも多発するので一度ブルーマーメイドとホワイトドルフィンが共同で調査した事があります。」

そう言つて深い溜息を付く綾を見て薫が尋ねる。

「それで・・・？」

「何の手掛かりも掴めませんでした、それどころか調査終了直後にまた目撃されて・・・」
綾と薫の間にまた沈黙が落ちる、艦長室に置かれた時計の時を刻む音だけが響く。

「そう言えば若宮もこの海域をよく通るんでしょ、目撃した事あるのかしら？」

薫の問い掛けに綾は複雑な表情を浮かべて答える。

「実は今まで一度も無かつたんです、それが今回晴風の娘達を乗せた航海で遭遇ですからね、しかも発見したのが晴風の航海管制員。」

その意味する事に気付き薫もまた複雑な表情を浮かべる。

「あの艦には幸運と不幸で両極端な境遇の娘達が乗ってるからかしらね。」

何事も幸運で切り抜ける明乃と常に不幸に苛まれるましろが晴風に乗艦しているからと薫。

「それはまた・・・でもそれがあれを呼び寄せたと言うのは説得力がありますね。」

そう綾が呟いた後、2人は暫らく黙つてコーヒーを飲み続けるのだった。

「くそこんな夜に見張とは付いていないぜ。」

見張りに立っている男の船員はそう言つて愚痴る。

夜の闇と深い霧につつまれた海域を船員の載つた船は航行していた。

「早く変わつて欲しいぜ・・・何だあれ?」

双眼鏡を覗いていた船員は思わず呟く、何か船の前方を横切つて・・・

「おかしいな他の船の接近なんて連絡ないぜ・・・つてあ、あれは!?!」

船員はそれが帆船である事に気付き叫ぶとその場に腰を抜かしてしまう。

「で、出たああ!!」

霧の海を人知れずその帆船は行く・・・今日も。

ブルーマーメイド強制執行課 1

「強制執行課の支援ですか？」

若宮の副長は艦長である綾の言葉に繭を擧めて聞き直す。

「ええ、安全監督室情報調査室が内偵をしていた密輸組織の拠点が見つかったらしいです。すねそれで……」

支援任務を終え横須賀基地へ帰港中だった若宮にそんな命令が入ったのだ。

「副長の言いたい事も分かります、ですがこれも任務ですから。」

「それは承知しているつもりですが……」

何時もは任務に真摯な副長が見るからに気が進まない表情には理由がある、ずばり強制執行課絡みだからだ。

強制執行課、正式名はブルーマーメイド強制執行課保安即応艦隊。

その名の通り、任務は犯罪者相手の強制執行、制圧し逮捕を行う、ブルーマーメイド内でもその荒つぽさで有名な艦隊だ。

安全監督室から要請があれば即座に現場に急行、必要とあれば強力な火力とスキップパーによる突入部隊で相手を瞬く間に鎮圧する、その為一部の者達には海賊戦法と擲楯

されているのは有名な話だ。

その為か隊員達も気性が激しい者が多く、他の艦と組むと必ずと言うほど双方の間に軋轢が生まれると言われているのだ。

だから一緒に行動する事になる艦艇の艦長はその扱いに苦勞させられるらしく、それがあつて誰も強制執行課との共同作戦を歓迎する者は居ないと言われている。

「副長、べんてんとの会合ポイントへ向かいます、航海科に指示を。」

「了解です艦長。」

だが何時もと変わらない綾を見て、うちの艦長なら大丈夫だろうと確信し副長は敬礼して答える。

会合ポイント・洋上

『艦長、べんてん到着します。』

見張り員の声が艦橋に設置されたスピーカーから響く。

「モニターを作動状態に。」

綾の指示で艦橋前面に設置された大型モニターが点り、接近してくるべんてんが写しだされる。

その艦体は通常の白と赤のブルーマーメイド艦とは違い漆黒だ、これもあつて他の者達から余計畏怖される原因にもなっている。

この漆黒は相手を威嚇する意味と共にレーダー探知を妨害する為だとは、ブルーマーメイド内でよく噂される話で綾も聞いた事がある。

そんなべんてんを見つめていると艦長席に据え付けられた艦内電話がコール音を鳴らす。

『艦長、べんてんの宗谷艦長から通信です。』

「繋いで下さい。」

『了解です、暫らくお待ち下さい。』

無線室からの連絡に綾はべんてんとの通信を繋ぐ様指示する。

『ザア・・・』

回線を繋ぐ雑音がした後、威勢のいい声が綾の耳に飛び込んでくる。

『べんてん艦長の宗谷 真冬だ、若宮の神城艦長か!』

宗谷 真冬、苗字で分かる通り名門宗谷家の次女だが、その言動から彼女だけ別の遺伝子が入っているとブルーマーメイド内では有名な女性だ。

何しろ艦長である真冬が率先して突入部隊を率いるものだから、海賊船長との二つ名が有るくらいだ。

ちなみに彼女の姉、宗谷家長女の宗谷 真霜は安全監督室情報調査室所属の優秀な隊員で、綾にとっては後輩に当たる。

その関係で何度か真霜と会った事があるが、確かに姉とは全く似ていないと綾は内心苦笑する。

ちなみに真冬も階級は同じだがブルーマーメイド内では綾の後輩の筈なのだが当人は忘れていたため口だった。

まあ綾は気にする様な性格では無いのでそのまま、ただ隣に控えている副長は漏れ聞こえて来る真冬の声に不服そうだったが。

「はい若宮艦長の神城 綾です、初めまして宗谷艦長、今回は宜しくお願いします。」

『・・・おお、こちらこそ宜しくな神城艦長。』

何故か勢いが少々弱くなった真冬の様子に綾は不思議そうな表情を浮かべる。

気を悪くする事でも言ったのかと綾は思ったのだが、真冬がそうなのはそう言う事で無かった。

と言うのも真冬が宗谷家と強制執行課の人間の為か、相対する側は露骨なおべっかいを言ってくるか嫌味な態度を取る事が多いのだ。

だが綾はそのどちらでもない事に真冬は一瞬戸惑ってしまったのが原因だったのだ。

もつとも直ぐに面白い奴だなど、ある意味先輩対して失礼な事だとは思わず真冬は内心にんまりと笑うと何時もの調子を取り戻す。

『それじゃ早速作戦の説明に入るぜ神城艦長。』

「分かりましたお願いします。」

この時点で真冬は綾の事を気に入り始めていたのだが、当人はまだそれに気付いていなかった。

作戦はそれ程複雑な物では無かった。

若宮が飛行船を使い空から密輸組織の拠点を偵察し、規模や人数を確かめた後、彼等を接近させ、火力で抵抗する意思を奪い、その後執行部隊をスキップで突入させて制圧する。

まあ強制執行課が何時も使う常套手段、そう海賊戦法そのままだったからだ。

一方飛行船支援母艦である若宮にとつては普段の任務とさほど変わらない単純なものだった。

「・・・とは言え、そう簡単に進んでくれるのなら良いんですが。」

真冬の通信を終えた綾に副長が気掛かりそうに話し掛けてくる。

それは強制執行課と作戦を行なうと、必ずと言っていいほど予想外の厄介事が起こると言われているからだ。

「副長が心配する気持ちは理解しますが、まだ起こっていない事を心配しても仕方がありませんよ。」

綾もそう言った強制執行課絡みの話しは聞いていたが、まだ起こっていない事を気に

してもと思い、副長を諭す。

「そうですが私としては・・・」

副長が言いかけた同時に艦内電話がコール音を鳴らす。

「はい、艦橋です。」

『こちら無線室です、べんてんの宗谷艦長から緊急の連絡が入ってます。』

それが綾と若宮乗員達にとって厄介事の始まりだった。

ブルーマーメイド強制執行課2

「申し訳ありませんが宗谷艦長、もう一度言ってもらえませんか。」
べんてんの真冬から入った緊急連絡は確かに深刻な物だったが。

問題は真冬から出されたその打開策の方だった、だから綾は思わず聞き直してしまっただのだ。

『だから言ってるんだろう、若宮で艦砲射撃をして、スキッパー部隊を発進させてくれ、言ってるんだよ神城艦長。』

どうやら聞き間違いでは無かった様で綾は周りの副長を含めて乗員達を見る。

真冬との会話内容は艦橋内にも聞こえており、全員困惑とそして怒りを浮かべている、綾は溜息を付く。

それはそうだろう、若宮はあくまで行船支援母艦であり、べんてんの様な艦艇とは違うのだから。

なのに真冬はその若宮に艦砲射撃で相手の抵抗の意思を奪い、あまつさえスキッパー部隊を発進させると言っているのだから。

なぜこうなったのか、それはべんてんが機関に故障を起こしてしまった事が原因だっ

た。

その為べんてんは作戦に使用出来なくなってしまうた。

「・・・代わりの艦艇は駄目なんですか？」

『今から手配しても最低12時間は掛かる・・・それくらい時間があれば連中がこちらの動きを知って証拠隠滅を図って逃走出来る。』

「・・・・・・・・」

『そうなれば情報調査室が苦勞した事が全て無駄になる、それは出来ね相談だ。』

真冬の言う事も理解は出来る、せっかく情報調査室が密輸組織の拠点を突きとめた事が無駄になるかもしれない。

「宗谷艦長の言い分は分かりました、しかし私には乗員と艦に対する責任があります、それは理解して頂けますね。」

作戦が失敗する事は確かに避けたいが、だからと言って乗員と艦を危険に晒す事には出来ない。

『ああ分かつているさ、だから神城艦長、お前さんが判断してくれ・・・行くか逃げるかを。』

ずるい聞き方だと綾は思う、ただこちらに判断の権限を渡したと言う事は、どちらでも従うという真冬の意味を示しているのだろう。

「言っておきますが、これを海上安全整備局は問題とするでしょう、お互い経歴に傷が付くかもしれません、それでも実施する気ですか。」

当然だ、若宮は支援を指示されたのだ、べんてんの代わりを務める事を良しとはしない可能性はある。

そうなれば依頼した真冬も、受けた綾も責任を追及されるだろう。

『そんな物くそ食らえだ神城艦長、俺は出来る可能性があるのに逃げるのは性に合わないねえんだ。』

なるほど彼女らしい言い分だと綾は思う、だとすれば自分の答えは決まっている。

「了解しました、ただ艦砲射撃とスキッパー部隊の突入タイミングは偵察の結果、私が判断しますが構いませんね。」

『・・・ああ神城艦長の判断に従うぜ、それは約束する。』

「結構です、ではスキッパー部隊の受け入れの準備をするので暫らくお待ち下さい。」
「分かった・・・神城艦長、あんた容姿に似合わず度胸あるんだな、気に入ったぜ。」

「そう言う事は作戦が成功したら言ってお下さい宗谷艦長。」

『ふふ・・・そうだな、じゃ待つてるぜ。』

真冬との通信を終わり、綾は副長を説得する為声を掛けようとしたが・・・

「整備科に連絡、スキッパー部隊の受け入れを準備させます艦長。」

だが副長は綾の決定に異義を挟む事も無く受け入れる、他の乗員達も同様に。

「副長、私は……」

「我々は艦長の決定に従います……艦長が間違つた判断をされるとは思つていませんから。」

肩を竦め副長は綾の問いに答える、その顔に絶対の信頼を浮かべながら。

時々綾は皆にこれ程までに信頼される事をしたらうかと思う事がある。

「感謝します副長、皆さん。」

それは分からない、がそうであればその信頼に答える様にしなければならぬと綾は決意する。

「スキッパー部隊の受け入れを完了しだい、飛行船での偵察を開始します。」

「了解です艦長。」

スキッパー部隊の受け入れ完了後、綾は若宮を密輸組織の拠点へ向けさせる。

「飛行船の発進準備は完了してますか？」

「はい、何時でも発進可能です艦長。」

綾の問いに副長が答える。

「それでは発進させて下さい、あと気付かれない為に高度と距離を取るのを忘れないように。」

「了解です艦長、飛行船を発進、高度と距離を十分取る様にします。」

副長は復唱すると、艦内通話器を取り上げて、飛行科に指示を出し始める。

「艦長、べんてんの宗谷艦長をお連れしました。」

そんな中、スキップパー部隊を率いる真冬が艦橋にやって来た。

そう率いる為にだ、聞いた話し通り、艦長自ら突入部隊を指揮するらしい、海賊船長の名は伊達ではないらしいと綾は苦笑しつつ艦橋に入ってくる真冬を見る。

通常のブルーマーメイドとは違う黒色の制服にマントを着用したショートカットの女性だ。

「よお神城艦長、世話になるぜ・・・何だ天音この艦に乗艦してたのか?」

挨拶した真冬は綾の後ろに控えていた副長、桜井 天音を見て嬉しそうに話し掛ける。

「お久しぶりですね宗谷艦長。」

それに対し桜井副長は何時も通りドライに答える、公私を弁えているからだが。

「2人はもしかして?」

「同期です艦長、ですが今は任務中なのでお気遣いは無用です。」

「何だくそ真面目ところは変わってねえな。」

綾の問いに桜井副長は表情を変えずに答え、真冬は面白くなさそうにぼやく。

「……そういう真冬は適当なところが変わってませんね、それでよく艦長が務まるものです、ああ独り言なので気にしないで下さい。」

「ふっ……」

「……前言撤回だ天音、お前大分変わったな。」

桜井副長の返しに綾は噴出してしまい、真冬は苦笑いを浮かべる。

「朱に交われば……ですよ宗谷艦長。」

「そういう事か、なら納得だ。」

桜井副長が綾を見て言った言葉に真冬が納得した様に答える。

「どういう意味ですかお2人共。」

綾は額に手を当てて溜息を付くのだった。

ブルーマーメイド強制執行課3

『ワイバーン7予定空域に入ります。』

「偵察カメラ作動、映像をモニターへ。」

綾が指示すると艦橋前面に設置された大型モニターがちらつきやがて画像が映し出される。

穏やかな海上の様子が写しだされる、そしてカメラが動き始めると画面に小さな島影が映る。

最初は画面上に小さく写っていた島影が画像が拡大されると詳細に見えてくる。

小規模な栈橋を持つ島の様だった、止まっている船舶は密輸組織の高速船だろう。

島の中央付近には幾つかの小屋がある、その周りを歩き回る男達、明らかに武装しているのが分かる。

それだけでなく、海岸線には機関銃が設置され、携帯式の小型噴進発射筒を持っている者までいる。

「予想以上に重武装ですね、真つ正直に突っ込んだら大損害です。」

艦長席に座る綾の隣に控える桜井副長が画面を見ながら眉を顰めて話す。

「その通りですね、一体何処からこんな物を持ち込んできたのやら。」

情報調査室からの情報では複数の軍需企業が絡んでいるらしい、近隣で多発する紛争目当てらしいが。

「敵味方に無分別に売っていると言うのだから悪質です。」

桜井副長が呆れた様に言う、言わば儲かれば相手先を選ばないらしい、その結果など眼中に無いのだろう。

「その悲劇を防ぐ為にもこの作戦は成功させなければなりませんね。」

綾は暫らく考えると指示を出す。

「日が落ち次第島に接近し、海岸線の陣地と高速船を速やかに無力化します。」

「了解です艦長。」

若宮による突入作戦がいよいよ開始され様としていた。

小島・夜

見張の男は欠伸を噛み殺しながら双眼鏡で海上を見ていた。

「たつく暇だぜ・・・何か起こって欲しいもんだぜ。」

男は気楽そうに言つて笑う、ブルーマーメイドかホワイトドルフィン来れば暇つぶしにはなる。

何しろこちらにはたつぷりの武器がある、返り討ちにしてやると男は考えていた。

もちろん艦艇を使って脅かしを掛けてくるだろうが、それならば高速艇でかく乱してやるまでだ。

密輸組織の連中はそこまで計画を立てて待ち構えていたのだが・・・

「え・・・？」

双眼鏡の視界に艦船が現れた、すわ現れたか？と思った男だが様子がおかしい事に気付く。

接近して来る速度がかなり遅いうえに、通常見掛けるブルーマーメイドやホワイトドルフィンの艦艇にしては大きすぎた。

だから男は最初、民間の船が接近してきたのかと思つてしまったのだが、それにしても照明どころか、航海灯すら消しているのは何故なのか分からなかった。

混乱した為男の初動が遅れたのを攻めるのは酷かもしれない、誰だつて大型の艦艇で攻め込んで来るなど想像もしないだろう。

次の瞬間、男を強烈な光が襲い視界を奪う。

接近した若宮が探照灯で島や高速船を照らしたのだ、これで密輸組織の連中は全員視界を奪われた。

「左舷艦載砲射撃準備よし！」

砲術長が報告してくる。

「射撃開始して下さい、目標棧橋に停泊中の高速船。」

綾の命令が即座に発せられる。

「了解、目標棧橋に停泊中の高速船、撃ち方はじめ!」

若宮の左舷側に設置された10・2センチ砲が射撃を開始する。

『目標1に命中確認、目標2及び3は至近弾、弾着修正右に2及び3。』

「弾着修正急げ!」

見張り員からの報告に砲術長が叫ぶ。

『左舷1番修正右に2、2番を3に修正・・・よし。』

「撃ち方はじめ!」

再び10・2センチ砲が火を吹き、密輸団の高速船を航行不能にしてゆく。

『島より発砲、左舷600に着弾、小型噴進弾と思われます。』

「艦長、目標を海岸線の機関銃陣地へ変更します。」

砲術長が綾に報告してくる。

「了解です、手前に着弾させて下さい・・・出来れば人的被害を抑えたいですから。」

「目標、機関銃陣地、手前に着弾させます・・・大丈夫です艦長、うちの砲術員は優秀ですから。」

綾の言葉に砲術長は微笑んで答える。

『照準、目標手前へよし。』

「よし、これで決めましょう・・・撃ち方はじめ！」

奇襲と言う形になった若宮の砲撃によつて密輸団の連中は陣地の維持どころで無くなり後退してゆく。

「旨く行きましたね。」

モニターを見ていた桜井副長が言う。

「そのようですね・・・まあこんな常識外れをやられてはね。」

改インディペンデンス型の様な軽快な艦とは違う大型の若宮でこんな事を実行するなんて普通は無い。

「しかし・・・これでまたあの二つ名が不動になりそうですね。」

ブルーマーメイド内での若宮の二つ名である便利屋、またその名が広まりそうで綾は溜息を付く。

「しかたありませんね、こればかりは。」

桜井副長はそう言つて苦笑するしかなかった。

「・・・宗谷艦長にスキップパー部隊の発進を連絡して下さい。」

その辺の事は今は置いておく事に頭を切り替え綾が指示を出す。

「スキップパー部隊へ、発進せよ繰り返し返す発進せよ。」

いよいよ作戦は最終段階に入ろうとしていた。

「しかしあの艦長ほんとに度胸あるな．．．支援母艦の艦長にしておくにはもったいないぜ。」

若宮の行動を見ていた真冬は不敵な笑みを浮かべて言う。

「帰ったら姉貴に頼んでみるか．．．神城艦長をこっちにくれってな。」

綾の知らない所で厄介事が始まった瞬間だった。

ブルーマーメイド強制執行課4

『スキッパー部隊へ、発進せよ繰り返す発進せよ。』

若宮の艦内に声が響き、乗員達によつてスキッパーが下ろされて行く。

その動きは迅速でかつ的確だった、まるで何時もやっている様に……
もちろん若宮もスキッパーを搭載しており扱うのが初めてではない。

だが通常は救助や艦艇間の連絡のみであり、べんてんの様に緊急発進を想定していない。

だが若宮の乗員達はそれを難なく行っており強制執行課のメンバーを驚かせていた。

「艦長……こいつら何でこうも手際がいいんですかね？」

真冬の部下の1人が驚いた表情を浮かべ聞いてくる。

「まあ分からんでもないさ……お前達も若宮がブルーマーメイド内で何て言われてるか知ってるだろ。」

若宮の二つ名である便利屋……様々な任務を任される彼女達に対する少々の敬意とそれに倍する揶揄を含んだ名である事はブルーマーメイド内で知らない者は居ないだろう。

「何でもやらされてきたから大概の事は連中出来ちゃうんだろうな。」

そのお蔭でまた様々な事を任される事になる・・・皮肉な話 شدと真冬は内心苦笑する。

「でもそうなら普通腐りませんか、私達は便利屋じゃないとか言つて。」

様は厄介事を毎回押し付けられている様なものだ、乗員にしてみれば面白くはないだろうと、真冬の部下達は皆思つた。

現に若宮の乗員達にとつて『便利屋』という言葉は禁句だと言われているからだ。

「それは多分、此処の艦長殿が彼女だからだと思つて。」

「彼女・・・神城艦長だからと言つて訳ですか？」

真冬の答えに部下達は顔を見合わせて聞いてくる。

「天音、此処の副長だが、女子海洋学校時代は規則が服を着ている女つて呼ばれていたんだが。」

学校時代の事を思い出しながら真冬は言う。

「兎に角何より規則を重んじる女でまったく融通が利かない・・・だからさつき艦橋で会つて驚かされた。」

部下達を見渡して真冬は言う。

「天音が居てよく俺の話が通つたなつてな、あの女相手が上司でも規則と言う点では妥

協しないしな。」

しかもこっちの嫌味にしつかり切り返してきやがったと真冬は内心苦笑する。

「神城艦長に心酔してやがる、まあこれは他の乗員達にも言えるがな。」

周りで準備を進める乗員達を見ながら真冬は呟く。

「だから天音以下若宮の連中は任された任務が厄介事だとしても、神城艦長の命じた事だから全力で答える、そう思っているんだろうよ……考えてみれば凄いカリスマだ、もつともあの艦長自身はそれに気付いちやいないみたいだがな。」

肩を竦めて真冬はこの話を打ち切る。

「さて与太話はここまでだ、俺達の仕事を始めるぜ……若宮の連中が此処まで答えてくれたんだ、これでしくじったら強制執行課の名折れだがらな、行くぜ。」

「『了解!!』」

強制執行課のメンバー達が敬礼をすると準備されたスキツパーに乗り込んで行く。

『スキツパー部隊発進しました。』

艦橋に設置されたスピーカーから報告が入ると共にモニターに発進して行くスキツパー部隊が写し出される。

「島の状況はどうですか?」

綾の声にモニターは再び飛行船から撮られる島の様子を映し出す。

一時パニック状態になった密輸団だが、今は冷静を取り戻し迎撃体制を整えつつあった。

「ワイバーン7の高度を落とさせて探照灯を照射し、連中の目を引き付けて下さい。」

そう指示を出す綾に天音、桜井副長が確認してくる。

「その場合、銃撃を受ける可能性があります。」

「構いません、死傷者を出すよりはましです。」

「了解です艦長、ワイバーン7の高度を落し探照灯の照射を行なわせませぬ。」

桜井副長は復唱すると艦内電話を取り上げて飛行管制室に指示を伝える。

この一連のやり取りを真冬が見ていけば再び驚かされていただろう。

飛行船にそんな事を行なわせるのは完全に規定違反だ、昔の天音だったら確認ではなく抗議していただろ。

そこには天音の綾に対する絶対的な信頼感が見て取れる。

「ほんといい度胸をしているぜあの艦長。」

スキッパーで島に接近していた真冬は突然上空に現れて島を照射し始めた飛行船を見て呟く。

密輸団は再びパニックに襲われている、連中も飛行船が居る事は予想していただろうが、まさかこんな行動を取るだろうとは思っていなかった様だ、先程の大型艦での艦砲

射撃同様に。

そうなれば後は楽だった、島に上陸した強制執行課のメンバー達はろくに反撃の出来ない密輸団の連中を瞬く間に鎮圧した。

「終わりましたね。」

機関故障で作戦に参加出来なかったべんてんが到着し捕縛した密輸団が乗せられてゆくのを見ながら綾はほっとした表情を浮かべて言う。

「……そうですね。」

だが桜井副長の表情は晴れない、何故なら天音はこの後の事が非常に気掛かりだったからだ。

真冬が今回の事で綾を気に入ったの確かだろう、天音としては敬愛する綾が認められるのは嬉しい。

だが真冬が気に入った相手を必ず自分の手元に置きたがる事を天音は女子海洋学校時代の経験から知っている。

「どうかしましたか副長?」

天音の様子を気にした綾が聞いて来る。

「……いえ何でもありません艦長。」

自分達から艦長を引き離させる事は絶対させない、天音はそう決意を固める。

「なら良いのですが、無理をしない様にして下さい副長。」

「配慮感謝します、では今後の航路について航海科と打ち合わせてまいります。」

何時もの様に冷静な天音が、実はそんな事を考えているとはその時綾は思いもしなかつた。

後に綾の知らない所で起こる、真冬と天音以下若宮乗員達との『神城艦長』争奪戦のゴングが鳴った瞬間だった。

21:10

密輸団の拠点制圧作戦終了。

知名 もえか 1

幼い彼女は泣いていた。

川岸の草むらの中で小さな身体を震わせて・・・

ずっと耐えてきた幼い彼女だったが、最早限界に達してしまったのだ。

突然両親が居なくなり、彼女は見知らぬ大人達によつて知らない場所へ連れてこられた。

そこには彼女と同じ様な子供達が大勢いた。

何故そうなったのか、周りの大人達は話してくれず、何も分からないまま彼女は過ぎさなければならなかった。

ただせめての慰めは、同じ歳の友達が出来た事だろうか、彼女とつては大切な存在。

だが両親と会えない、家に帰る事が出来ない、そして見知らぬ場所での生活。

それは徐々に彼女を追い詰めていった。

ある日些細な事で彼女の限界は訪れた、そして気付くとこの場所で泣いていたのだつた。

このまま消えたい、もうこんな辛い思いをすにのならば彼女が思った時・・・

「こんな所でどうかしたんですか？」

彼女は突然話しかけられる、思わず振り向いた先に居たのは……彼女より年上の少女だった。

見知らぬ相手だったがその少女の着ている服装には彼女は覚えがあった。それは彼女の生活している場所に時々来る少女達と同じ服だったからだ。

何でも呉にある学校の少女達で、彼女や他の子達の面倒を見る為に来ていると聞かされていた。

ただその中には声を掛けて来た少女が居た記憶は彼女に無かった。

「……お姉ちゃんは？」

「えっとね……泣き声でしたんで来てみたんだけどね。」

彼女の問いにその少女は微笑んで答える。

「辛い事があったのかな？」

「……」

顔を逸らし黙る彼女、前に泣いた時に「泣いては駄目だ。」と周りの皆に言われたからだった。

泣いたと分かればまた同じ様に言われる、と彼女は思ったのだが。

「そうなんだ、だったら……思い切り泣いちゃって良いと思うよ。」

「えっ……?」

その少女の意外な言葉に彼女は呆けた表情を浮かべてしまう。

「思いつきり泣いて、辛い事や悲しい事を全部涙と一緒に流してしまつたら、また笑顔でがんばっていきけると私は思うわ。」

眩しい笑顔とその言葉に彼女の目に大粒の涙が浮かんで来る。

「わ、わああん!」

少女が言った言葉に、今まで押さえてきたものが全て溢れ出すのを止められない彼女。

泣き続ける彼女をその少女は何も言わず見守っていたのだつた。

その後、彼女はその少女に連れられ帰つた。

帰りを迎えた大人達は怒りはせず、微笑んでくれた。

それを見て、彼女は自分は見守られているんだと今更ながらに自覚した。

「もかちゃん!」

彼女を見ていた子供達の中から見知つた娘が飛び出してきた。

「ミケちゃん。」

2人は抱き合う。

「もう何処行つたのか心配したんだから。」

目を泣き腫らした見知った娘、ミケちゃんの様子に彼女、もかちゃんには深い後悔が湧き上がってくる。

「御免ねミケちゃん。」

自分にとって大切な彼女を悲しませてしまった事に・・・許しを請うように強く抱きしめる。

一方もかちゃんを連れてきてくれた少女は大人達と話をしていた。

「それじゃ貴女は呉の学生じゃないのね。」

「はい、横須賀の所属です。」

「そうなの・・・あの娘を連れて来てくれてありがとう。」

「いえ、お気になさらないで下さい、自分の出来る事をしただけですから。」

「謙虚ね貴女、そう言えば呉に何か用事があって来たのかしら?」

「ええ、実は呉の学校に・・・」

その後、事情を説明していた様だったが、まだ幼いもかちゃんには理解出来なかった。ただ、横須賀と言う言葉だけがもかちゃんの心の中に残った。

そうだお礼を言おう、そう思つて踏み出したもかちゃんだったが、他の子供達に囲まれてしまい、それは叶わなかった、そして別れの挨拶さえ・・・いや名前すら聞けずに終わってしまった。

もかちゃんはそれを後々まで後悔する事になるが、やがてその後悔をばねにミケちゃんと共に夢を目指す事になる。

自分も亡き母親の様なブルーマーメイドになつてみせると・・・

悲しみの底から助けてくれたあの少女と再会したいと・・・

それが知名 もえかの必ず叶えたい夢となった。

「艦長・・・艦長？」

揺り動かされ知名 もえかは意識を取り戻す、どうやら短い間だがまどろんでいたらしい。

「御免なさい、寝ちゃったかしら？」

頭を振つて意識をはつきりさせながらもえかは声を掛けて来た乗員の娘に尋ねる。

「少しですが・・・まあ仕方がありませんよ、私達だつて同じ様なものですし。」

その乗員の娘は疲れた笑みを浮かべて答える。

もえかは寄りかかつて寝ていた艦橋の壁から立ち上がる。

「くっ・・・」

身体の節々が痛い、この数日間まとまな場所で睡眠を取る事が出来なかつたからだ。

武蔵の艦橋にもえかと2人の乗員達が軟禁状態になつてからずっと・・・

「状況に変化は？」

「ありません．．．相変わらず武蔵は浦賀水道に向かって進行中です艦長。」
「．．．」

乗員の報告にもえかは深い溜息を付く。

武蔵の艦橋に軟禁状態になってから状況は最悪の方向へ進み続けていた。

どうしてこんな事になったのか、もえかは自身に問い掛けるも、答えは出ない。

もえかを始めとした生徒達の初航海は最悪の結末を目指して進んでいた。

知名 もえか2

何故こうなってしまったのか？

横須賀女子海洋学校に入学し、武蔵艦長に任命されたもえか。

念願だったブルーマーメイドへの第一歩を明乃と共に踏み出す事が出来て嬉しかった。

それにもう一つの願い、あの少女の事を知る機会が訪れたのだから。

彼女が横須賀女子の生徒なのは、あの時の大人達と彼女の会話から間違いないともえかは確信している。

だとすれば横須賀女子に来ればあの少女の消息を知る事が出来るかもしれない。

初めての実習航海が終わったら、もえかは少女の消息を調べるつもりだったのだが。

その初めての実習航海は今や最悪の展開を見せていた。

出航からしばらくは問題なかった、武蔵の乗員に選ばれるだけあつて生徒達は皆優秀だったからだ。

それが集合場所の西之島新島沖に近付くにつれもえかは様々な事象に悩まされる様になる。

まず武蔵の電子機器が不調を訴え始めた、レーダー、無線、戦術ネットワーク、航法システム。

乗員達がいくら調べても、予備のシステムに切り替えても一向に回復しなかった。

そのうち途切れ途切れだった教官艦さるしまとの通信が完全に途絶してしまった。

もえかはさるしまの通信士が最後に訳の分からない言葉を喚き散らしていた、と言う報告に不安を覚えた。

ここで横須賀女子に戻るべきか悩んだが、状況を確認する為もえかは集合場所に向かう決断を下す。

だがそれは始まりに過ぎなかったのだ、むしろ恐怖はここから加速する。

次の当直の為艦橋に向かっていたもえかに、息を切らせ走りよって来る二人の乗員。

「か、艦長！」

「どうかしましたか？」

2人の尋常でない姿にもえかは不安が更に大きくなるのを押さえ切れなかった。

「それが皆が・・・変なんです、あれじゃまるで、ひっ！」

乗員の1人が説明しようとして悲鳴を上げる。

通路の奥、落とされた照明で暗闇になった場所から数人いや十数人の乗員達が現れる。

だが彼女達は表情が抜け落ち、足取りもおぼつかない、なのに確実にもえか達へ向かつてくる。

まるで何かに取り付かれた様だともえかは恐怖に陥る。

「艦長……」

「2人共こつちへ、艦橋に向かいます。」

怯える二人を連れて艦橋へ向かうもえか、彼女自身も恐怖の余り足が震えるが、艦長としての責務を思い出し何とか耐える。

幸い迫ってくる乗員達は歩く速度を変えずにいたので、3人は何とか艦橋に逃げ込む事が出来た。

「……これは？」

艦橋には誰も居なかった、当直時間中で有る筈なの乗員の姿がまったく無くもえかは絶句する。

しかし気を取り直すと艦長席に向かい艦内通話器を取り、無線室に繋ぐ。

「無線室、艦長の知名です、横須賀女子に……」

『うう……ああ……』

「!？」

しかし無線室から帰って来たのは訳の分からない言葉を喋る乗員の声、そうさるしま

の様に・・・

もえかは通話先を変える、機関室、レーダー室、ダメコン、だがどこも通じないか、通じても無線室と同じ意味不明な言葉が返ってくるだけだった。

「……………」

最早正気を保っているのは自分達だけではないのか？もえかは今にもその場に座り込んでしまいそうになる。

だがそんなもえかを他所に事態はなおも悪化してゆく。

今度は艦橋のドアを激しく叩く音が響く。

「艦長、ドアを強引に開けようとしています！」

乗員の声にドアを見るもえか、それは開けると言うより破壊しようとする様にしか見えぬ。

「動かせる物をドアの前に・・・早く。」

乗員の娘達と共に、机や椅子などをドア前に置き、外から開かれない様にするもえか。何とかこれで侵入を防げるが、それは艦橋にもえか達が閉じ込められた事を意味していた。

その後、もえかはその時点でまだ生きていた非常回線で救済要請を行なったが、返答が来る前に回線は閉鎖されてしまう。

そのころには艦橋の機能も全て奪われ、もえか達は辛うじて残ったモニターシステムで状況を確認する以外に何も出来なくなってしまうていた。

そももえかはそれ以後、耐え難い状況を見せ続けられる事になる。

まず最初は東舞鶴の教員艦隊との遭遇だった。

危険を感じたもえかは何とか武蔵の状況を伝え様としたが・・・

双方が直ぐに戦闘状態になってしまった為、せかつく送った発光信号も気付いてもらえず、教員艦隊が壊滅して行くのをもえか達は胸が裂かれる様な思いで見ている事しか出来なかった。

そももえかにとつてはもつとも最悪な状況、晴風との遭遇が起こった。

しかも明乃はスキッパーで武蔵に接近をしようとしたのだ。

もえかが彼女を失ってしまうと言う恐怖に襲われたのは言うまでも無い。

結局接近は失敗、明乃は海に投げ出されてしまうのだが、かろうじて救助されるのが確認できもえかは安堵した。

そして晴風は武蔵から離れていった、明乃が乗員と艦の安全を優先すべきと判断したのでらう。

もえかは明乃がそう判断してくれた事が自分の事の様に嬉しかった。

「そうよミケちゃん、貴女は艦長として優先すべき事をしたの、それは正しい事だから。」

自分の事を助けられなかった後悔に襲われているだろう明乃を思って、もえかはそう
呟くのだった。

離れて行く晴風を見つめながら・・・

知名 もえか3

晴風と遭遇後暫らくは平穏な時間が続いた、もつとも軟禁状態のもえか達にとっては何の慰めにもならなかったが。

幸いな事に艦橋に備えられた緊急時用の備品、遭難時に持ち出すものがあつたので、食料や水は何とかなつた。

もつとも味気の無いクラッカーにとつても食欲の沸きそうも無い色をしたゼリーの組み合わせに耐えねばならなかったが。

もちろんベットなど洒落た物など無く、硬い床の上に制服姿で寝るしかなかった。

何より辛かつたのは風呂もシャワー無く、着替えもなかった事だ。

うら若いもえか達にとつてはこれ程の辱めも無いだろう。

それに何も出来ないと言う無力感も重なりもえか達の精神は限界まで追い詰められていた。

だが状況はそんなもえか達を更に追い詰め始める。

「艦長、武蔵が進路を変更しました。」

交代でモニターシステムを監視していた乗員の娘が報告する。

もえかと残りの乗員がモニターシステムに駆け寄って画面を覗き込む。

武蔵はそれまでは進路を頻繁に変えていた、ただそこには明確な意図を感じられずいたが。

しかし今回は違った、武蔵は何かを目指すように進路を変え、速力を上げ始めていたのだ。

「どちらに向かっているか分かりますか？」

もえかの問いに乗員の娘はシステムを操作し武蔵の進路を確認する。

「これって……艦長、武蔵は浦賀水道へ向かっています。」

「それは……」

画面を見つめるもえか、そこに表示されている武蔵の進路は真つ直ぐに浦賀水道に向いていた。

武蔵がもつとも船舶の往来の激しい浦賀水道に侵入しようしているのは明白だった。

そして武蔵が他の船舶と遭遇すれば、当然攻撃を仕掛ける事は今までの東舞鶴の教員艦隊や晴風との遭遇時の例で明らかだった。

もちろん海上安全整備局は船舶の退避を命じるだろうが、それが間に合うのかもえかには分からない。

だが今のもえか達にそれを阻止すべき術は無く、ただ自分達の無力さを噛み締めるし

かなかった。

「艦長、武蔵に接近中の船舶を確認、識別信号からブルーマーメイド艦隊の様です。」

武蔵が浦賀水道に迫る中、モニターシステムが接近して来るブルーマーメイド艦隊を捕らえる。

「各艦を識別できますか？」

「改インディペンデンス型のみくらにみやけ、ここうづ、はちじょうです艦長。」

モニターシステムに表示された各艦の名を乗員はもえかに告げる。

九州方面に別働隊として配置されていた福内 典子率いる艦隊だが、この時点でもえかには知る術はなかった。

だが武蔵の進行を阻止する為の艦隊である事をもえかは確信した。

「武蔵を止めてくれるでしょうか？」

「……………」

希望を込めた乗員の問いにもえかは答えられなかった。

確かにこの艦隊は東舞鶴の教員艦隊や晴風に比べれば経験を積んだ、歴戦の者達だともえかかと思う。

しかし今の武蔵は底知れぬ戦闘力を発揮しているともえかは考えている。

果たして進行を阻止出来るのか・・・もえかは激しい不安に襲われていた。

そして状況はもえかの危惧した展開になって行く。

最初は有利に戦闘を展開していたブルーマーメイド艦隊だったが、1艦が被弾し脱落した時から旗色が悪くなって行く。

艦隊は脱落艦が出て飛航行船を使って武蔵の視界を奪う作戦で果敢に戦いを挑んでくる。

それにより武蔵の副砲を破壊する事が出来たものの、小型砲により飛航行船が破壊されると、砲撃の為接近していた艦隊は武蔵の猛射を浴びる事になった。

瞬く間に艦隊が戦闘力を喪失して行くのをもえか達は呆然と見ているしかなかった。

そしてそれは最後の希望が潰え去った事を意味していた、もえかはそのまま倒れてしまいたかった。

だが状況はもえかにそれさえ許してくれなかった。

「艦長、晴風が、晴風が接近して来ます!？」

「ミケちゃん……」

もえかにとって最も最悪な状況の為に……

知名 もえか4

「艦長、晴風が、晴風が接近して来ます!？」

「ミケちゃん……」

晴風は一度武蔵と交戦状態になったが、ブルーマーメイド艦隊（平賀の率いる別動隊）の接近で退避していた筈だった。

「どうして……」

もえかは呆然と呟く、今の戦闘を見ていなかったのか？それともブルーマーメイドからの命令なのか。

「……晴風に発光信号『接近を中止されたし、武蔵は未だに弾薬豊富なり、自艦の安全を優先されたし。』、急いで。」

兎に角晴風の接近を止めさせなければならぬ、このままでは明乃や晴風が危険だともえかは考えた。

乗員の1人がもえかのメッセージを送る、だが帰って来た返事は……

『我これより救援に向かう、もかちゃん必ず助けるから待っていて、明乃。』との事です艦長。」

帰って来たメッセージを聞いてもえかは嬉しさと、そして自分にとって大切な明乃を危険に晒してしまう恐怖の二つに襲われていた。

「やっぱり駄目よミケちゃん武蔵は・・・」

歴戦のブルーマーメイド艦隊さえ退けたのだ、まして晴風単艦では自殺行為だともえかは思った。

だが通信を送る以外にもえか達に出来る事は無かった。

それでもえかの思った通り、武蔵の圧倒的な火力の前に晴風は追い詰められて行く。

「もう良い、もう良いのミケちゃん・・・逃げてお願い。」

ぼろぼろになってゆく晴風を見てもえかは叫ぶ、私は両親だけでなく、大切な幼馴染も失ってしまうのかと理不尽さに震える。

その時だった、武蔵の周りに多数の着弾の水柱が立つ。

「え!?!」

晴風では無かった、第一単艦では考えられない数と、その中には大口径のものも含まれている事にもえかは気付いたからだ。

「艦長、後方より接近中の艦影あり、識別信号は・・・これって!?!」

モニターシステムを見ていた乗員の娘が驚いた声を上げる。

「横須賀女子海洋学校のてんじんに比叡、舞風、浜風それにこれってアドミラルシユペー

？」

「えっそれは……いえてんじん以下の艦艇は分かりますが、何故アドミラルシユペーがここに？」

アドミラルシユペーがヴィルヘルムスハーフェン校所属な事を知っているもえかだが、ここに居る理由が分からなかった。

まあこれは女子海洋学校側が内密にしていた為だが、この時点でもえかに分かる訳が無かった。

混乱するもえか達を他所にてんじん以下の艦艇群は武蔵への攻撃を続ける、兎も角これが晴風を援護する為だとは何とか理解出来たが。

これによって晴風は体勢を整えると、予想だにできなかった行動に出る。

発射された噴進弾、どうやら攻撃では無くその噴煙で視界を遮る事が目的だったによりもえかが晴風を見失った直後、武蔵の側面に現れると急激なターンをやつてのけそのまま強行接舷してきたのだった。

不意を衝かれもえか達は衝撃により床に倒れこんでしまう。

そして艦内各所で晴風と武蔵の乗員達の戦闘が起こり始めるのがモニターシステム上で見て取れる。

異様な戦闘力を発揮する武蔵乗員達相手に心配するもえか達だったが、晴風側は対処

方を用意していたのか、意図も簡単に鎮圧している様だった。

「艦長、外に誰かが来ている様です。」

乗員の声に机などで封鎖したドアを見るもえか、確かにドアを叩く音と共に声が微かに聞こえてくる。

「……も……かちや……ん……」

「ミケちゃん!？」

聞き覚えのある声にもえかは思わずドアに駆け寄り物を退かして行く、すると声と叩く音が鮮明になる。

「もかちゃん……そこに居るの?もう何で開かないってきやあ!!」

物を退かした所為でドアはあっけなく開き、結果的に明乃は勢い余つてもえかに衝突してしまう。

「ミケちゃん、良かった。」

もえかは衝撃など気にする事無く明乃を抱きしめる。

「もかちゃん?もかちゃんなんだね、うんうん良かった良かったよ!」

一瞬驚いていた明乃だったが、直ぐに相手かもえかだと分かり抱きしめ返してくる。

それから暫らく2人は人目を気にする事無く抱き合い、涙を流し続けた。

『思いっきり泣いて、辛い事や悲しい事を全部涙と一緒に流してしまつたら、また笑顔

で・・・』

幼い頃出会った少女の言葉通り、この後笑顔で語り合う為に。
知名 もえかの長かった初航海はこうして終わりを告げたのだった。

知名 もえか5

晴風乗員達によって開放された武蔵。

その後駆けつけてきたブルーマーメイド艦隊の乗員が乗り移り以後の横須賀基地への回航を行なう事になった。

これは本来の武蔵の乗員である生徒達の殆どが晴風乗員達との戦いで失神状態になってしまった事がある。

また横須賀女子に向かわないのは当事者達が乗っている為と、それまでの戦闘で沈没の危険は無いものの損傷が酷く、横須賀基地の専用ドックに入渠させる必要があったからだ。

その為明乃ともえかは泣く泣く別れなければならなかった、まあ明乃は晴風を指揮して横須賀女子に帰港する任務が有るので仕方が無い。

2人はまた再会を約束し別れるのだった。

そして横須賀基地に武蔵が接岸した時点で、もえか達はようやく全ての事から開放された。

もっとも翌日から事情聴取や報告書の作成などで暫らく拘束される事を乗り込んで

来たブルーマーメイド隊員に言われてしまったが。

兎も角帰つてこれた事は確かだ、もえか達は臨時に割り当てられた横須賀基地の宿舎に向かう。

早く風呂に入り着替え、ちやんとしたベットで寝たい、それが今のもえか達の気持ちだった。

失神してしまつた生徒達の搬送が行なわれる中、もえか達はタラップを降りて棧橋に立つ。

もえかは地に足が着いたとたん危うく座り込んでしまいそうになった。

他の2人も同様で顔を見合わせて苦笑してしまふ。

やつと帰つてこれた・・・今の3人はその事だけしか考えられなかった。

ふともえかは武蔵が接岸した隣にブルーマーメイドの艦艇が接岸して居る事に気付く。

どうやら飛行船支援母艦の様だったが、普段もえかが見かけるものは少々違って見えた。

大分小柄でそのわりに水線面から飛行甲板までの高さがかかなりある。

その特徴的な支援母艦からもえか達の様にタラップを降りて来る2人がいた。

眼鏡を掛けた理知的な女性と美しい黒髪の清楚な女性。

「!？」

もえかはその清楚な女性を見た途端心臓が止まるかと思う程の衝撃を受ける。

その女性にもえかが幼い時に出会ったあの少女の面影を見たからだ。

「艦長？」

一緒に居た乗員の娘が声を掛けて来るがもえかには聞こえていなかった。

棧橋に降り立った2人はそんなもえかに気付く事も無く司令部施設のある区画へ歩いて行く。

声を掛けなければ・・・でも彼女はそんな昔の事を覚えていてくれるのだろうか。

もえかの心中をそんな疑問が駆け巡り声を掛ける事を躊躇させる。

だかもえかがそんな躊躇に囚われていたのは極わずかだった。

「2人共先に行つて下さい。」

「艦長？」

戸惑う乗員の娘達を残しもえかはあの2人を追う、この時を逃せば次は無いかもしれない、今回の初航海で嫌と言うほど思い知らされたからだ。

「あ、あの・・・」

直ぐに追いついたもえかが声を掛けると2人の女性が振向く。

「貴女・・・横須賀女子の生徒ね、どうかしたのかしら。」

理知的な女性かもえかを一瞥して問い掛けてくる、一方清楚な女性の方は目を見開き驚いた表情を浮かべている。

「えつとその……」

だが声を掛けたもののもえかは何て言えば良いのか分からず言葉が続かない。

考えてみれば彼女たちはブルーマーメイドの隊員だ、今更ながらとんでもない事をしているのではないかもえかは考えてしまう。

そんなもえかを救ったのは他ならない清楚な女性の方だった。

「貴女もしかして呉の施設にいた娘かしら？」

覚えていてくれた……もえかは今までの疲れも吹き飛ぶ様な感激に囚われていた。

「しかしあの時の女の子が今や私の後輩、横須賀女子の生徒になっているなんて……私も歳を取った訳ですね。」

清楚な女性、飛行船支援母艦若宮の艦長である神城 綾二等保安監督官は困った表情で言う。

「いえそんな事は……」

初めて会った時も今の自分と同じ年齢だったにも係わらず美人だと思っていたが、現在目の前にいる彼女は年齢を重ねた事によって更に大人の魅力を増しているともえか
は思い、我知らず頬を赤らめてしまう。

「それである時はとてもお世話になりました．．．ずっとお礼を言いたくて。」

しかし時間があまり無いと思ってもえか話を進める。

綾は司令部へ行かなければならなかったが、先に若宮の副長を行かせて、もえかの為に時間を作ってくれているのだから。

「大した事した訳ではないのだけど．．．今の立派な姿を見ると声を掛けられて良かったと思えますね。」

微笑んで見つめている綾の姿はあの頃と変わっていないともえかと思った。

知名 もえか6

初めて出会ったあの時の笑みを思い出すもえか。

絶望に陥っていたもえかを救い出してくれたその笑みを・・・

「はいそのお陰で横須賀女子にも入学出来ました。」

夢を、ブルーマーメイドになると言う夢の第一歩を達成出来たのだからともえか。

「いえそれは貴女自身の努力の結果でしょう、私は大した事してませんから。」

あの時の事を思い出す度に綾は恥かしかった、まだ学生の身で偉そうな事を言ってしまったと。

「第一あの言葉は私の母親がよく言っていたものですからね。」

自身の言葉でなく他人の言葉なのだからと綾は思う。

「誰の言葉でも、あの時神城艦長が言ってくれたからこそ私が今此処に居られるんです。」

絶望の淵にいた自分を引き戻してくれたのは他ならない綾だったのだからともえかは確信している。

「まあそう思ってくれるのなら・・・言った甲斐がありますね、そう言えば貴女は武蔵に

「？」

綾の問いに彼女は武蔵の事件をどの程度知ってるんだろうかともえかは緊張する。

「はい艦長として……」

俯いてしまってもえか、何を聞かれるのか、そして答えによつては綾を失望させてしまうのではないか。

心中を様々な考えが巡る、自分の身体が緊張に震えるのが分かるもえかだったが。

「そうですか、苦労様でした知名艦長。」

微笑みつつ綾は唯労いの言葉を掛けるだけだった。

今のもえかにとつてそれだけで嬉しかった、そしてこの人は本当に優しくして心配りのできる人なんだと再び感激に包まれる。

「ありがとうございます神城艦長。」

その後暫らくお互いの最近までの話をしていた2人だったが。

「そろそろ私も行かないと……知名艦長も早く戻って休んで下さい。」

艦長用の懐中時計を見て綾が言うのを聞いて、もえかは結構長く引き止めていた事に気付く。

「すませんでした神城艦長、つい時間を忘れてしまつて。」

現役の艦長として忙しいだろう綾に時間を取らせてしまったともえかは後悔する。

「気にしなくても良いですよ知名艦長、私も後輩の娘と話せて嬉しかったですし。」
「……はいありがとうございますございます神城艦長。」

何でも無い様に言う綾、こんな艦長だったら若宮の乗員達は何処までも付いていこうと思うんだろうなどと、同じ艦長として羨ましくなってしまうたもえかだった。

「それじゃ戻ります、あ、あの失礼でなければまたお話を聞かせて下さい。」

綾も承諾してくれて、2人は電話番号やメールアドレスを交換する。

「では今日はありがとうございまして神城艦長。」

「こちらこそ知名艦長、またお会いしましょう。」

2人は敬礼を交わすと、綾は司令部へ、もえかは宿舎へ向かうのだった。

その後、もえかは事件の状況説明や報告書の作成などで基地に缶詰状態になり、開放されたのは2ヶ月後だった。

そこでようやく明乃と再び会う事ができたのだった。

再会を喜び合うもえかと明乃は事件の事や会えなかった間の出来事を話し合ったのだが、ここで意外な事が分かった。

そう2人共綾と接点があった事だった、もえかと明乃は互いに驚いたものだった。

明乃はもえかが呉の施設に居た時に綾と初めて会い、あの事件後に再会した事を。

もえかは明乃が体験学習で乗艦した若宮で綾に出会った事に。

「尊敬出来る人だよ、私もあんなブルーマーメイドになりたいと思ったよ。」

「確かに、それに私達が目指すべき理想の艦長でもあると思ったわ。」

もえかと明乃は顔を見合せて微笑みあう。

「それにしても神城艦長が古庄教官の同期で親友でもあったなんて不思議な縁を感じるわね。」

明乃から綾と薫の関係を聞きもえかはそう思わずにはいられなかった。

「今後は神城艦長からどんどん学びたいと思うな、そしてブルーマーメイドになつら一緒に働きたい。」

「うん私も・・・神城艦長とならどんな事でもやれる気がするから。」

新たな目標がもえかと明乃に生まれた瞬間だった。

こうして綾は自分の知らない所で将来有望な2人の敬愛を得る事になったのだった。

横須賀女子海洋学校編

神城 綾と古庄 薫

横須賀女子海洋学校所属超大型直接教育艦武蔵・飛行船格納庫

格納されている飛行船のメンテナンスハッチを閉じて1人の女子生徒が伸びをする。「問題無し」と。」

そう眩く美しい黒髪をした作業用のつなぎを着た女子生徒。

彼女の名は神城綾、超大型直接教育艦武蔵の飛行船オペレーターだった。

そう彼女は飛行船の操作が任務で、整備は専門の生徒達が本来は担当ののだが、自分で動かすものだからメンテナンスにも係わりたいと整備を手伝っているのだ。

ちなみに整備は終わり担当の生徒達は既に帰っているのだが、綾は残って点検していたのだった。

別に問題が在った訳では無い、ただこのままだと、更衣室や風呂で他の生徒達と一緒に寝てしま

うからだ、綾は未だに他の女子とそんな場所に居るのに慣れないのだ。

まあ女子海洋学校所属の教育艦だから乗員は当然女子しか居ない、だから当然そうな

るのは当たり前だが、男として生きてきた期間が長いせいとか、例え身体的には完璧な女子だと分かっていても罪悪感が消えないのだ。

だから皆が使い終わった後にそつと使用するつもりだったのだが・・・
残念ながら綾の思惑通りには進みそうも無かった。

「ああ、やっぱりまだ残っていたのね綾。」

そう言つて格納庫に入つて来た制服であるセーラー服を来た女生徒、同期であり友人でもある古庄 薫によつて。

「あれどうしたんですか古庄さん？」

「……………」

「……………どうしたんですか薫？」

薫を古庄さんと呼んだ途端、彼女に軽く睨みつけられて綾は言い直す。

女子を名前でしかも呼び捨てするのは、知り合つてから大分たつたとはいえ綾には少々ハードルが高かつたのだが、最近何を思ったのか、薫は綾にこう言つてきたのだ。

「私の事は薫と呼んで、もちろんさん付けもいらさないから。」

それまでは古庄さんと呼んでいた綾が驚いたのは言うまでもない、だがこれだけでは終わらず彼女は続けてこうも言つてきたのだつた。

「私も今後は貴女の事を綾と呼ばせてもらうから。」

これは薫曰く、「苗字で呼び合うのは他人行儀だから。」と言う事らしい。

女の子同士の距離感に綾が戸惑ってしまったのは言うまでもなかった。

その薫は綾の言葉に満足したのか、微笑を浮かべて近づいてくる。

「誰かさんがまだ着替えもせずにいるだろうと思って迎えにね。」

別に頼んだ訳ではないのだけどと綾は内心苦笑する、自分を薫と呼べと言った日から、こうやって迎えに来る様になったのだ。

「本当に熱心よね綾は、着替えるのも忘れる程にね。」

「・・・知って言っているでしょう薫は。」

綾が他の女子と着替えや風呂に入るのが苦手な事を薫は知っている筈なのだから。

「ふふ・・・でも熱心だと思っているのは本当よ。」

自分の職務以外まで熱心にやっている綾は生徒達の間でも有名だからだ、まあ容姿もあるのだが。

余談だが綾のこう言った姿が卒業後の彼女の進路に影響する事になる。

「皆も綾は凄いなって言っているしね、教官の評価も高いじゃない。」

「え、いやそんな事はな、無いんじゃないのかしら。」

真つ赤になり台詞を囁む綾に薫は噴出す。

どうもこの友人殿はこの手の賛美には非常に弱い、普段は容姿もあつて凛々しいの

に。

そんな友人に薫は悪いと思いつつ笑を止められないでいた。

綾は微笑みながら自分を見つめる薫を見て溜息を付く、出会った当時は落ち着いて真面目な娘だと思つたのだが、半年近く洋上で一緒に過ごしているうちに彼女が結構お茶目、いや意地の悪いところがある事に気付かされていた。

神城綾と古庄 薫、2人が出会つたのは横須賀女子海洋学校入学式後の武蔵艦内だった。

これから3年間共にこの武蔵で学んで行く者達が顔を揃えた場で。

薫は綾の同性の自分さえ見惚れてしまいそうになつたその姿に目を見張つたものだ。

ただその言動は容姿を裏切つていた、まるで場違いな所に入り込んでしまったかのように思つた。

もつともそれが無かつたら綾は美人過ぎて近づき難い存在になつてしまつていたと薫は思つている。

だからこそ薫も声を掛けられたのだから。

「大丈夫貴女？」

「は、はいだ、大丈夫ですよ？」

何故疑問系なのか薫は思つたものだが、落ち着かない綾を見て思わず笑みが漏れてし

まった。

まあ綾にしてみれば1年前までは男だった自分が、突然女の園に放り込まれたせいで緊張しまくっていただけなのだが。

「私は古庄 薫よ、よろしくね。」

「は、はい神城綾と申します、こ、こちらこそよろしくお願いします。」

この出会いをきっかけに初めての女の園で困惑する綾を薫はフォローして行く事になるのだった。

そんな訳で綾は薫に感謝しているのだが、親しくなるにつれこうやってからかわれる事が多くなつた気がするのだ。・・分かりやすい反応をする方も悪いのだが。

「まあ評価は評価よ、認めても良いと思うけどね。」

薫はそう言つてウインクして見せる、とても魅力的な笑顔を浮かべて、そんな薫に綾は苦笑を返すしか無かった。

「それでもう終わったのかしら?」

魅力的な笑顔のまま薫は聞いてくるのだが、綾は何故か嫌な予感がしてしまう。

この半年間の薫や他の友人達（もちろん女子）の付き合いで、彼女達がそんな笑顔をする時には自分にとつてろくでもない事しか起きない事を嫌と言うほど分かっているからだ。

それは入学後初めての皆との外出以降度々思い知らされている。

「……ええ終わりましたが。」

それを聞いた瞬間、その笑顔のまま彼女は後ろを振り向いて言う。

「皆、綾は終わったそうよ、行きましようか。」

「「OK薰！」」

格納庫の扉を開けて入って来たのは、綾にとつては思い出したくも無い外出日の時一緒だった友人達。

「え……え!?!」

綾が状況に付いて行けない間にその友人達は両腕を拘束してしまう。

「か、薰これって?」

綾の問いに薰はそれはそれは魅力的な笑顔で答えてくれる。

「皆綾を待っていたのよ……一緒に入浴しようかね。」

その言葉に綾は真つ青になる、先程言った通り彼女は未だに他の女性と一緒にそんな所に行くのに非常に抵抗が、と言うか恥かしさが有るのだから。

「待って下さい、私は皆と一緒に……それに着替えとか持つてこなかったし。」

風呂に入るなら着替え（下着を含む）を用意しなければならぬが、綾は後で入るつもりだったので、当然持つて来ていない。

「ああ、大丈夫よ綾、そう思つて持つて来て貰つたから。」

綾の拘束に加わつていない女子に薫は視線を向ける。

「ちやんと用意してあるから心配無用よ綾・・・ああちゃんと貴女の部屋から持つて来たやつよ。」

その女子が薫に負けない笑顔を浮かべて答えると、綾は絶望のあまり目の前が真っ暗になる。

「それじゃ皆行きましようか・・・ゆつくりと話でもしながら入りましようね綾。」

笑顔で話す薫の言葉が、綾にとって死刑宣告に聞こえたのは言うまでも無い。

横須賀女子学校祭 1

横須賀女子海洋学校には海洋学校祭と呼ばれる学校行事がある。

まあよくある学園祭みたいに見えるが、普通の学校の物とは結構異なる。

海洋学校に所属する教育艦の艦内見学や実習訓練の公開など、軍隊のオープンベースみたいなものを思い浮かべると分かりやすいかもしれない。

様はブルーマーメイドを目指す者達に海洋学校の活動風景を見てもらうと言う意味が多分にあるのだ。

となれば当然の如く注目を浴びる事になるのは超大型直接教育艦武蔵であろう。

横須賀女子海洋学校において成績優秀者のみが選ばれて乗艦する事を許されるエリート専用艦。

将来のブルーマーメイドを事実上動かして行く事になる者達を育てるこの艦に乗艦出来る事は横須賀女子を目指す者達にとっては最高の目標になるだけに、毎年艦内見学には長蛇の列ができ、実習訓練時の乗艦希望者の競争率は他の艦の数十倍になると言われている。

そうなるに当然武蔵乗員の生徒達も見学や実習の準備に熱が入る、何しろ横須賀女子

を代表する立場になるのだから当然と言えよう。

ただそれで割に合わない役柄を引き受けさせられる者も出て来る。

武蔵の飛行船オペレーターである神城 綾の様に……

「以上が展示の概要よ、説明係りの娘はシフトの時間を忘れずにしてね。」

武蔵の飛行船格納庫で飛行長の指示を、飛行科の生徒達はシフト表を見ながら聞いていた。

「何か質問はあるかしら？」

飛行長はそう言つて飛行科の生徒達を見渡す。

「あの飛行長、私のシフトなんです、何故午前と午後ともに2回になっているんですか？」

飛行科の生徒が1人手を上げて質問してくる。

「それはね神城さん……貴女が今回の主役だからよ！」

「「おおお!!」」

周りにいた生徒達が飛行長の言葉に納得した表情で声を上げる。

「な、何でですかそれは!？」

だが本人、神城 綾は納得できないのか抗議の声を上げる、まあ他の生徒達が午前と午後の1回のシフトなのだから当然か。

「何言ってるの神城さん、貴女の注目度は武蔵の、いえ横須賀女子の中でトップなのよ、そんなの使わない訳にはいかないわ。」

熱の籠った説明に他の生徒達は当然と言った態度で綾を見ているが、本人にすれば「私は客寄せパンダか？」となっても仕方が無いだろう。

何故こんな事態になっているのか？それにはもちろん理由がある。

事の発端は入学して最初の海洋実習にあった、その時に撮影された広報動画、外部に公開し、生徒の親や関係者（主に中学校の生徒や教師だ）に見てもらうに有ったのだ。

元々動画視聴率の高い武蔵だったが、例年を越えるある意味異常な数値を記録したのだ、それもある時間帯でだ。

その時間帯に写っていたのが飛行科の実習風景、特に多く出ていたのが綾だったのだ、これは動画を撮っていた人間が、一際目立っていた彼女を面白半分に撮影したからだ。

当然問い合わせも殺到した、主に中学校の女子生徒からだ、曰くあの場面に写っていた美しい女子は誰なのかと、それも全国の学校からだからある意味凄い話しではあった。

お蔭で横須賀女子海洋学校の評判は高まった、近年出生率の低下による生徒不足に悩んでいる関係者にとっては朗報と言える、まあ綾本人にしてみればいい迷惑だった。

それもあつて綾は横須賀女子をPRする場面に必ずと言って良いほど引つ張り出される事になる。

学校案内や入学案内のパンフレットや動画への出演などがそれだった。

「まったく・・・」

武蔵の食堂で綾は不景気な溜息を付いていた、それは抗議が受け入れられなかっただけではなく、翌日の実習訓練公開での飛行船展示飛行のオペレート風景も公開されると聞かされたからだ。

「二日間も晒し者ですか・・・」

他人からすれば名誉な話しと言われそうだが、目立ちたくない綾としては当然苦痛でしかない。

それだけでなく男から女に性別が変わり、女の園に放り込まれた身としては3年間目立たず平凡に過ごしかつたと言うのが綾の本音だ。

とは言え、それは綾の美少女ぶりとその容姿と言動の差からくるギャップ（それが女子の庇護欲を刺激するらしい）で無理な注文であつたが。

「何不景気な表情しているのかな綾は、せっかくの美少女が台無しじゃない。」

そんな綾に声を掛けて来るのは入学式以来の付き合ひ、親友の古庄 薫だった。

「何が美少女ですか？止めて欲しいんですけど。」

薫のからかいに綾は抗議の言葉と視線を向けるのだが。

「そうりや申し訳なかつたわね綾。」

まったく申し訳なさそうに答える薫に綾は深い溜息を付くのだった。

「もう良いです・・・薫は休憩ですか？」

「ええ、航海科もようやく準備が一段落したからね、本番前に交代でね、綾もでしょ？」

綾の隣に持つて来た紅茶のカップを片手に座る薫はそう聞いてくる。

「ええそうですよ。」

目の前のアイスコーヒーのカップを指で触りながら綾は答える。

「ふーんじゃこの後暫らく暇なのよね。」

「・・・？」

「つまり教官室まで届けを出しに行くのに付き合えと言う訳ですね。」

「まあそう言う事ね。」

綾と薫は武蔵から降り教官室へ向かっていた、出し忘れていた書類を届ける為に。

「まあする事も無かつたので構いませんですけど。」

「ふふふありがとう綾。」

まあ薫としてはお互いの準備作業で綾と話せなかつたからまあ誘つたのだが。

綾としても薫と久々に話せて嬉しくはあつたのももちろん文句は無かつた。

だが綾はこの後、自分にとって天敵である人物にも久々に会う事になるとは思ってい
なかつた。

「久しぶりね綾。」

「!!??」

横須賀女子学校祭2

「久しぶりね綾。」

「!?!?」

武蔵から薫と共に教官室へ向かっていた綾に声を掛けて来た人物。

「綾……?」

薫は思わずそう呟いて隣に居る親友とその人物、いや女性を交互に見る。

その女性は綾にそっくりだったからだ、そう彼女が大人に成長した姿が正に目の前の女性だった。

だから薫はその女性は綾の肉親、姉かと思ったのだが……

「お、お母さん? 一体何をしに来たの?」

どうして母親が此処にいるのかと綾は驚かされる。

「お母さん……って、この方綾のお母さんなの?」

とても高校生の娘が居る様には見えないその姿に薫は驚く。

その場に驚愕に震えた薫と綾の声が木霊したのだった。

「神城 かほ……不本意ながらも私の母親です。」

にこやかな笑みを浮かべる母親の隣でげんなりした表情の綾がそう紹介する。

「不本意とは言ってくれるじゃないかこの不肖の娘が。」

「痛い・・・痛いってばお母さん。」

かほはそんな紹介をした娘、綾の頭を右腕で抱え込むと左手でこめかみをぐりぐりとする。

「まったく相変わらず可愛げの無い娘だね、一体誰に似たんだか。」

「少なくとも可愛げの無いのはお母さんに似て・・・いえ何でもありません。」

こめかみをさすりながら綾はまだ憎まれ口を叩こうとするが、かほがにこやかな笑みで左手を向けると慌てて口をつむぐ。

「ぶっ、くすくす・・・」

その2人の姿に薫は噴出してしまふ、そしてこの親子の関係もだ、この様子では娘は母親に普段からかなり弄られている様だ。

「薫・・・」

そんな薫に綾は恨めしい目を向けるが、美少女な彼女ではまったく様にならないのは不幸なのかどうなのか微妙なところだろう。

「い、い、めんね綾・・・ぶぶぶぶ。」

謝っているのにまったく謝っている様に見える薫に綾は深い溜息を付く。

「それでだ、そこに居る美人の娘が誰なのか紹介してはくれないのかい不肖の娘よ？」
にやにやしなから言ってくる母親にも恨めしい目を向けるが、当人はまったく意に介していない。

「・・・同期で同じ武蔵に乗艦している古庄 薫さんです。」

「古庄 薫と申します、初めましてお母様。」

笑いを引つ込めると真面目な挨拶をする薫。

「ああ初めまして古庄さん、うちの娘が世話になつて居るね、お礼を言わせて貰うよ。」

母親の方もにやにやした表情を消して真面目に挨拶を返している。

まったく普段からそうしていれば良いのにと、思う綾、怖くて直接は言えないが。

「いえいえお礼を言われるまでもありません、その代わりにですが・・・綾を私に下さいお母様。」

「か、薫何を言つてるの貴女は?!」

「今の貴女では駄目だね、そうりつぱなブルーマーメイドになれたら考えてあげても良いね。」

「お、お母さんも何いつているんですか?!」

真面目に挨拶していた筈なのに何でそんな話になるのかと綾は大混乱だ。

「あ、あははは!!何慌てるのさ綾。」

「もう、綾だったら、可笑しいわ。」

綾の反応に母親と薫はお腹を押さえて笑い始める、その姿を見てようやく自分がかわれていた事に気付く。

「ふ、2人共酷いじゃないですか!？」

涙目で抗議する綾だが、その姿が余計母親と薫を煽っている事に気付いていなかった。

2人の笑いが収まったのは暫らくたってからだ、もちろん綾はすっかり拗ねてしまっていたが。

「だからごめんなさいって謝っているじゃない綾。」

「知りません薫なんて。」

謝罪している薫に対して綾は目を合わそうともしない、もつとも彼女の容姿ではただ可愛いだけなのだが、それを言ったら余計拗ねそうだから言えないのだが。

「まったく器の小さな娘だね、そんな事で拗ねるなんて。」

母親のそんな言葉に綾は睨みつけるが、やはり可愛さが邪魔(?)で効果は無かった。「古庄さんの言っているのは親愛から来たもんじゃないか、それくらい分かるだろうに。」

「う・・・」

もちろん綾だつてそれくらい理解はしているのだが、やはり恥かしいものは恥かしいのだ。

とはいえ何時までも怒りを持続出来る性格ではない綾は結局溜息を付きながら許してしまふのだった。

「分かりました、もう良いですよ薫……でも出来ればあう言う冗談は止めて下さいね。」男としての感情がまだ残っている身では、女の子からの告白(?)は心臓に悪い綾だった、例えそれが冗談であつたとしても。

「ええ、できるだけ控えるわ。」

薫も少々からかい過ぎたと思つたので一応は反省する、彼女としても綾に嫌われるのは本望では無い。

「なら良いですよ薫。」

お互い見つめあいながら2人は笑いあう、ちなみに綾は後でそれを思い出して悶絶していたらしいが。

一見麗しい友情の姿だが、母親は「我が娘ながらちよろい。」と考えていた事を綾は知らない(笑)。

「そ、それでお母さん、一体何で横須賀女子に?」

綾は肝心の話しを聞いていなかった事を思い出し母親に尋ねるのだが。

「そうね何でかほ、貴女が来たのか・・・私も知りたいわ。」
本日2度目の驚愕が綾と薫に襲い掛かろうとしていた。

横須賀女子学校祭3

「そ、それでお母さん、一体何で横須賀女子に?」

綾が横須賀女子に來た理由を母親に尋ね様とした時。

「そうね何でかほ、貴女が來たのか・・・私も知りたいわ。」

更にそれに重ねる様に問い掛ける声、3人はその主の方を見て・・・

「む、宗谷校長先生!」

薫と綾は慌てて姿勢を正し敬礼する、一方かほの方は氣楽そうに手を上げて挨拶する。

「久しぶりじゃないか真雪、大和艦長殿がどうしたんだい?」

横須賀女子海洋学校の校長である宗谷 真雪は薫と綾の敬礼に答えつつかほを睨み付けながら答える。

「今年度から横須賀女子の校長に就任したわ・・・手紙で知らせた筈だけかほ。」

「えっとそうだったかな・・・ははは氣付かなかったわ。」

目を泳がせて愛想笑いをする母親を見て綾は絶対見ていなかったなと確信した。

「返事を返さないだけでなく、読んでもさえないなかった訳ね、ほんと貴女らしいわ。」

額に手を当てながら首を振って宗谷校長は心底呆れた様に言う。

「まあ色々忙しかったんだよ私は。」

「手紙を読む暇さえ無い程何が忙しかったのか、出来れば聞かせて欲しいものね。」

引きつった愛想笑いを浮かべながら釈明するかほに腰に手を当てて睨みつけながら問い質す真雪。

一方の薫と綾は状況に付いて行けず呆然とするしかなかった、いや母親が自分の通っている海洋学校の校長と親しげ（笑）にしている娘の方は呆然を通り越して酷い混乱状態だった。

「あの．．．宗谷校長先生．．．綾の、いえ神城さんのお母様とお知り合い何ですか？」綾に比べれば多少ましな状態だった薫が宗谷校長に質問してみる。

「かほ、神城さんの母親とは同期よ、卒業後は彼女が退役するまで同じ艦に乗艦していたわ。」

衝撃的な真雪の話に薫と綾は互いに顔を見合わせてしまう。

「綾のお、お母様が校長先生と同期で一緒の艦に乗っていたの？」

「わ、私も知りませんでしたよ、そりゃ須賀女子のOGで元ブルーマーメイドだったのは確かですが。」

母親が須賀女子卒業しブルーマーメイドで働いていた事は知っているが、どんな職種

で、何故退役したかは綾は知らなかった、と言うか教えて貰えなかったのだ。

「貴女娘さんに何も話してないのね。」

「話す様なものでもないからね、秘密の有るのは良い女の証さ。」

真雪のジト目にかほはどや顔で言うが。

「何気取っているのかしらね、どうせ面倒くさかったからでしょ。」

皆から目を逸らして惚けた表情を浮かべるかほ、どうやら凶星らしい。

「校長先生、あの同じ艦に乗られていたと言う事はもしかして?」

何か考えていたらしい薫はふと気付いた様に真雪に質問して来る。

「ああ武装船団を単艦で殲滅したことかい?確かに一緒だったなあ真雪。」

かつて領海内を荒らし回った武装船団を真雪が指揮して単艦で殲滅した事件、ブルー・マーメイドの人間で在れば知らぬ者の居ない伝説だ。

「あれで真雪は『来島の巴御前』って有名になったんだよな。」

かほはどや顔で話しているが、それに対し真雪は苦味を噛み潰した様な表情を浮かべて答える。

「その二つ名が付いた理由の大半がかほ、貴女だつて分かっているんでしょね?」

「「えっ?」」

意外な真雪の言葉に薫と綾は驚いた声を上げると、真雪はうんざりした様に説明す

る。

「確かにあの時の作戦立案と指揮は私が取ったわ……でもその作戦を拡大解釈したのが彼女なのよ。」

「そうだったかな？」

すつ呆けるかほを睨みながら真雪は続ける。

「そうよかほ、私は多少の損害を与えて相手の戦意を失わせ領海外へ追い出すつもりだったのに、貴女は徹底的にやったわよね、それこそ向こうの船を沈没寸前にするまでにね。」

「はあ……」

「……」

薫と綾は驚きの余り、言葉が出ずただ聞いて居るだけだった。

「まあ確かに領海外へ追い出せし、報復する意思を無くさせたわ、でもお蔭で私は『来島の巴御前』なんて二つ名を得る事になったわ。」

「栄誉な話しじゃないか、なあ2人共。」

かほはそう言って薫と綾を見るが。

「その二つ名で私がその後、どれだけ苦勞させられたか、忘れたとは言わせないわよかほ。」

「ははは・・・そんな事も有ったねえ。」

何だか人事の様に話すかほに真雪は心底呆れた表情でぴしやりと言う。

「有ったねえ？じやないわよ、貴女はまったく・・・」

伝説の真実（？）を聞いて薫と綾は何を言うべきかまったく分からなかった。

そんな2人を見て真雪は苦笑いをすると言語掛ける。

「2人共この話しは此処だけの話し、として貰えるかしら。」

「あ、はい分かりました校長先生。」

「もちろんです。」

綾としては自分の母親が原因で真雪に迷惑を掛けてしまった事もあり素直に聞き入れる、それでなくても彼女には自分の身体の事で色々配慮して貰った恩がある。

薫としても、あの伝説にそんな裏が有ったとは流石に周りの者には言えないと思いつけ入れるしかなかった。

「ありがとう2人共、ところで貴方達何か用事が有ったのでは？」

真雪の言葉に薫と綾は自分達の用事を思い出す。

「そうだったわ綾、急がないと、申し訳ありません校長先生。」

「うん、確かに・・・校長先生それでは失礼します、お母さん迷惑を掛けない様にしてね。」
薫と綾は敬礼をすると慌てて教官室へ向かうのだった。

横須賀女子学校祭4

「家の娘は旨くやつている様だね。」

走って行く薫と綾を見ながらかほが呟く、先程とは違って娘を思う母親の表情を浮かべて。

それを見て真雪は微笑むとかほと同じ様に薫と綾を見て言う。

「ええ、穏やかで周りの娘達に気配りの出来る性格だから友人も多い見たいだし、学業も優秀よ・・・彼女本当に貴女の娘なの？」

「生まれた時は息子だと思っただけどね、まああの娘は父親似なんだよ。」

真雪のからかい気味の問いにかほは肩を竦めて答える。

「それは幸いね、貴女と同じ様な娘だったら、私は横須賀女子を逃げ出しているところだわ。」

「言ってくれるね・・・とは言え厄介事を押し付けて悪かったね。」

何時もと違いしおらしい態度に、真雪は彼女も娘を常日頃心配している母親なんだなと思う。

その気持ちは真雪も理解出来る、彼女もまた3人の娘を持つ母親であるからだ。

「厄介事なんて貴女に会った時からだから今更よ……それに他の厄介事に比べればまだましよ。」

疲れた様に溜息を付く真雪を見てかほは苦笑いを浮かべて聞き返す。

「その様子じゃ相変わらず厄介事に追い掛け回されている様だね。」

「ええ、増える事は有つても減りやしない……知っているかしらかほ、女だけの組織でも官僚主義は無くならないみたいよ。」

視線を海の方に向け真雪はほやく、それを聞いてかほは顔を顰める。

「……さつさと見切りを付けて出て行った貴女の方が利口だったと思うわ。」

「私はそう言った厄介事から逃げた人間さ、残つて何とかしようとしたあんたは違ふや。」

疲れきつた表情を浮かべて言う真雪にかほは自嘲気味に答える。

「そのわりには子供が娘になった途端、横須賀女子に入学させてきたじゃない。」

一転して悪戯っぽい笑みを浮かべて真雪はかほを見て言ってくる。

「あんなに忌み嫌つていたブルーマーメイドにする為に。」

真雪の指摘にかほは頬を赤く染めるとそっぽを向いて黙つてしまう。

それを微笑んで見ながら、真雪は薫と綾が走つていった先を見ながら言う。

「あの娘達が一線で活躍する頃にはブルーマーメイドも変わっていると良いわね、もち

ろんその為の努力はするつもりだけどね。」

そう呟く真雪を見てかほは微笑んで言う。

「あんたならやるだろうさ、それに優秀な娘さんが3人もいるじゃないか。」

「上の2人は心配要らないんだけどね、ましろは・・・私の生真面目なところだけ引き継いだみたいで、自分で自分を追い込みかねないわ、だからこの先心配で。」

宗谷家の人間としての重圧に加え、生真面目故の硬直した考えがましろを取り返しのつかない事態に追い込むのではないかと真雪は危惧しているのだ。

「大丈夫さ、その娘にもきつと理解してくれる人間が出来るさ・・・かつての私達の様だね。」

その破天荒な言動の為、孤立しがちだったかほの真雪は良き理解者であったのだ。

それがどれだけ助けになったか、かほは忘れていない。

一方生真面目な為か堅物扱いでこちらも誤解を受ける事の多かった真雪にとっても、かほは本当の自分を理解してくれる存在だったのだ。

「そうねましろにも、私達のいえあの2人の様な関係を築ける様になってくれる事を祈っているわ。」

2人の母親はお互い顔を見合わせて微笑むのだった。

「ところでは、貴女は学校祭期間中ずっとこちらに居るのでしょうか?」

「まあね、出来れば最終日まで居たいし、だから学校祭中はこちらに宿を取って滞在するつもりよ。」

真雪の質問にかほが答える。

「それなら・・・今日の夜は大丈夫ね、翌日もここに居るなら。」

「真雪、あんた何を考えているんだい？」

何かを思いついたと言う表情を浮かべた真雪にかほが聞く。

「久々にどうかかなと思つてね、これでも現役時代と遜色はないわよ。」

その表情と何かを掲げる仕草の真雪にかほは彼女が言いたい事に気付く。

「私は構わないけど、校長のあんたが飲みに行くなんて良いのかい？学校祭の途中だろうに。」

「優秀な教官と生徒が居るからね、校長なんて学校祭中にする事なんか無いわよ。」

何時もの厳格な雰囲気はそこに無く、かつての『来島の巴御前』の、まあ本人は否定するだろうが、姿が戻ってきた真雪だった。

「それに一晩飲み明かしてどうにかなる柔な鍛え方はお互いしてないでしょ？」

「そうりやそうだ・・・分かったよ付き合おうじゃないか不良校長どの。」

悪戯っぽく笑うかほに真雪は同じ様に笑つて言う。

「ええとことん付き会ってもらわよこの悪党さん。」

2人は顔を見合わせて笑いあうのだった。

この日、横須賀の夜空の下で、久々に旧交を温めあう、横須賀女子OGの2人が居た。

合同演習 1

「本当にこの格好で合同演習期間を過ごすんですか薫？」

「そうよ綾、貴女は合同演習が終わるまでその姿で居る事、もしろん彼らとの長時間の接触も厳禁、あと常に私か航空科の娘と行動する事。」

薫は真剣な表情で綾に言う、周りを数人の女子生徒達と綾を囲みながら・・・

『皆さんもご存知の通り、本日より東舞鶴男子海洋学校の生徒を迎えての合同演習が始まります。』

武蔵艦内に艦長の声が流れる。

『皆さんにおいては様々な思いがありますが、横須賀女子海洋学校の生徒として恥かしくない言動を取る事を望みます。』

東舞鶴男子と横須賀女子の合同演習、環境の異なる者達が交流する事によって見聞を広め、未来のブルーマーメイドとホワイトドルフィンとしての意識を高める。

そんな意義が込められた合同演習だが、大半の者達はそんな事より異性との出会いが一番の感心事なのは敢えて言うまでも無いだろう、何しろ年頃の少年・少女達なのだから。

艦長からの訓示が終わった後の武蔵艦内が騒がしいのはその点仕方が無い話かもしれない。

もちろんそんな浮ついただけでは無い真剣な者達も居るし、東舞鶴男子との合同演習に嫌悪感を感じている者達も半数はいる。

そしてある生徒を巡って別の意味で真剣な者達も居たのだった。

「と言う訳で皆、合同演習期間中どんな手を使つても守らなければならない事は理解しているわね。」

「もちろんよ薫。」

「ええあらゆる手段を講じてもね・・・」

「絶対に連中に手出しさせないわ。」

「うんー」

武蔵食堂の一角、航海科所属の薫を中心に女子生徒達が集り決意を固めていた。

そこに集っているのは大半が航空科の生徒だが、薫の様に他科の者達も居た。

果たして何をそんなに熱心に話しているのかと言うと。

「あの・・・薫、それに皆さん一体何をしようと言うんですか?」

生徒達の中心に座らされている綾は心中疑問で一杯だった。

その日の実習を終え、部屋に戻ろうとしていた綾は航空科の生徒達に拉致同然に此処

に連れてこられたのだ。

「待っていたわ綾。」

親友である薫や顔見知りの他科の生徒達が集合しているこの場所に。

そして突然始まる決意発表？に綾は困惑するしかなかった。

「簡単な事よ綾、今日から始まる合同演習中の対応、貴女の保護についてよ。」

「保護ですか？一体何から私を……」

さっぱり訳の分からない綾は薫に聞き返すのだが、次の瞬間薫や他の女子達から一斉に睨まれる。

「綾この際だからはっきり言わせて貰うわ、貴女無防備すぎるのよ年頃の女子としてね。」

指を綾に突きつけ薫は言う、周りを囲む生徒達もその言葉に深く頷いている。

「無防備な事は無いと……」

「無いとは言わせないわよ綾。」

綾の弁明を遮り薫は他の生徒達に視線を向ける。

「証人前へ。」

「はい検察官。」

これは裁判ですかと綾は突っ込みたくなった。

「被告人は半月前の艦上運動の際、事もあろうか下着を付けず参加し、危うい姿を一般人に晒す所でした。」

「あ、あれはついいうっかりして・・・」

艦上運動と言うのは実習中に運動不足になるのを防ぐ為に行われる物で、艦上を何周も走ったりする。

綾はその艦上運動に参加する際に下着、ブラを付け忘れてしまったのだ。

言っておくが他意は無い、本当に忘れてしまったのだ、女子になって1年以上経つが綾は未だにやってしまう。

だが状況が最悪だった、まず上に着ていたのがよりによって布の薄い白のシャツだったのだ、しかも当日は気温が高く汗ばむ気候だった

そんな状態でブラ無しで走れば結果は言わなくても分かるだろう、綾の大きくは無いが形の良いものが露わになってしまったのだ。

そして武蔵がその時横須賀女子海洋学校の棧橋でなく、一般の港の棧橋に停泊していたのだ。

周りには一般の船舶も停泊しており男性の船員も数多く居る状況に係わらず綾は意識していなかった。

幸い他の生徒が気付き、武蔵艦内に連れ戻された綾は薫から1時間近くも説教をされ

る事になったのだ。

「うっかりで済まないわ．．．それに貴女にはまだまだ余罪があるんだから。」

これってやっぱり裁判じゃないかと綾は言いたかったが、薫を始めとした生徒達の迫りに黙るしかなかった。

「それでは次の証人前へ。」

薫達の綾への弾劾（？）は続くのだった。

合同演習2

綾への弾効は続く。

「前回の外出時、被告人は若い男性グループに声を掛けられ連れて行かれそうになりました。」

「あれは道を聞かれたので案内しようとして……」

薫や他の友人達と休みに街へ出た時、綾は男性グループに道を聞かれ、出来れば案内して欲しいと言われたのだ。

親切心から案内しようとした綾を薫達は拘束してその場から連れ出した。

『ごめんなさい、私達これから用事があるの。』

そう薫が言い残して。

その後綾は近くの喫茶店に連行されまた薫の説教を受ける事になった。

「あんなの口実に決まってるわ、狙いは貴女よ綾。」

様はナンパだと薫は言いたいらしい。

「まさか、私をナンパなんかしてもしょうがないと思いますが。」

その綾の答えに薫を始めとした友人達は深い溜息をついてくる。

「貴女はもうすこし自分の容姿を自覚しなさい。」

同じ女子である自分達さえ見惚れる美少女の綾を男性連中が見逃す事は無いと薫は確信している。

なのに当の本人はその自覚がまったく無いのだから周りの者達は頭が痛かった。

もちろん綾だつて自分が整つた容姿をしている事は分かっているが、それが周りに与える影響についてはまったく気にしていないのだ。

そう自分なんて大した事は無いと思つている節が綾にはあつた、容姿だけでなく他の事、例えば成績でもだが。

優秀だと誉められても、『自分のすべき事をしただけで大した事ではないですから。』と綾は言う、それも謙遜や遠慮でなく本心から……

その為、綾は教官や生徒達から自己評価が低いと認識されている。

さて話が逸れてしまったので、先程のナンパについてに戻す。

そう言つた事から、その後の外出時に綾は薫と友人達に周りを固められ、男性達が声を掛けようと近づくと度に即座に移動させられる様になつた。

まあそう言つた訳で今回の合同演習に薫達が強い危機感を抱くのは当然だろう。

それが今回の弾劾裁判（？）が開かれた理由だつたのだ、そして薫裁判長の判決が下される。

「もう十分でしよう綾、貴女の有罪は確定したわ、よつて判決を下します。」

結局綾はろくに弁明する事も出来ず、薫に判決を下されるのだった。

横須賀基地の棧橋に接岸した武蔵に東舞鶴男子海洋学校の生徒達が乗艦してくる。

ちなみに乗艦場所が学校でなく基地なのは無用な混乱を避ける為だった。

学校では武蔵の乗員以外の生徒達が居るからだ、女子高に男子を入れる事への懸念もあつた。

そんな彼らの顔に緊張と共に期待の表情が出ているのは年頃の男としては仕方の無い事かもしれない。

とは言え、海の上では紳士たれの教育方針の東舞鶴だけに露骨な態度の者は居なかつたが。

「ようこそ武蔵へ、歓迎いたします。」

その東舞鶴の生徒達を武蔵艦長の女生徒と各科の責任者達が迎える。

「ありがとうございます艦長、暫らくの間よろしくお願ひします。」

東舞鶴側の責任者である男子生徒が答える。

「それでは皆さんこちらへ。」

武蔵乗員に案内され男子生徒達は艦内へ向かう。

そんな中、男子生徒が武蔵乗員の女子生徒の一人とぶつかつてしまう。

物珍しさに注意が散漫状態だった為だ。

「す、すいませんでし．．．た．．．」

その男子生徒は相手の女子生徒を見て言葉が止まる。

何しろ髪を三つ編みして牛乳瓶の瓶底見たいな眼鏡を掛けた女子生徒だったからだ。

着ている制服もスカート丈が足首までであったり（普通は膝上が標準）と他の女子生徒

達は印象が違う。

そうよくアニメなどに出て来る地味な女の子という感じなのだ。

「いえ私も不注意でしたので気にしないで下さい、それでは。」

その女子生徒は足早にその場を去って行く。

「本当にあんな子居るんだな。」

他の男子生徒が通路を走って行く女子生徒を見て言う。

物珍しいものを見たなと周りの男子生徒達は思った。

「おいお前達何をしているんだ、もう行くぞ。」

先に進んでいた男子生徒が声を掛けてくる。

「お、おう今行く。」

慌てて後を追う男子生徒達、彼らは直ぐに先程の女子生徒の事など忘れてしまった。

「うん計画通りって所ね．．．お帰り綾。」

男子生徒達を通路の影から見ている薫はそう呟きながら先程の女子生徒を迎える。

そう先程の女子生徒こそ変装した綾だったのだ。

「何が計画通りなのか、と言うか何で私がこんな格好を・・・」

どや顔の薫を見て綾は深い溜息を付くのだった。

合同演習3

薫達の計画、それは綾を地味な容姿に変装させ合同演習期間を過ごさせると言うものだった。

その為にわざわざ三つ編みのウィッグを用意し、スカートも長めの物を調達したのだ。

先程の男子達の反応を見る限り薫達の思惑は当たった様だ。

「でもこんな格好でも完全に隠しきれないんだから注意が必要よ。」

そうこんな地味な容姿であっても綾の美少女の魅力は隠しきれないと薫は思っている。

だから綾は男子生徒達との接触は出来るだけ避ける様にし、常に大人数で行動する事になっていった。

少々大げさではないかと綾は思うのだが、薫に言わせれば「貴女は状況を理解していない。」となる。

綾の事は横須賀女子の外でも結構有名だからだ。

それは例の実習風景の動画が横須賀女子関連の中では最高の視聴回数を記録してい

る事でも分かる。

もちろん東舞鶴男子の生徒達だって知っており、願わくばお近づきになりたいと考えているだろう。

それだけに油断は出来ないと薫は気を引き締める。

そんな薫を見ながら綾は彼女はこうしてここまでやるのか疑問が尽きない、いや他の友人達もだが。

決意に燃える薫を見ながら綾はこの先どうなるか心配になってくるのだった。

そんな綾の心配を他所に合同演習は問題なく行なわれていった。

東舞鶴男子の生徒達も武蔵艦上では紳士である事を心掛けていたのでこれと言ったトラブルも起きず済んだ。

一方薫の予想通り男子達は武蔵いや横須賀女子の最大の有名人(?)である『神城綾』の事に関心があった様で、武蔵乗員の女生徒達から情報を得ようとしていた。

だが残念ながら男子達の思惑通りには行かなかつた。

「私は所属科が違うから。」

「さあ私は興味ありませんから。」

乗員の女生徒達からはこんな反応が帰ってくるだけだった、中にはそんな質問に嫌悪感を露骨に示す娘さえ居たくらいだ。

そう言った事もあり男子達は綾が美少女過ぎる為、他の女生徒達から嫌われているんじゃないかと思つたらしい。

「女の嫉妬は怖いな。」・・・と。

だが彼らは勘違いしていたのだ、綾は他の女生徒達から嫌われてなど居なかつた。むしろ容姿に似合わない言動の綾を皆愛して（笑）いたのが本当なのだ。

つまり女生徒達の反応は、男子達と綾を接触させたくないからだつたのだ。

「神城（綾）さんを愛でられる特権は私達女子だけのものです。」

言つて置くがこれは全員で示し合わせたからと言う訳では無い、各自がそう考え結果的に艦長を含めた武蔵乗員の総意になつたのだ。

そして薫達以外の者達にも守られている事に綾は最後まで気付くことは無かつた。

こうして武蔵全乗員の庇護を受けた綾は何事も無く合同演習を終えられ・・・無かつた。

厄介事は結局綾を簡単には逃がしてはくれなかつたのだ。それは合同演習最終日に起こつた。

合同演習4

合同演習最終日。

武蔵の後方にある飛行船発着甲板で飛行訓練が行なわれていた。

白い作業用のつなぎを着た飛行科の女生徒達と男子生徒達が動き回っている。

そしてその場に変装した綾も居た。

本来なら飛行船オペレーターである綾が居る場所では無いが、彼女は許されるならこ
うやって飛行船発着甲板での訓練に参加する事があった。

実を言うと綾は整備科の訓練にも参加しており、武蔵乗員の間では有名だったりす
る。

まあ最初はやり過ぎだと言う声も無くは無かったが、本人の熱心さもあり今では文句
の言う者も居ない状態だ。

むしろ歓迎する向きもあつたりしている、これは綾が武蔵内で人気者である為でもあ
るのだが。

もちろん訓練に参加している男子生徒達と離されているのは当然だ。

そして今、1機の飛行船が着艦する為発着甲板に近付きつつあった。

この時までには男子生徒達も真面目に参加していたのだが、やはり最終日と言う事もあり、彼らは少々気を抜いていた。

その為、男子生徒達は飛行船の進入路に立っている事に気付いていなかったのだ。

周りに居た飛行科の女子生徒達はその時他の事に気を取られこちらも気付いていなかった。

そんな中、綾は補助と言う事もあり周りを見渡す余裕があり、男子生徒達に気付く。危ないと感じ綾は男子生徒達に注意しようと近付いた時だった。

進入中の飛行船が姿勢を崩した、急激な横風でオペレーターが操作を誤ってしまったのだ。

そして飛行船は進入路に立っている子生徒達へ急速に接近してしまうが、その時点で誰も気付かない。

そう綾を除いて・・・

「危ない!!」

走り出し綾は男子生徒達を飛行甲板に突き飛ばし自分も伏せる。

その上空を飛行船は通り過ぎて行く、綾と男子生徒達の上数メートルを・・・

「神城さん!?!」

「着艦中止!!3号飛行船を一旦上空待機へ!」

事態に気付いた飛行科の娘達が叫び、騒然となる飛行甲板。

「大丈夫ですか皆さん・・・あの位置に立っていては危険だと習わなかったのですか？」
全員が無事で綾は安堵するが、それと共に怒りも沸いて来たのか何時もと違いきつい
言いかをしてしまう。

「.....」

だが言われた男子生徒達は呆然とした表情で綾を見返すだけだった。

「?本当に分かつて.....」

「神城さん。」

そんな男子生徒達に綾は更に言葉を続けようとして飛行科の娘に肩を叩かれる。

「すいません、でも今は彼らに注意しておかないと.....」

大事な事だから事情説明は後にしてと思った綾だが、その娘が言いたかったのはそんな事では無かった。

「そうじゃ無くて・・・神城さん、ウィッグと眼鏡が飛んじやっているわよ。」

「へっ!?!」

慌てて頭と目の辺りを触った綾は三つ網のウィッグと牛乳瓶底の眼鏡が無い事に今
気付いた。

そう綾は変装を解いた状態で男子生徒達と至近距離で向かい合っているのだ。

「あ、貴女はもしかして神城 綾さん？」

男子生徒達は地味な女子が突然美少女になった事に一瞬呆然となったが、直ぐに立ち直ると聞いて来る。

「あ、いえそれは……」

綾は慌ててしまった、何しろ変装を絶対に男子生徒達の前で解くなど薫に注意されていたからだ。

これじゃ後で怒られる、いやそれより今の状況をどうにかしないと綾はパニック状態になったのだが。

「彼女を至急艦内へ……急いで!!」

突然両脇を女子生徒達に捕まれ綾は連行されて行くのだった。

「……注意して下さいいね皆さん、それでは作業を続けましょう。」

「「はぐ。」」

そして何も無かったかのように作業に戻って行く女子生徒達。

男子生徒達はその状況に言葉を失ってしまうが、何とか女子生徒達に問い掛ける。

「あ、あのさっきの娘は神城……」

だが問い掛けた男子生徒を遮って、女子生徒は微笑みながらこう答えた。

「ここに神城さんなんて生徒は居ませんでした、皆さんは幻覚を見たんですよ。」

「いや俺達を助けて・・・」

言いかけた男子は言葉を思わず止めてしまう、何故なら凄まじいプレッシャーがその女子だけでなく、周りからも掛けられて来たからだ、思わず身の危険を感じてしまうくらい・・・

結局男子生徒達はそれ以上何も聞く事が出来なかつたばかりか、実習終了までその場を動く事さえ許されなかつた、女子生徒達のプレッシャーと視線の為に。

合同演習5

「本当に居たんだったって、なあお前も見ただらう?」

飛行甲板で綾を目撃した男子生徒はそう言つてその場に居合わせた友人に言う。

「ああ確かに居た、間違いない。」

友人もそう言つてくるが、話を聞かされたその場に居なかつた男子達は困惑した顔でいる。

「別にお前達を疑う訳じゃないんだが……でもなあ?」

実習から解放された男子達は、他の男子と合流後綾に遭遇した事を話したのだ。

聞かされた男子達は色めき立ち、その話しはたちまち演習に参加していた者達全員に広まつた。

早速他の男子達もその事実を確かめようと動き出したのだが、結果はかんばしくなかつた。

女子生徒達の反応は最初の頃より厳しかったからだ。

曰く、「さあそんな人知りませんね。」とか「疲れていますね皆さん、大丈夫ですか?」
と言われる始末だった。

中にはそんな話を出した瞬間、周りの女生徒達に囲まれ、その場から追い出された男子もいたのだ。

ちなみに例の美少女に変身(?)したと言う地味な女子生徒はその後男子達の前に現れなくなった。

彼女についても女生徒達は口を閉ざし一切話そうとはしなかった。

「彼女は別の件で忙しいんです、第一飛行船オペレーターである彼女が飛行甲板に居る訳ないじゃないですか。」

男子達に質問された女生徒はそう言って答えた、それはもう不機嫌そうにだ。

だから目撃した男子以外の者達は本当の事かと疑問に思うようになった。

「一応武蔵艦長の娘にも聞いたんだがな……」

リーダーである男子生徒が、それとなく武蔵艦長の女子に聞いたのだが。

「さあそんな生徒いたでしょうか……多分皆様は妖精でも見たのでしょうか、武蔵に昔から居ると呼ばれる何か乗員に危機に陥ると現れる妖精の少女に。」

もちろんそんな話なんて無いのだが、武蔵乗員では無い男子達に分かる訳がなかった。

結局男子生徒達は事の真偽を確かめる事が出来ず混乱状態のまま合同演習を終えようとしていたのだった。

まあ何故こうなったかは説明の必要はないだろう、武蔵乗員達は艦長を筆頭に綾の事を隠蔽しようとしたのだ、しかもまた全員で示し合わせる事もせずに。

何ともすつきりしない気分のまま男子生徒達は武蔵を降りて行く羽目になった。

なお正体のばれた綾は薫にそれはもうたつぷりと説教を食らい、男子生徒達が降りるまでの間権限の無い生徒は入れない飛行科のデータ管理室に軟禁された。

ちなみに飛行船の航法プログラムを管理するこの部屋に本来SEでない飛行船オペレーターの綾が入れたのは、彼女がSEの資格を持っていたからなのは余談である。

こうして綾にとっては散々だった合同演習は終わったのだが、実はこれには綾や薫などの当事者達が知らない後日談がある。

隠蔽するする為武蔵艦長が東舞鶴男子生徒達に言った妖精の少女、もちろんこれは嘘なのだが、何故かそれが武蔵の代々の乗員達の間で語り継がれる事になったのだ。

それは・・・

合同演習6

武蔵乗員を助ける妖精。

そんな噂が始まったのは綾達が卒業し、次年度の乗員達が乗るようになった頃だった。

その日、航海科のミスで武蔵の様な大型艦にとっては航行が危険な海域に入り込んでしまっていた。

だが当直に付いていた者は確認を怠り、その事に気付かない、そのままでは座礁しかねない状態だった。

「このまま進んでは危険です、進路を変えて下さい。」

艦橋でその時舵を握っていた生徒は突然艦橋に入って来た生徒にそう言われる。

「へっそれは・・・？」

突然そんな事を言われ驚く生徒達だったが、慌てて航路を確認する。

「何でこんな進路を？このままだと座礁してしまうわ。」

ようやく彼女達もミスに気付き進路を変える、間一髪で武蔵は座礁を回避出来た。

「まったく航路設定した娘は何をやっているのかしら・・・兎に角助かったわ、ってあれ

「？」

ほつとして教えてくれた生徒に礼を言おうとした娘は肝心の彼女がもう居ない事に気付く。

「あれあの娘？」

もう1人の生徒に聞くが、聞かれた方も首を捻っている。

「そう言えば何時の間に？って言うか彼女誰なのかしら、見た事が無いのだけけど。」

そう危険を知らせてくれた少女を2人はまったく見た記憶がなかったのだ。

既に洋上生活を数ヶ月していて、乗っている乗員については顔も名前も知らない者は居ないのに。

2人が見たその生徒は、三つ網で牛乳瓶の底みたいな眼鏡を掛け、膝下丈のスカート姿だった。

報告を聞いた艦長は航海科の生徒を注意すると共に乗員全員に確認した、誰が航路のミスに気付き、当直の者に知らせたのかと。

だが誰もそんな事をしたと言う者が居なかったのだ、当時他の場所に居た者の中に。

武蔵乗員達が恐怖と困惑に襲われたのは当然の事だ、このまま航海を続けるべきでは無いと言いだす者まで現れる状態だった。

そんな状況を変えたのが、現艦長が去年卒業した先代艦長の残した航海日誌を確認し

た時だった。

そこに武蔵乗員を救った、同じ容姿の生徒を記述した文章を見つけたのだ。

もちろんそれは綾の存在を隠す為に当時の艦長が捏造した話だったのだが、現在の武蔵乗員達は航法ミスの中で事実と認識してしまったのだ。

船乗りと言うのは結構信心深い者が多い、だから武蔵乗員達は意図も簡単に信じてしまった。

唯これがその時だけの話であれば直ぐに消えてしまう都市伝説の類だったのだが、不思議な事に似た様な話しはその後の武蔵乗員達の間でも起こり続ける。

結果、武蔵には乗員達を助ける少女の姿をした妖精が居ると言う伝説が生まれたのだった。

ちなみにこの伝説は武蔵乗員達の間だけの秘密とされ、同期や親しい者にさえ話す事はタブーとされた。

そしてこの伝説にRATtウィルス事件に遭遇した知名もえか、そして彼女と共に感染をせず済んだ2人の乗員達もまた遭遇していたのだった。

乗員達がウィルスに感染してしまったのは、武蔵が回収したRATtが原因だった。

実はもえかは艦長としてそのRATtを検分する予定だったのだが、直前に乗員の娘に「相談したい事があります。」と呼び止められたのだ。

乗員の事を第一に考えるもえかは検分を副長に任せ、自分は後で艦長室に来ると言うその乗員を待ったのだが結局彼女は来なかったのだ。

そしてもえかはその時点で相談があると言つて来た乗員の娘を見た事が無い事に気付いた。

艦長としてもえかは乗員の顔と名前は全て記憶していたのだが、その中にその娘は存在しなかったのだ。

2人の乗員達もまた同じだった、物珍しきで検分に立ち会おうとしていたら他の乗員に「艦長が呼んでいます。」と言われ、もえかの所に行ったのだが。

「私はそんな伝言はしてませんが。」

当惑するもえかに2人もまた顔を見合わせて当惑するのだった。

「そう言えばあの娘だれだっけ？」

「あつ・・・確かに見覚えの無い娘だったわ。」

そう2人もまたその時点で自分達に艦長の伝言だと言つて来た乗員が誰だったか知らない事に気付いたのだ。

「私の伝言と言つたのはどんな娘だったの？」

その質問に答えた2人の言葉にもえかは驚愕させられてしまった。

「三つ網で牛乳瓶の底みたいな眼鏡を掛けて、膝下丈のスカートを履いていた娘です。」

それはもえかに相談があると言って、結局現れなかったあの娘と同じだったからだ。
凶らずも3人が武蔵の伝説に遭遇してしまった瞬間だった。

合同演習7

こうして武蔵の伝説に新たなエピソードが加わった。

そしてこの伝説を綾は卒業後暫くたって知る事になる。

きっかけかもえかとの会話であった。

横須賀基地での再会後、綾はもえかと度々会うようになっていた。

もちろん明乃を含めてだが、時には綾ともえかだけの時もあった。

そんな時、もえかが話してくのだ、あの少女の事を。

武蔵に伝わる妖精の少女の伝説は先に言った通り乗員達の間でのみ語られるものだ。

だから明乃が居た場合は話せなかったのだが、二人きりだったし、何より綾は武蔵のOGと言う事もありもえかが話したのだ。

だがもえかはその伝説を聞いた綾が何とも言えない複雑な表情を浮かべ事に首を捻る。

綾がそんな表情を浮かべてしまったのは、伝説に出て来た少女の容姿に思い当たるものがあつたからだ。

そうあの合同演習の時に自分がした変装とそっくりだと。

だから綾は頭を抱えたくなくなってしまった、何故自分が卒業後に生まれた伝説にかつて自分がした姿が登場しているのかと。

「どうかさされましたか綾さん？」

ちなみに綾ともえか、明乃が3人だけで話す時、二人は綾の事を『綾さん。』と呼んでいる。

最初の頃は『神城艦長。』と二人は呼んでいたのだが、綾が公式の場では無いので、肩書では呼ばなくても良いと言ったのだ。

もつとも綾は『神城さん。』と呼ばれる事を想定していたのだが、二人はそれを聞いて嬉しそうに『それじゃ綾さんとお呼びしますね。』となつてしまったのだ。

もえかと明乃にしてみれば、深く敬愛する綾を親しげにそう呼べる事が何より嬉しかったのだ、そして他の生徒達に対しての優越感もあった。

相変わらず綾は女性同士の距離感に慣れる事が相変わらず出来なかった。

それにしても、何故そんな伝説が生まれたのか、綾は不思議な思いに駆れる。

少なくとも自分が乗っていた頃にはそんな話は無かった筈で、明らかに卒業後に生まれたものだろう。

それでもえかの時代まで続いている、ただ何で自分が演習の時した格好なのか分からなかったが。

「なんでもありませんよもえかさん。」

ちなみに綾も3人だけの時は『もえかさん。』『明乃さん。』と呼んでいる、まあ二人にそう呼んでと懇願されたからだが。

「そうですか・・・あ、その少女の事なんです、2代前の武蔵乗員達が・・・」
嬉しそうに綾に伝説の話をつづけるもえかを見ながら綾は思った。

この後も自分が変装した姿の少女が武蔵乗員達を助ける伝説が続いて行くのだろうか。

正直言つて恥ずかしいなと内心溜息を付くのだった。

番外編（スロウスタート及びご注文はうさぎですか？） 綾とてまりハイツ

ブルーマーメイドにはかなりりっぱな職員用の寮、いわゆる官舎がある。

だが神城 綾はその官舎に住んでは居なかつた。

基本的には官舎に住む事になっているが、強制ではなく個人で部屋を借りる事も認められている。

だから綾はそうしているのだが、その大きな理由は官舎には女性しか居ないからだとは誰も知らないだろう。

考えて見ればブルーマーメイドの官舎なのだから女性以外住んでいる訳が無いのは当たり前の話だ。

それでなくとも職場は女性ばかり（これも当然だが）、出来れば住む所くらいそうではなくてもいいのではないかと綾は考えたのだ。

これは女子海洋学校時代、女子寮に入れられ、様々なトラウマ（主に服装関係）を植えつけられた事が原因だった。

しかし結果から言えばこれも無駄な話だった。

第一に紹介された物件が女性専用のアパートだったからだ、どうやら不動産屋が勝手に気を回したらしく気付いたのが引越した後だった。

第二に服装関係のトラウマについて言えば、お節介な友人達から逃れられたと思ったのだが、今度は部下の娘達が何かと押し掛けて来る様になってしまったのだ。

いやそれだけでは無かった、部下の娘達以外に服装関係で綾の元に来る人間が増えてしまったのだ。

これはその女性専用アパートでの綾の受難の物語。

女性専用アパート「てまりハイツ」。

そのアパート前を箒で掃除している女性は何故か楽しそうだ。

「只今戻りました志温さん。」

そんな女性、志温こと京塚 志温に声を掛けきたのは、ブルーマーメイドの制服と制帽を身に着け、キャリーバッグを手で引いている神城 綾だった。

綾が入居したアパートこそ、このてまりハイツであり、志温は管理人を務めている女性だ。

「あらお帰りなさい綾さん、お久しぶりですね。」

声を掛けて来た綾に振向いて挨拶を返す志温、その動きにたわわな胸部装甲が揺れる。

初めて会った時、それを見た綾はかなりのショックを受けたものだった、自分の控えめなものと比べて。

綾の胸部装甲は同年代の女性に比べると大きくない、その代わりと言う訳でないが形は良いと、親友の薫や部下の娘達から誉められる、喜ぶべきか悲しむべきかは生粋の女性でない身では分からなかったが。

もつとも綾が一番ショックを受けた事は、そんな光景を見れて嬉しいでは無く、羨ましいと思つてしまった事だったが。

「そうですね、ああ留守の間、迷惑をお掛けしました。」

揺れる胸部装甲を見て浮かんだ感情を頭から追い出し綾はお礼を言う。

ブルーマーメイドの艦長としての任務上洋上での生活が長い為、何ヶ月も部屋を留守にするのは何時もの事だった。

そうなると留守の間に来る郵便や時に宅配便の受け取りが問題になってしまう。

これがブルーマーメイドの官舎なら保管用の設備が有るのだが、一般のアパートにそんなものは無い、綾はそれに入居しから気付いてしまった。

その為管理人である志温に預かってもらう事になったのだ。

綾としては迷惑を掛けてしまうと悩んでしまったのだが、志温は「気にしなくても良いですよ。」と言つて快く引き受けてくれたのだ。

「いえいえ、後でお届けしますね。」

志温はそう言つて微笑む、本当に傍に居て心休まる人だなと綾は感心する。

「あ、お帰りなさい綾さん。」

そんな時、アパートの部屋から出来た少女に綾は声を掛けられる。

「ただいま花名ちゃん。」

管理人である志温の従妹である一之瀬 花名だった、近くの星尾女子高校に通う女子高生だ。

「仕事は言え、何ヶ月も海に居るつて大変ですよね。」

「まあもう慣れてしまいましたかね。」

そう会話して微笑み合う綾と花名の2人、傍から見ても仲が良いことが分かる。

もつとも最初の頃は花名が人付き合いが得意でない事もあつて会話が成り立たなかつたのだが、ある偶然から2人は急速に親しくなつた。

それは必ずばり2人の似た境遇、共に高校受験浪人（中学浪人）だった事をお互い知つてからだ。

「そう言えば花名ちゃん学校は？」

ふと今の時間、昼前である事に気付き綾が質問する。

「えっと試験休みなんです。」

花名は微笑ながら答える。

「ああそう言う事ですか。」

普通の学校ならそう言うの物があつたなど綾は気づく、ちなみに横須賀女子海洋学校では試験と言えば洋上で行なわれる為か、終了後も艦上でそのまま過ごす事が多く、花名のように自宅で休むなんて経験は無かつたからだ。

と綾はそこまで考えて背筋に寒気を感じて、思わず花名に聞く。

「そ、それじゃ栄依子さんは……」

「お久しぶりですね綾さん。」

だが質問をする前に綾はキャリアバッグを持っていない方の腕を掴まれる。

ぎくりとしてそちらを見る綾を満面の笑みを浮かべ見る、容姿が非常に大人っぽい少女。

花名の友人の一人である十倉 栄依子だった。

「え、ええお久しぶりね、え、栄依子さん。」

綾の対応が途端にあたふたしてしまふのは、ある意味仕方が無い事だった。

「お約束通り夏の綾さんに似合う洋服を用意しましたから、ああ水着もですね。」

「いえ別に約束していた訳では……」

「遠慮しなくても良いんですよ、それでは早速……」

「だから私の話しを聞いて下さい栄依子さん。」

花名を通して紹介された栄依子は何が気に入ったのか、ぐいぐいと綾に迫って（笑）きたのだ。

曰く、「綾さんと呼びますね、私の事は栄依子と呼んで下さいね。」

「ブルーマーメイドの制服とてもお似合いですね、でも他の服を着た綾さんも見たいです。」

「フアツシヨンの事ならお任せ下さい、綾さんにびつたりのコーデイナートさせて貰いますから。」

とまあこんな感じで初対面の時から積極的な栄依子に綾は困惑しっぱなしであった。

「相変わらずですね栄依子ちゃんは。」

「うん、何時も通り、流石は栄依子。」

そう言つて感心の声を上げるのは、やはり花名の友人である百地 たまと千石 冠の2人だった。

やはり花名を通じて綾と知り合い親しくなった。

「あの、たまでさん、冠さん助けて・・・」

「無理ですね、あとたまちゃんと呼んで下さい綾お姉さん、それからお帰りなさい。」

「栄依子はこうなると止められない、お帰り綾。」

2人に助けを求める綾だったが残念ながら断られたのだった。

「あははは・・・」

それを見て花名は笑うしかなかった、ちなみに志温は最初から微笑んで見ていただけだった。

「それでは行きましょう、花名、たま、冠（かむ）手伝ってね。」

「イエスマム。」

「うん。」

花名、たま、冠（かむ）は返事をする。綾を取り囲み連行する。

「さあ綾お姉さん、荷物は私が持ちますから。」

「人間諦めが肝心、直ぐに楽になる。」

「ははは御免なさい綾さん、でも私も見てみたいし。」

「あ、あの・・・志温さん。」

3人の少女達に連れて行かれそうになりながら綾は志温に助けを求めるのだが・・・

「私も後で行きますからね綾さん。」

一点の悪意も見られない笑みで死刑宣告を下す志温に綾はただ項垂れるしかなかった。

その後暫らくの間、てまりハイツの一室から女性の悲鳴が流れ続けていたらしい。

水着とライチ1

その光景は普通に見えて、だが何処か変だと綾は思った。

「これ美味しいわね〜」

「ライチ美味しい。」

「本当美味しいですねこれは。」

「綾さん、ありがとうございます。」

花名と友人の栄依子、冠、たまた、が居る、4人は仲がとても良く結構こうやって花名の部屋に集まっているを綾はよく見る。

ちなみに綾が花名の部屋を訪れるのもそれ程多くないが有る。

今回もある用事があつて花名の部屋を訪れたのだが・・・

「いえ、こちらこそ助かりました、友人から貰ったのですが量が多すぎたので。」

親友の薫が実家から送つて貰つたらしいのだが、量が多すぎて始末に困つたのだ。

ちやうど休暇で薫の部屋に来ていた綾が頼まれて一部引き取つたのだが。

思つたより量が多く、綾もまた始末に困つてしまつたのだ。

そこで花名と志温にお裾分けでもしようと思ひ、花名の部屋を尋ね、今の状況になつ

ているのだった。

そう何故か全員・・・水着姿で花名の部屋でライチを食べながら会話するという状況に。

まあ予兆はあったのだ、インターフォンを押して来訪を告げた時、答えたのが栄依子だったからだ。

栄依子が花名の部屋に来ているのは珍しくはないが、綾はその瞬間嫌な予感に襲われたのだ。

「はい、いらつしやい・あ・や・さん。」

満面の笑みを浮かべグリーンのビキニを着て出てきた栄依子を見て綾は固まる、いやそれだけではなく、部屋に敷かれた布団の上で仰向けになって両足を上げている花名と冠、エプロンを着て踊っているたまで。

インターフォンを押した時に感じた予感は本当だったと綾はその時思っただった。とりあえず部屋に上がった綾は花名達から事情を聞かされる事になる。

元々花名達は海に泳ぎに行くつもりだったらしい、だが今日は朝から強い雨で断念するしかなかった。

そこで冠の提案で水着過ごす事にしたらしい、「これで少しは気分が晴れる。」と言う彼女の言葉で。

そういうものか？と綾は思ったがまあ花名達がそれで満足ならけちを付ける事もないと納得する。

とりあえず用事を済ませて退散しようと思った、同性とは言え女子高生のそれも水着姿の中にいる度胸は綾には無かったからだ、しかし残念ながら思惑通りには行かなかった。

「フッフッフ。この部屋の秘密を知ったからには、綾お姉さんにも水着ギャルになつてもらいますよ〜！」

たまための言葉によつて。

「・・・!？」

その言葉に逃げ腰になる綾の腕を栄依子はがっちりと掴む、それはもう楽しくしようがないと言う笑みを浮かべて。

「と言う訳でさつそく着替えましょうか綾さん。」

そのまま引きずつて行く栄依子。

「ちよつと待つて下さい私はそんな、第一水着なんて今持つてませんよ。」

「大丈夫ですよ。私の予備がありますから。」

相手は年下の女子高生、言わば一般人の栄依子に意図も簡単に拉致される現役ブルーマーメイドという図式が出来上がっていた。

そして隣の部屋に連れ込まれる綾、ちなみに花名達は興味があるのか止め様とはしなかつた。

「あああ……!!」

扉が閉じ綾の悲鳴が響き、暫し沈黙の後、再び扉が開かれるとそこには……赤いビキニを身に纏った綾が居た、思わず凝視してしまう花名、たまた、冠。

「ほんと素材が良いから何着せても最高ですよ綾さん。」

満足気な笑みを浮かべサムアップする栄依子、対して綾は泣きたい気分だった。

何しろ部屋に入った途端、服はもちろん下着まであつと言う間に脱がされ、この水着を着せられたのだ。

その手際の良さに、普段から彼女はこう言う事に慣れてるんじゃないかと綾は思わず疑ってしまった。

「綾さん、綺麗です。」

花名は胸の前で手を組んで感激した表情で見つめてくる。

「へへへ……嫌がっても身体は水着じゃないですか。」

たまたは涎を手で拭いながら何かに取り付かれた様な台詞を言っている。

「うん……完璧……流石は栄依子。」

栄依子の手腕を誉める冠、心なしか頬が赤いのはご愛嬌か。

「皆さん・・・(泣)」

泣きそうになりながら手で胸や腰の辺りを必死に隠そうする綾だったが、それが余計花名達を煽っている事に気付いていなかった。

「それにしてもこのビキニですか、初めて着たんですが、何と言うか心細ですね。」

隠されているのが胸と腰周りと言うのは綾にとつては露出が多すぎて不安にされてしまう。

一応ボトムは花名の水着と同じ様に短いスカートが付いているのでまだ良かったが。

ちなみに綾が初めて女性用の水着を身に着けたのは横須賀女子海洋学校時代に学校指定の水着（青と白のスクール水着）だった、その時は生まれて初めてと言う事で相当あたたかさせられたものだった。

「綾さんはスタイルが良いんですから着ないともつたないですよ。」

大きくは無いが形の良い胸に綺麗な体のラインを持つ綾に、同性ながら花名達も見とれてしまう。

もつとも綾にすればそれを喜ぶべきなのかどうか生粋の女性でない身では分からなかったが。

こうして着替えを無事終えて（笑）、今は綾の持つて来たライチを囲んでのガールズトークの真つ最中だった。

そして綾の受難は正にこれからだった。

水着とライイチ2

水着姿でのガールズトーク、綾はガールと言う年齢（笑）では無いかもしれないがは続く。

「ライイチの皮ってピンク色のもあるのね、私は茶色いのみか見た事無いけど。」

栄依子はライイチをしげしげと見て言う。

「あ、私も茶色いのみか知らなかったなあ。」

花名もライイチを見ながら栄依子の言葉に頷いている。

「どっちも同じ物の様ですね、新鮮なのはピンク色ですが鮮度が落ちると徐々に茶色になるそうですよ。」

綾は薫から聞いた話を皆にする、実は引き取った時に少しでも減らそうと2人で食べたのだが、その時に花名と栄依子の様に疑問に思っただけに聞いていたのだった。

「新鮮なライイチ、美味しい。」

冠は栄依子に食べさせてもらいながら幸せそうに言う、その姿に皆ほっこりとしていたのだが。

「何だかそれ乳〇みたいですね。」

とたまたまが突然爆弾発言をして場を掻き乱す。

「ぶっ・・・!?」

「ええ!」

その爆弾発言に綾は口に入れていたライチを噴出しそうになり、花名は驚きのあまり固まる。

「ブツ・・・あはは!!」

栄依子は思わず噴出して笑い始める、一方冠はと言うと。

「新鮮な乳〇、美味しい。」

と更に過激な爆弾発言して綾と花名を慌てさせ、2人は顔を真っ赤にして叫んでしま
う。

「ちょ・・・2人共!」

「たまちゃんに冠ちゃん!」

「くくく・・・ふ、2人共・・・ははは!!」

そんな2人にどや顔で答える冠とたまたま、笑の止まらない栄依子。

その状況に綾はそう言えば横須賀女子時代、薫や他の友人達とガールズトークして
いと必ずこう言った過激な話題が出てきたなど思い出していた。

女子は同性しか居ないとこんな過激な話題で盛り上がる事を綾が初めて知った瞬間

だった。

完全にカオス状態になった部屋で、机の上にあつた花名の携帯に着信音が鳴っていたが、誰も気付いていなかった。

「全然出ないわね。」

花名の携帯に掛けていた志温はそう言つて溜息を付く。

「何処かに行つたと言う訳では無いみたいですけど。」

考え込む志温は次の瞬間聞こえて来た花名達の声に思わず部屋の方を見るのだった。

「え？」

兎も角、志温は花名の部屋へ様子を伺う為に行つてみる事にした。

「何だか凄い声が聞こえたんだけど、大丈夫かしら？」

そう呟き首を捻りながら、志温は花名の部屋のインターホンを押す。

『はいはい、何方ですか？』

花名ではないが聞いた事のある声に志温は更に首を捻る、友人の娘達でも来ているのだろうかと考える。

「えつと私志温ですけど、花名ちゃんはいつらしゃいますか？」

『おお、志温お姉さんですか・・・花名ちゃん！志温お姉さんは来られてそうですよ。』

『えっ？志温ちゃんが・・・ちよつと待つてたまちゃん、皆志温ちゃんが来たつて！』

『な、それって……こんな状態の時にですか?』

『冠(かむ)……ちよつとこれ結んで、これじゃ人前に出られないし。』
『任せる栄依子。』

インターホンに出た者が通話ボタンを押しっぱなししているのか、部屋の中の会話が筒抜けだった。

『取りあえず開けますね花名ちゃん。』

『たまちゃん駄目ええ!!』

その声の後ドアが開き目の前に展開した光景に志温は啞然としてしまった。

それはそうだろう見覚えの有る娘達が全員水着姿になっているのだから。

「し、志温ちゃん!これはその……」

花名は慌てて弁解しようとするが……

「うん、大丈夫よ、分かったから花名ちゃん。」

にこやかにそう言つてドアを閉め去つて行く志温。

「し、志温ちゃん!?!」

「こ、こんな姿を見られてしまつて……こ、今後どんな顔して会えば良いんですか?」

花名は完全にパニック状態になり、綾は青くなつて立ち尽くす。

「大丈夫ですよ綾お姉さん!こんな姿と言うなら、栄依子ちゃんも負けていませんか

ら。」

とたまたまがフォロー（？）するが。

「たま、それフォローになつてないから、つて言うか私、いきなりこんな格好つて……出禁になつたりしないかしら？」

栄依子が冠に上の水着の紐を締めなおしてもらいながら心配そうに呟く。

「ど、どうしよう？……志温ちゃんに変な誤解されたら。」

パニック状態が続く花名だったが、再びドアが開かる音に綾と共に振向いて……

「え……??」

花名と綾はその光景に固まってしまふ、何故なら志温が水着姿になつてそこに立つていたからだ。

「改めまして、皆さんこんにちは。」

赤いビキニ、腰には緑のパレオを纏つた志温に花名と綾は驚いた声を上げる。

「志温さん!？」

「し、志温ちゃん？そ、その格好で出て来たの？」

2人のそんな声に志温はにっこり笑つて答える。

「3秒ルールよ、花名ちゃん。」

それつてちよつと違うんじゃないかなあ、と綾は思わず内心突っ込んでしまつてい

た。

水着とライチ3

部屋に居る全ての者が水着姿になってしまったという状況の中、花名達は簡単な状況説明と自己紹介を済ませる。

ちなみに冠が挨拶した所でその可愛さに感激した志温の胸を見て……

「ライチ……新鮮。」

と冠が発言した事が有った事を記して置く。

「それで志温ちゃん、どうかしたの？」

取りあえずパニック状態から脱して花名が聞く。

「あ、そうそう、電話したんだけど出なかつたから、ほら、ここから少し行った所にあるリゾートホテルに温泉プールがあるんだけど、皆どうかと思つて、今日海に行けなかつたみたいだから……」

「そ、そうですねよその手がありましたよ！」

たまたまはそう言つて皆を見渡す。

「行きましょうプール今すぐに。」

そのたまたまの声に皆直ぐに反応する。

「う、うん！行きたい！」

花名は既に行く気まんまんになっている。

「じゃあ今から行きましようか。」

栄依子も同様に行く気まんまんだった。

「うん。」

そうなれば冠に異存がある訳はなかったのと言うまでもない。

そんな花名達を見て綾はようやく開放されると思ひ皆に声を掛ける。

「それでは私は此処で・・・」

だが現実はその簡単に綾を離してはくれそうもなかった。

「じゃあ、私は綾さんと参戦しようかしら。」

綾の腕を自分の腕でしっかり拘束して志温が言ってきたからだ。

「わ、私の意思は？」

「「皆でプールだ！」」

最初からそんなものはないのだから言うだけ無駄だった。

一行はリゾートホテルに到着後、温泉プールに行く者とそれ以外に別れる。

花名達はもちろん温泉プールだが、志温と綾の2人は・・・

「エ、エステですか？」

2人が立っているのはリゾートホテル内にあるエステサロンだった。

「以前お寿司をご馳走になりましたから、そのお礼にと思ひまして。」

花名がお弁当を忘れてしまった時に綾はその弁当と買ってきた昼飯を交換した事がある。

その時の綾の昼飯がお寿司だったのだ、言っておくが近所にあつた回転寿司のお持ち帰り用であり、エステをお礼にする程の高級品では無かつたのだが。

「いえいくら何でもそれは・・・第一大家さんに何時もお世話になつてゐる私の方が、お礼をする立場ですから、エステなんてとてもとても・・・」

「遠慮なさらずに、お肌がツルツルになる事請け合いですよ。」

遠慮する綾に志温は自分の肌を触りながら進めてくる。

「ツルツルになつても見せるのは乗員の娘達ぐらいなんですが・・・」

異性(男)に素肌を見せる何て綾に出来もしない話だ、だから何時も見せると言うか、見られてしまうのは若宮の乗員達だけだ・・・それだけでも十分恥かしい話しなのだが。

そして・・・

「良いのでしょうか・・・私みたい者が、こんな王族みたいな扱いを受けて。」

「うふふ・・・良いんですよ綾さん。」

押し切られた綾は志温と共にエステを受ける事になった。

暫らく無言でエステを受けていた綾はうつぶせに寝かされるとぼつりと眩く。

「花名ちゃん達が仲良くしてるのを見ると、眩しい様な、何か切ない様な気にさせられますね。」

「それは分かりますね、自分達にもあんな頃があつたなつて……思つてしまいますね。」
自分が横須賀女子海洋学校に居た頃の事を綾は思い出す……薫や他の友人達と過ごした日々を。

「そう考えると花名ちゃんは素晴らしい友人達に恵まれていますね。」

やや癖の強い娘達だが、花名の事を思いやつている事は傍から見ても分かる綾だった。

「その中には、綾さんも入つていると思いますよ。」

「わ、私もですか? いや……それはそれで光栄な話ですが……」

不意を突かれる様に志温に言われた所に背中にオイルが塗られ思わす声が出てしまふ。

「……わっ!？」

そしてオイルが背中全体に塗りこまれて行くの感じながら志温は綾に語り掛ける。

「まあ、大人には大人の楽しみがありますから。」

「そ、そうですね……」

2人は暫しその大人の楽しみを堪能したのだった。
女子更衣室。

しばらくして、志温と綾がエステから戻って来ると見ると。
「皆お待ちせしました、つてあらう？」

花名とたまたまが激しく落ち込んでいるのに遭遇する志温と綾だった。

「ど、どうかしましたか？」

綾が花名とたまたまに尋ねると。

「パンツを・・・パンツを忘れちゃったんですよ・・・」

たまたまが目のハイライトを消した状態で返答する。

「え？花名ちゃん達もですか？」

「「え？」」

花名とたまたまが綾の言葉に驚く。

「いえ、実は私も花名ちゃんの部屋に忘れて来てしまつて・・・パ、パンツを。」

恥かしそうに綾は答えると志温を見る。

「もしかしたら花名ちゃん達も忘れてるかと思つて買つて来たのよ。」

志温はほほえむと下着が入った袋を花名達に見せる。

「何と、これは正に地獄にパンツですね。」

「あ、ありがとう志温ちゃん。」

喜ぶ花名とたまための2人は志温の差し出した袋を受け取る。

「さあ履いてみて皆。」

志温に言われ袋から取り出した下着を花名が身に付け様として・・・

「あれ?こゝ、これ・・・後ろに穴が空いてるよ?」

そう花名が持つ下着には何故かハート型の穴が空いてた。

志温は花名の言葉に嬉しそうに答える。

「可愛いでしょ?」

「ええ・・・」

花名はその下着を持ったまま固まってしまう。

「あはは、お尻見えちゃいますね。」

「ハートやら星やら丸やら、色んな形がありますね。」

栄依子とたまためは何故か嬉しそうだった。

「私、猫の形にする。」

冠もまったく気にした様子も無く猫の形に穴が開いた下着を取る。

「み、皆良いの?、穴が空いてるんだよ。」

何故皆そんなに平然としているのか花名は理解出来ない。

「花名！」

「え？は、はい！」

「これは、尻尾を出す為の穴だから良いの。」

「し、尻尾？」

花名を平然と論す冠だった……その内容はどうかと思うが。

一方綾は黒っぽい下着を身に着けていた、これって母親が時々送ってくるアダルトなやつにそっくりだなと思いつながら。

「綾さん、サイズは大丈夫ですか？」

身に着けた終わった綾に志温が聞いてくる。

「えっと、サイズはまあ何とか、ただこの下着非常に心許ない作りですね、紐で固定されているみたいですし……」

何しろ布の面積が少ないうえに所々透けている下着を紐で止めている様に見えて綾は恥かしくて落ち着かない。

「大丈夫ですよ、こう言う下着の紐って飾りみたいなものですから。」

そう言つて志温が紐を引っ張ると……下着が解けて落ちかかる。

「新鮮なライチ。」

女子更衣室に綾の悲鳴が響き渡る中、冠はぼつりと呟くのだった。

花名と綾1

神城 綾と一之瀬 花名、この2人がお互いを知るのに実は一年近く掛かっている。綾がてまりハイツに入居して大分たつて花名が預けられたのだが、様々な要因が重なって、一年後に2人がある事で顔を会わせるまで、お互いを知らなかったのだ。

それは花名が浪人のシヨックと新しい環境に馴染めず引き籠もり状態だった事に加え、綾がブルーマーメイドの任務上長期間留守にする事が多かったからだ。

ただ全く気付かなかった訳では無く、綾は志温と一緒にいる花名を見た事が度々あつたし、花名も白い服を着た女性が度々出かけて行く姿を見かけてはいた。

だがその程度の認識で終わっていたのだ。

2人がお互いの事を本当に知るのには花名が星尾女子に入学して一月ほどだった時だった。

その日、本屋に参考書を見に行っていた花名がてまりハイツに戻り、夕食の為志温の部屋に入った時。

花名は玄関に置かれている紙袋や荷物に気付く、興味をもってそれを覗き込んだ目に入って来たのは、多量の郵便物と宅配便だった。

志温宛かと思つて宛名を見た花名はそこに『神城 綾』と書かれているのを見る。

「神城 綾さん？」

聞いた事の無い名前に花名は首を捻る。

志温の知り合いなのだろうか？それにしても何でこんなに大量に？

数々の疑問が沸いた花名は聞いてみようと思ひキッチンにて料理中の志温の元に向かった。

キッチンでは志温が鼻歌を歌いながら唐揚げを調理していた。

「志温ちゃんただいま、ねえ玄関にある手紙とかなんなの？」

戻つて来た花名の問い掛けに志温は何かを思い出したのか慌て始める。

「あ！忘れてたわ！留守中にお預かりした神城さんの郵便物と宅配便！」

「神城さんつて誰？」

やはり志温の知り合いだったのだろうかとかと花名は思い聞いてみた。

「2階のお部屋の人なの、急いで行かないと！ああでも唐揚げが・・・」

準備して置いてすっかり忘れていたらしい、しっかりしている様で志温は結構抜けている所がある。

「じゃあ、私が行つて来ようか？」

そんな志温を見かねて花名が申し出て来る、日頃何か手助けがしたいと思つていたか

ら。

「え？花名ちゃんか？大丈夫？」

志温はそんな花名からの申し出に驚く。

「うん！大丈夫。」

小さなガッツポーズをして花名が答える。

志温は感激していた、あんなに人見知りだったのに：成長したのね花名ちゃん、と。

「じゃ行ってくるね。」

張り切った様子で花名は向かう、まあそこまでは良かったのだが・・・

「志温ちゃん！チャイム鳴らしてから何て言ったら良いか教えて！なるべく細かく！詳

しくー！」

慌てた様子で戻って来て聞いて来る花名に志温はただこう言うしかなかった。

「花名ちゃん・・・」

その後、郵便物と宅配便を持って、綾の部屋の前に立つ花名。

しかし到着してからインターホンを押すまでにまた時間が掛かった。

「えつと・・・えい！」

ようやくインターホンを鳴らす事が出来た花名。

『はい。』

インターホンから流れる声に花名の緊張が高まる。

花名「あ、あの、管理人の者ですが、ふ、不在時にお預かりしてた郵便物と宅配便をお渡しに参りました、です！」

緊張して詰まっただうえに語尾が可笑しくなってしまう花名。

『あ、はいお待ち下さい。』

するとドアが開きが黒い髪を肩までのぼした女性が顔を出した。

「あの……貴方は？」

「……あ、管理人の者です、が……」

花名は出てきた女性を見て後に続く言葉を失ってしまう。

それが花名がその女性の美しさに思わず目を奪われてしまったからだ。

従姉の志温とは違った美人さん、清楚な雰囲気身を纏ったその女性に花名は何て

言っていないか分からなくなったのだ。

「管理人、さんですか？でも貴女は……その若すぎませんか？」

その女性は戸惑った様だった、確かに突然花名が自分が管理人ですと言えば当然そうなるだろう。

本当は『管理人の代理の者です。』と言うべきで、志温もそう教えた筈なのだが、当然の如く緊張し過ぎて花名は忘れてしまったのだ。

「あ、違い、いや違わなくて、志温ちゃんのもつて、あああ。」

自分の言い間違いに気付き慌てて訂正しようとして花名は、結果的に手に持っていた郵便物入りの紙袋を落としばらまいてしまう。

「す、すません、つて痛い・・・」

パニック状態になった花名は抱えていた宅配便を自分の足に落としてしまう。

「大丈夫ですから落ち着いて下さい・・・て危ない!」

「へっ!?!」

落ちた宅配便を拾おうとして、花名は開いていたドアに頭をぶつけてしまう。

「・・・!?!・・・」

花名の酷いパニック状態は、騒ぎに気付いて志温が駆けつけてくるまで続いた。

それから30分後、花名と綾は何故か志温の部屋で向かい合って座っていた。

山盛りの唐揚げを前にして。

「改めて紹介するわね。こちらは202号室の神城 綾さん。」

唐揚げが乗ったテーブルに着いた二人に志温がそれぞれの紹介をする。

「神城さんは何と・・・ブルーマーメイドで艦長さんをなさっているのです。」

何故か志温がどや顔で言う。

「そしてこちらが、私の従妹の一之瀬 花名ちゃん。」

緊張した面持ちで綾の対面に座る花名。

「近所にある星尾女子高校に今年から通っているぴっちぴちの女子高生なの。」

普通従妹の事を紹介する時には使わないだろう言葉を使う志温。

「初めまして、神城 綾です。」

時々見かけていた娘が管理人さんの従妹だったと知って綾は驚いていた。

それにしても1年近くもすれ違つてたとは綾は驚きを超えて呆れてしまっていた。

「こ、こちらこそ初めまして、い、一之瀬 花名です。」

一方の花名も時々見かけていた女性が同じアパートの住人でブルーマーメイドだった事に驚いていた。

つまりあの白い服はブルーマーメイドの制服だったんだと合点がいく花名だった。

こうして綾と花名のファーストコンタクトはなされたのだった。

花名と綾2

それから綾と花名は顔を合わせれば挨拶し短い会話をするまでにはなった。だが花名の人見知りもありそれ以上進展は無かった。

しかしある日・・・

綾の部屋のインターフォンを押す花名。

その時たまたま綾が外出中に荷物が届き預かったものを花名が再び届けに来ていた。

『はい。』

「あ、あのお荷物をお届けに来ました。」

『ああ、ちよつと待つて下さい。』

ドアが開けられ綾が顔を出す、相変わらず美人さんだなと花名は会う度に思つてしまふ。

「ありがとう一之瀬さん、わざわざ持つて来てもらつて。」

「いえ気にしないで下さい・・・その色々と興味があつて、あいえ違います・・・」

礼を言われ思わず慌てて本音が出てしまった花名、実は綾の事が非常に気になつて荷物の渡し役を引き受けたのだ。

ずばりそれは綾がブルーマーメイドの人間だったからだ。

多くの女子が憧れる職業であるブルーマーメイド、花名も幼い頃は自分もなるんだと思っていたものだ。

だが勉強の方は兎も角、運動神経の無さに気付き、早々と諦めてしまったが。

「ふふ、じや上がって行きますか？」

花名の慌てぶりに綾は微笑むと部屋に誘ってくる。

「い、良いんですか？」

「ええ構いませんよ、どうぞ。」

綾の誘いに花名は嬉しそうな表情を浮かべて部屋に入ってしまった。

「どうぞ、何もありませんけど。」

「はい、おじやます。」

玄関から入ってキッチンとテーブルの有るリビングに案内される花名。

殆ど自炊をしない花名と違いキッチンにある程度の調理器具が置かれているのは綾が料理をする為だ。

「それじゃ座ってね、ああ一之瀬さんはコーヒーそれとも紅茶、どちらが良いかな？」

テーブルの椅子に座る様に花名に促し、聞いて来る綾。

「あ、すいません、えっと紅茶でお願いします。」

椅子に座り部屋を見渡す花名、こう言つて何だが余り女性らしい感じがしない、まあ彼女の所も似た様なものだが。

そして視線をテーブルに戻した花名は上に置かれている本に気付く。

それなりの装飾のなされた少し大きめの本には『横須賀女子海洋学校卒業アルバム』と書かれている。

「これって……?」

綾の通つていた学校の卒業アルバムだろうかと花名は思つて見つめてしまう。

「気になりますか?」

テーブルに紅茶が置くと綾が聞いて来る。

「えっあ、すいません……その多少は……」

かつてはブルーマーメイドに憧れていただけに、花名はその為の学校の存在は興味があつた。

「ふふ……じゃ見ても構いませんよ。」

花名の対面にコーヒーを持って座つた綾が微笑みながら言う。

「ははは……ありがとうございます、それでは。」

少々図々しいかと思つたものの、好奇心には勝てず花名はアルバムを手に取り開いて見る。

「あの・・・神城さんは何組なんですか？」

まずは綾の所属したクラスについて見ようとした花名が尋ねてくる。

「海洋学校には普通の学校の様な何組と言うのは無いんです、あえて言えば乗艦していた教育艦がそれに当たりますね。」

「へえそうなんです。」

花名の通っている星尾女子高等学校と違い海洋学校のはそう言ったものが無い事に驚かされる。

「私の乗艦していた教育艦は武蔵ですよ。」

綾の説明で武蔵のページを探す花名、それは直ぐに見つかった。

巨大な船の写真の下に集合写真がある、それが武蔵に乗っていた生徒達らしいと花名は気づく。

その中に居るだろう綾の姿を探して、あっさりと見つけてしまう花名。

何しろ並んで居る生徒達の中で一際目立っていたからだ、その美しい容貌で。

自分と変わらない年頃でもうこんなに美人だった事に花名は今更ながら驚き、そして落ち込むのだった。

気を取り直しページを捲る花名、授業風景らしいものや食堂だろうか談笑している生徒達の写真が続く。

その写真を見ていた花名はある事に気付く、全てのと言う訳ではないが、大半の写真に綾が必ず写っている事に。

「あの・・・神城さんっていっぱい写っているんですね。」

花名の言葉に綾は困った表情を浮かべ答える。

「アルバム委員の娘達が面白がって載せたらしくて、私としては恥かしいんですが。」

でも分かる様な気もする花名だった、何しろこれだけ綺麗な容姿なのだからと。

そして花名はもう一つ気付いた事があった、やはり全てと言う訳では無いが、綾の隣には必ず同じ女子が写っている事だった。

時には親しげに談笑し、時にはじゃれあったり、というか一方的に綾がされている様だが、という写真が多い。

2人がかなり親しいと言う事が花名にはよく分かる風景だった。

「あの・・・この隣に写っている方はお友達ですか？」

花名の指す写真を見て綾は微笑を浮かべながら答えてくれる。

「ええ、古庄 薫さんです、私の大事な友人です。」

入学式の日に出会い、以後卒業まで親しくしていたと綾は教えてくれた。

それを聞いて花名は栄依子達との事を思い出す、同じ様に入学式の日に出会い、友人になった事を。

「その方とは今もお友達としてお付き合いを？」

「ええ、ただ卒業後は進路が別になったので学校時代の様にはいきませんが、休みが合えば必ず会いますし、連絡も常にと言う訳ではありませんが結構取り合ってますよ。」

嬉しそうに薫との事を話す綾を見て、花名は羨ましくなってしまうた。

自分も栄依子達と綾と薫の様に卒業後も親しく出来たらと花名は真剣に思った。

時々会話を挟みながら花名はアルバムの最後にあるページ、卒業者名簿にたどり着いていた。

卒業者の名前、生年月日、所属科などが載せられている。

花名は武蔵の名簿の中から綾と薫を見つけて眺めている中に小さな違和感に気付く。

それは生年月日だった、綾は薫より前になっている、いや他の生徒達に対しても…

「これって…?」

次の瞬間、それが意味するものを察して花名は愕然とさせられる。

綾は自分と同じ境遇なのではないのかと…

花名と綾3

綾も自分と同じ境遇・・・浪人しているのではないか、花名は確かめたい衝動に駆られる。

だが一方、触れてはいけない事ではないかと花名は考える・・・自分にとってそうである様に。

突然黙ってアルバムを見つめるだけになった花名を綾は気になって覗き込んでくる。そして花名が名簿を、綾の生年月日を見ている事に気付く、そして彼女が何を考えているのかを。

「・・・それは間違っていますよ、私も他の娘達のものも。」

綾の言葉に花名は驚いて顔を上げる。

「私は・・・病気で一年入学が遅れているんです、まあ中学浪人ですね。」

半陰陽を病気と言えるかは一概に言えないかもしれないが綾はそう説明する。

「と言つても昔の事ですし、私は気にしてませんが、だから一之瀬さんも・・・」
「違うんです！」

何でも無い様に話す綾を遮る様に花名は声を上げる。

「私も・・・私も浪人して、いるんです。」

花名は自分の境遇を綾に話す、おたふく風邪で受験出来ず浪人し、母親の進めで志温の元に來た事を。

「なるほどそう言う事でしたか・・・嫌な事を思い出させてしまった様ですね。」

綾はすまなそうに言うが、花名は微笑んで答える。

「いえ大丈夫です、それに私だって・・・」

綾に話させてしまったのは自分だから、気にしないでと花名は思う。

「・・・分かりました、それにしても身近に自分と同じ境遇の人が居るとは思いませんでしたね。」

花名の気持ちを察し綾も微笑えむと感嘆した様に話す。

「私もです・・・こう言う事ってあるんですね。」

花名も同じ気持ちだった、こんな身近に同じ境遇の人間が居るとは思いもしなかったと。

ふと花名はある事が気になってきた、綾は浪人の事を周りの人に・・・

「あの・・・神城さんは浪人の事は皆には話しているんですか？」

特に綾が友人と言った古庄 薫にその事を話しているのか、が花名は気になった。

「ええ話していますよ薫に、今回の様に偶然知られてしまった時にですが。」

横須賀女子に提出する書類に添付されていた戸籍抄本を薫に見られた時に気付かれてしまった。

ちなみに綾の戸籍抄本は女性になった際に作り変えられていたので、性別は最初から『女性』になっている。

「それで・・・古庄さんは・・・何と?」

花名は栄依子達の顔を思い浮かべながら聞く。

「何も・・・まあ今まで隠していた事は責められましたが、あつけなく受け入られました。」
肩を竦めて綾は言う、それは薫だけでなく、それを聞いた他の友人達も同様だった。
「そうだったんですね。」

人の事とはいえ花名は安堵感に包まれる。

「ただ余りにも簡単に受け入れてくれたので、後日薫に聞いてみたのですが・・・」
『別にそんな事気にしていないわ・・・それに綾には悪いけど私は良かったと思っていますもの。』

「良かったですか?」

花名は薫のその言葉に驚く、彼女にとって何が良かったと言うのだろうかと思つて。
「私が一年遅れたからこそ出会えて友人になれたから・・・と言う事らしいですね。」

綾は各女子海洋学校への入学が年毎違う事を話す、だから綾が普通に受験すれば横須

賀女子を受ける事は無かったのだから（それ以前に女子海洋学校への入学なんか出来なかっただろうが）。

「そう言う事だったんですね．．．遅れてから出会えた。」

花名は深い感動に震える、浪人はけっしてマイナスばかりじゃない、こんな素敵な出会いを生むのだと。

「でもそれは一之瀬さんも同じでしょう。」

「え？」

綾の言葉に花名は驚いた表情を浮かべる。

「一之瀬さんも遅れたからこそ今の学校に入学出来た、そして今の友人を得られたのでしょ？」

確かに考えてみればもし花名がちゃんと受験していたら、栄依子達と知り合う事など無かった筈だ。

自分にとつても浪人はマイナスじゃなかったんだ、花名はそう思った。

「でもそうだとすると私も神城さんみたいに話した方が良いでしょうか？」

「無理をする必要は無いと思いますよ、私だって皆に話すのに1年掛かりましたから。」

花名の悩みに綾はそう答える。

「自分のペースでやるのが一番ですからね。」

綾の励ましに花名は涙を浮かべて頷く。

「はいそうします・・・でも少しは焦らないとずっとこのままじゃないかと心配なんです
が。」

「・・・そうですね、分かりますよその気持ち。」

「今日はおじやましたうえに色々話を聞いてもらえて、ありがとうございました。」

玄関で花名はそう言つて頭を下げながらお礼を言う。

「いえ、私も楽しかったですよ、何しろこれ程親近感を持てる相手は初めてでしたから。」

綾はそう言つて微笑んで答える。

「私もです、こんな風に浪人の事を気楽に話せる人は始めてで。」

花名はそう言つて俯き暫らく黙っていたが、再び顔を上げる。

「あの・・・ご迷惑でなければまたお話に來ても良いですか？あと、綾さんとお呼びして
も・・・」

「ええ、まあその位は。」

綾としても花名と話す事自体は別に問題は無いと思つている、名前と呼ばれるのは恥
かしいが。

「良かった・・・それじゃ綾さんも私の事を花名と呼んで下さいね、その方が嬉しいです
から、それじゃまた今度。」

「え、ちよつと待つて。」

花名の言葉に慌てて呼び止めるが、彼女は嬉しそうな表情を浮かべ帰っていった。

それを見て綾は深い溜息を付く、女性として長年過ごして来たが相変わらず距離感が掴めないなと思いつながら。

星尾女子文化祭 1

予定より伸びた洋上任務を終え、てまりハイツ戻って来た綾。

とりあえず着替えて風呂に入ろうかと考えていた綾の部屋に花名が尋ねて来る。

「あ、すいませんお帰りになったところだったですね、あの後でも・・・」

まだ綾がブルーマーメイドの制服姿のままだった事に気付き花名が慌てて戻ろうとするが。

「あ、気にしなくても良いですよ花名ちゃん、何か御用ですか？」

この姿になって大分経つが綾は未だに着替えについては、自分の下着姿には慣れ、女性物の服を身に着ける事自体自然と出来る様にはなったが気が重かった、だから先延ばしにしても気にはしない。

・・・この後風呂に入る為にしなければならぬ事を考えるとなおさらだ。

話が逸れた、だから綾は花名に話の先を促した。

「はい、実は今週うちの高校で文化祭があつて、綾さんを是非ご招待したくて。」

花名の通う星尾女子高等学校で今週末に文化祭があり、それに綾を招待したくて尋ねて来た様だった。

「私をですか？まあ予定はありませんから構いませんけど、ご両親とかじゃなくて良いんですか？」

普通こういうのは親御さんや親戚、ここで言えば従姉の志温さんだと綾は思ったのだが。

「はい、お父さんとお母さんは仕事とかあつて来れなくなつて、志温ちゃんは大丈夫なんですけど。」

そう言つて花名は顔を俯かせる、彼女がご両親を大切に思っている事を綾は知っているので落胆する気持ちは理解出来きた。

「分かりました、是非行かせてもらいますね……でも花名ちゃんのお母さんが来れないとなると志温さんは……」

「ははは……とても残念がりました。」

綾の言葉に花名は苦笑して答える、志温が彼女の母親である葉月に深い憧れを抱き、会うのを楽しみにしているからだ。

「とりあえず当日は志温ちゃんと一緒に来て下さい、一応承諾してくれてますから。」

既に志温の方には話が通っているらしい、綾は頷く。

こうして綾は花名の学校で行なわれる文化祭に行く事になった、だが彼女はそこで自分の過去と対面する事になるとはその時は思つてもいなかった。

文化祭当日

綾は志温と共に花名の星尾女子へ到着していたのだが……

「えつと志温さん、何か見られてませんか？」

そう校門を潜り学校の中に入ってから綾は周りからの視線が気になってしようがなかった。

「ふふふ、それは綾さんだからでしょう。」

志温はにこやかな笑みを浮かべ答える。

「いえ、それを言ったら志温さんだからでは？」

幾ら何でも自分がと綾は考えて言うのだが。

まあ、結論から言えば2人だからと言えるだろう、ほんわかな雰囲気であわわな胸部装甲を誇る志温と美しい黒髪で清楚な雰囲気のある綾。

星尾女子の生徒はもちろん来賓の人々の視線を集めるのは当然と言えるだろう。

「と、兎に角約束通り花名ちゃんの所へ行きましょう志温さん。」

その視線に耐えられないのか綾は急かす。

「そうですね花名ちゃん達待っているでしょうから。」

同じ視線に晒されている志温だがこっちはまったく動じていない、性格と言うより女性としての経験の差だろうか。

対称的な対応の2人は花名の1年2組へ向かう。

和風喫茶椿

1年2組の出入り口にそんな看板が掲げられている。

「ここですね、でも和風喫茶って?」

その看板を見て綾は首を捻る、和風ってメニューがそうなのだろうかと疑問に思ったのだ。

「入ってみれば分かりますよ綾さん。」

志温はそう言って入り口ののれんを通って中に入ってゆく、綾も慌てて後続く。

「あらあら。」

「なるほどだから和風喫茶と言う訳ですね。」

中の様子を見て2人は納得する、内装はもちろん和風っぽいですが、一番特徴的なのは給仕をしている娘達の衣装だろう、そう全員着物だったのだ。

「いらつしやまいせ・・・志温さん、綾さん。」

そう言って2人を迎えたのは十倉 栄依子、大人っぽい彼女の着物姿はある意味妖艶だった。

「いつらしい志温ちゃん、綾さんも。」

同じく着物姿で迎えてくれる花名、こちらはまあ・・・言わないであげた方が良くか

もしれない(笑)。

ある意味対称的な栄依子と花名に、綾と志温は微笑む。

だが綾は次の瞬間に掛けられてきた声に身体が硬直する様な思いを味合う事になる。

「二之瀬、十倉、様子はどうか？」

綾の後ろから聞こえてくるテンションが低い棒読みのかつてはよく聞いた声。

恐る恐るそちらを見た綾はそこに立っているボーイツシユだが見かけが暗い女性に
今度こそ固まる。

「き、清瀬先輩？」

それは綾の中学時代の、いやその時はまだ男子の薫だったが、先輩であった榎並 清
瀬だったのだ。

榎並 清瀬は神城 薫としては2年上の先輩だった。

かなり変わり者の上級生として学校内では知らぬ者の居ない人物で、他の生徒はもち
ろん教師さえ扱いかねる相手だった。

そんな先輩の清瀬と薫は、本好きという意外な接点で知り合い、卒業までの間親しい
と言えるか分からないが交流を重ねたのだった。

いや卒業後も、「私はOGだ、ここにいても問題は無い。」と言つては学校を訪れ、薫
に絡んできたものだった。

しかしそれもある日唐突に終わってしまう、薫が身体の不調で倒れ、卒業目前で学校を去ってしまったからだ。

その理由が半陰陽だったのは言うまでも無い、まあそういつた事情もあり薫は清瀬と連絡を絶たねばならなかった。

それから何年も経ち、後ろめたさを感じていた薫、いや綾だったがまさかこんな所で再会する羽目になるうとは思わなかった。

こうして綾は予期せぬ場所で予期せぬ過去と対峙する事になったのだった。

星尾女子文化祭 2

「・・・一之瀬、十倉、彼女達は知り合いか？」

清瀬はちらりと花名と栄依子が喋っていた志温と綾を見て聞いてくる。

「あ、はい、私の従姉でてまりハイツの管理人の京塚 志温ちゃ、さんと同じアパートに住んでいる神城 綾さんです。」

花名が2人を紹介すると清瀬は志温には軽く会釈をするが、綾に対しては目を細めてじつと見つめる。

「神城 綾・・・ねえ？」

1年2組の様子を見に来た清瀬はそこで自分の教え子である花名の知り合いに会った。

管理人であり従姉の女性については花名の母親に会った時に話しは聞いていたから問題はなかった。

だがもう1人の方は・・・神城 綾と紹介された女性は違った、それは彼女が清瀬にとつて忘れる事の出来ないある人物に面影がとても似ていたからだ。

「はじめまして、京塚 志温と申します、花名ちゃんがお世話になっています。」

志温は何時もと変わらないにこやかな笑顔で清瀬に挨拶してくる。

「ええと……初めまして、神城 綾です、その……」

それに対し綾は視線を清瀬と合わせ様とせず、後頭部に手を当てて落ち着かない様子だった。

そつくりだな彼に……神城 薫に……面影だけで無く慌てると出るその癖とか、と清瀬は思った。

神城 薫は榎並 清瀬にとって忘れられない相手だった。

その性格ゆえ他人と距離を取られがちな清瀬に薫は適度な距離感で接してくれた奇特な人間だったからだ。

放課後の図書室で1席開けた椅子に座り、閉館まで本を読むと言う事を清瀬が卒業するまで続けた。

会話も読んでいる本や作者についてが多く、年頃の男女にしてはおよそ色気の無いものだったが、清瀬にとってはこれ程心休まる存在は初めてだった。

だからこそ卒業後も学校に足を運び清瀬は薫に何かと絡んだりしたのだ。

だがそれもある日突然終わってしまった、薫が学校で倒れ入院し、そのまま療養と言う理由で清瀬の前から姿を消してしまったからだ。

もちろん消息については彼の周りの者達に聞いたのだが、誰も知らなかった。

「京塚さんですね、話しは一之瀬の両親から聞いてます、担任の榎並 清瀬です、こちらも一之瀬の事を色々見守って頂けている様で助かってます。」

淡々とした話し方で聞きようによつてはドライに聞こえるが志温はちゃんと察して微笑んで頷て見せる。

「ところで神城さんだったな、君に神城 薫という知り合いは居るか？」

そのストレートな問いに綾は内心苦笑させられる、中学時代も気になる事があれば真正面から切り込んでいく所があつたからだ。

「えっと・・・し、知り合いには居ないと思います・・・が・・・」

綾の言葉が尻すぼみになつてしまつたのは、清瀬の視線が鋭くなつて来たからだつた。

明らかに綾が嘘をついている事を清瀬は確信する、まあこれも彼女の演技が下手糞だつたからだが。

「・・・分かりました、失礼な事を聞いて済まなかつた神城さん。」

「いえ別に気にしていませんから。」

更に追求が来ると思つていた綾は清瀬の言葉に安堵の表情を浮かべる、これではれずに済むと。

だがその綾の反応が清瀬の質問に対して答えを与えた事に気付いていなかった。

「それではお2人共楽しんで行って下さい、一之瀬、十倉後を頼むぞ。」
「はい先生。」

それに対して花名は素直に答えるが・・・

「あの榎並先生、先程の神城 薫さんって？」

清瀬に対しある感情を抱いている栄依子にしてみれば先程の彼女の問いが気になつて仕方が無いらしい。

「なあに昔の話さ・・・薄情な友人殿のな。」

一瞬睨まれた様な感じがして綾は硬直してしまう、清瀬はそれを見て意地の悪い笑みを浮かべて去つてゆく。

「友人の？薄情な・・・」

「栄依子ちゃん？」

複雑な表情を浮かべて考え込む栄依子を見て花名は首を傾げる、まあ彼女は事情を知らないから当然だが。

一方綾は何とか追求を逃れられた安堵しえ座り込みそうになりそうなところを耐えていた。

しかし綾は忘れていた、清瀬が自分が抱いた疑問をけつしてそのまましないと言う事を、どんな手段を用いても答えを見つけ出すとする事を。

その後、微妙な空気をたまってや冠が消してくれたお蔭で、この話しは終わったのだと綾は思ったのだが。

花名達の和風喫茶を出た後、志温と綾は他の展示などを見て周った。

そしていざ帰ろうとしたところで、志温が花名に渡すものがあつた事を思い出し、彼女は1年2組に慌てて向かっていった。

最初綾も一緒に行こうとしたのだが、志温は「迷惑を掛けられませんから。」と言って、屋上で待つてくれる様に言われてしまったのだ。

こうして綾は星尾女子の屋上、通常は閉鎖されているが、文化祭の時は開放される、に1人でいた。

周りには星尾女子の生徒や来客者もおらず静かな夕日に包まれて幻想的だった。

こやつて夕日を見るのが綾は好きだった、それは今も昔も変わらない事だった。

「相変わらず夕日を見るのが好きらしいな、まったく私には理解出来ん、何が良いんだか。」

「何が良かったって・・・先輩はこんな幻想的な瞬間を見れる事が素敵だと思わないんですか？」

そう言えば中学時代、こやつて夕日を見ていると、よく先輩にこやつてくれたものと綾は思い出す。

そこで綾は気付く、自分は今誰と会話しているのかと、悪寒に襲われ慌てて振向いた先に居たのは・・・

中学時代、飽きずに夕日を見ている薫に呆れた様にそう言つて声を掛けてきた榎並清瀬先輩だった。

綾にとって残念な事にこの話しはまだ終わっていないかつたのだった。

星尾女子文化祭 3

「えつと榎並先生？」

突然現れた清瀬に綾は動揺させられる。

「ふつどうしだんだい神城さん。」

そんな綾を見て目を細めて見つめる清瀬。

「い、いえ別に……」

何とか同様を押さええ様とする綾の隣に清瀬は並んで立つ。

「ところで神城さん、さっきの会話だが……あれって私の後輩とよくしていたものなんだが。」

同じ様に夕日を見ながら清瀬は綾に話し掛ける、いや追求してくる。

「それは偶然ですね、ははは……」

自分でも白々しいは思うが今の綾はそう言つて誤魔化すのが精一杯だった。

「ほうまだ粘るか……だが相変わらずだな、誤魔化そうとする度に後頭部に手を当るのは、お蔭で君の嘘を見抜くのは楽だったよ、あの頃はね。」

「へっ私そんな癖あったんですか……あー！」

後頭部に当てていた手を慌てて目の前に持つて来て聞き返した綾は失策を犯した事に気付く。

清瀬は顔を傾けて綾を見て勝ち誇った様に言う。

「ああ神城 薫君、その通りだよ、久しぶりだな。」

勝ち誇った笑みの清瀬に綾は負けを認めるしか選択肢は無かった。

結局綾は、中学時代に倒れた原因が実は女性であった為で、その後手術を受け神城

綾と名を変え横須賀女子海洋学校に入学し、今はブルーマーメイドで艦長をしている事まで全て話させられたのだった。

「なかなか波乱万丈な人生を歩んでいたんだな君は、しかし隠そうとしたのは納得できませんが。」

「それについては申し訳ありませんでした、ただ薫の頃を知っている人に現状を知られるのは……。」

屋上にあるベンチに座りながら2人は話していた。

「……それもそうだな、しかし美人になったものだな、まああの頃も十分綺麗だったが。」

昔見た意地の悪い笑みを浮かべながら清瀬は綾を見て言う。

「えっあの頃って中学時代ですか?」

「ああ、男のくせに美少女顔って事で君は女子の間では有名だったんだぞ。」

驚く綾を見て清瀬は肩を竦めて答える。

「知りませんでしたよそんな事。」

まあ確かに綾も男らしい容姿では無いと嘆いてはいたのだが、他人からもそう思われていたとは。

「でもまあ女だったんなら納得出来るな、よかったじゃないか。」

「何処かですか・・・自分が本当は女だと知った時は大変だったんですから。」

今まで男として生きてきた事が否定された様なものだ、しかも新たな世界に行く不安もあつたのだから。

肩を落としてその頃の事を思い出している綾に清瀬は気の毒と思いつつも何処か安堵している自分に気付く。

多分男女のままだったらその後様々な問題にぶつかっていたかもしれないと清瀬は思う。

あの頃の関係は純粋なものだったと思っている、もちろん恋愛を否定するつもりは無いが、清瀬は薫との間にそんな物を持ち込みたくはなかったのだ。

「それは確かに大変だったな、だが女の人生も悪くは無かつたんだろう?」

「・・・それは否定しません、この身体になつて得たものもたくさんありますから。」

清瀬の問いに薫、いや綾は恥かしそうに答える、男として生きていたら出会えなかつ

た事が多くあったのは否定出来なかったからだ。

「なら良かったじゃないか、男女の人生を両方体験出来るなんてめったに無いぞ。」

「別にそんな体験したくはありませませんでしたけど。」

男であれば女であれば平凡な人生を生きたいと綾は思う、まあ現状は本人の思いとは正反対であるが。

一方清瀬にとってはこれは願ったり叶ったりな状況だった、何しろこれからは歳の離れた同性の友人として付き合って行けるからだ、まあ女同士の間でも問題が起こるかも知れないが、それはその時考えれば良い話だ。

「おっとそろそろ京塚さんが戻ってくるな、薰いや綾、お前の携帯電話の番号とメールアドレスを覚えてくれ。」

ちなみに清瀬がここに来たのは志温が花名に用事が有って教室に来た所に偶然居合わせたからだ。

志温の話しから綾が屋上にいる事、そして花名への用事が長引きそうな事を知り、此処に来たらしい。

拒否する理由も無いので、と言うか教えないと後が怖そうなので綾は携帯を取り出し清瀬と電話番号とアドレスを交換する。

「言っておきますけど私はブルーマーメイドの任務で洋上に居る事が多いので陸に戻れ

るのは数ヶ月毎になりますけど。」

「構わせんさ、戻った時には一日たっぷりと付き合つて貰うからな。」

それは大変そうだと今から深い溜息を付いてしまふ綾だった。

「お待たせしました綾さん、あら先生と一緒にだつたんですね。」

「あれ榎並先生、こちらにいらつしやたのですか?」

「あ本当だ榎並先生どうして?」

屋上に志温と栄依子、花名がやつて来て綾と清瀬を見て驚いた声を上げる。

「ああ、彼女とちよつと話しをな、お互い知つている薄情な友人についてな。」

皮肉っぽい笑みを浮かべ言う清瀬にそれまだ続けるのかと綾は溜息を付く。

「それじゃ神城さん、京塚さんも今日は来てくれて感謝する、一之瀬、十倉片付け頼むぞ。」

清瀬はそう言うのと屋上から出て行くのだった、後に困惑した栄依子と花名を残して。

こうして綾の星尾女子高校文化祭は終わった。

なおこの後、清瀬と再び交流が始まった綾が彼女に振り回される事になるのは言うまでもなかった。

夏祭り 1

その日綾は何故かてまりハイツの階段脇に置かれたベンチで志温と共に座ってすいかを食べてた。

「冷たくて美味しいですね綾さん。」

「はい、暑さで参っている身体にはたまらないですね志温さん。」

外出先から帰って来た綾に志温は食べていたすいかを見せながらにこやかに話し掛けて来たのだ。

「熱いですね、綾さんもすいかを食べませんか？」

最初は戸惑ったがさつかくのお誘いだしと思ひ綾はご相伴に預かる事にした。

「そうですね冷たさが身体に染み入りますね・・・そうだ今日近くの神社でお祭りがあるんですが、綾さん行ってみませんか私と。」

志温がふとお祭りの事を思い出し綾を誘ってきた。

「お祭りですか？」

「ええ、この近辺では結構大きなお祭りです、夜店や花火の打ち上げなんかもありますよ。」
「にこやかに祭りの紹介をする志温を見ながら綾はそう言えばお祭りなんて久々だな

と考える。

最後に行つたのは横須賀女子に居た頃に横須賀の街であつた祭りに薫とスキツパー乗つて行つた時だつたなと綾は思い出す。

ブルーマーメイドに入つてからは任務の多忙さありそんな気になれなかつたのだ。

「それは楽しそうですね、私は構いませんよ、一緒に来ましよう志温さん。」

だからこうして誘つてもらつた事もあり綾も乗り気なつた様だ。

「良かったです、それじゃ浴衣も用意しますね、ああ栄依子ちゃんにサイズは聞いていますから心配ありませんよ。」

「えっ志温さん、浴衣ですか、いえそれより何で栄依子ちゃんからサイズを聞いているんですか?」

色々聞き捨てならない話が出て綾は慌てる、まあ綾は栄依子の着せ替え人形(笑)にされていたので、彼女が知つていても不思議は無いのかも知れないが、何で志温が聞いているのかと疑問を抱く。

「実は前に栄依子ちゃんと話した時に綾さんは浴衣が似合うんじゃないかと話で盛り上がった、それじゃ着せてみましょうとなりまして。」

どうやら本人の知らない所でそんな話が進んでいたとは思ひもしなかつた綾だつた。

「ちなみに浴衣のデザインは栄依子ちゃん監修です、あと知り合いから安く手に入れら

たので代金も気になさらなくても大丈夫ですよ。」

全ての外堀が埋められている状況に綾は苦笑いするしかなかった。

こうして綾は、栄依子監修の浴衣を来て、志温と共に祭りに行く事になったのだが。「あ、浴衣を着たら写真取りますね、栄依子ちゃん綾さんの浴衣姿楽しみにしてましたので。」

「は．．．？」

ちなみにその栄依子は花名達と祭りに行くのだが、綾はこの時点ではまだ知らなかった。

神社前・夜

浴衣を着た綾と志温は祭りの行なわれている神社前に居た。

なお、お約束通り（笑）浴衣に着替えた綾を志温が様々なポーズをとらせ撮影していた。

だから綾は祭りに来る前から精神的に疲れてしまっていた。

「どうですか綾さん、久しぶりのお祭りは？」

綾の疲れ（主に精神的なものだが）を気にする事無く志温は楽しそうに聞いてくる。

「そうですね．．．なかなか良い物ですね、この活気は。」

何だか疲れが飛んで行きそうで綾は微笑んで答える。

「それじゃ楽しみましょうか・・・あ、その前に綾さんの無事な航海を祈りにいきましよう。」

手を叩き志温はそう言うのと、綾の手を引つ張り始める。

「あの・・・ありがとうございます志温さん。」

戸惑ったものの志温の気持ち嬉しくなり綾は微笑む。

「あ、でも手を離して頂けると嬉しいんですが。」

女性同士で手を繋ぐと言う状況に綾は恥かしくなつて志温に言うのだが。

「駄目です。」

にべもなく拒否されたのだった。

2人でお参りを済ませ、夜店を見て回る。

「・・・駄目ですか、中々当たりませんね。」

夜店でぬいぐるみを取ろうという志温の提案で2人は挑戦しているのだが。

志温の投げたボールは見当はずれの方に飛ぶばかりでぬいぐるみにまったく当たらないのだ。

「・・・よし。」

一方の綾はどうかと言えば・・・見事に命中させぬいぐるみを落としていたのだ。

「わあ、流石はブルーマーメイドさんですね。」

感心した様に志温が言う。と夜店のオヤジがすっかり禿げ上がった頭を叩いてぼやく。

「たあ、姉ちゃんブルーマーメイドの人間か、くそっ知っていたら断つたのにな。」

そんな2人に綾は苦笑い浮かべて答える。

「いえ、ブルーマーメイドは関係無いと思いますが。」

暫らく夜店を見て歩き、たこ焼きやお好み焼きなどを買い込み、綾と志温はテーブルに着いていた。

「今日は楽しかったですよ志温さん。」

綾は感謝の言葉を志温に伝える。

「いいいえ、綾さんが楽しんでくれてお誘いしかいがありました。」

志温も本当に嬉しそうに答える、まあ世話好きの彼女としては当然か。

それから2人は、管理人の極意（ごみの分別？）についてや、艦長としての苦労話などで盛り上がった。

「それでは行きましようか、そろそろ花火の打ち上げが始まりますよ。」

食べ終わったところで志温がそう言って立ち上がり綾に声を掛ける。

「もうそんな時間ですか・・・ではいきましよう志温さん。」

2人は花火が良く見える小高い場所に移動する、何故か先程の様に手をつなぎながら。

「えっと志温さん？」

「どうかされましたか綾さん？」

綾はつながれた手を見ながら恥かしそうに志温に言うのだが、彼女は気にした様子は無い。

「いえ何でもありませんよ。」

「くすくす……綾さん可愛いですよ。」

叶わないな……。綾は真っ赤になりながら志温に連れられて歩くのだった。

打ち上げられた花火が夜空に大輪の花を咲かせる。

「綺麗ですね……」

「そうですね、花火なんて見るのなんて久しぶりですね。」

そう言いつつ握られた手を見て綾はやっぱり恥かしいなと思うのだった。

結局綾は最後まで志温と手をつなぎながら花火を見る事に事になった。

夏祭り2

「あれ・・・此処は？」

志温と花火を鑑賞した後、帰宅する事になったのだが。

鑑賞中ずつと手を繋いでいた為、熱を冷ます意味もあつて暫らくその場所に留まつたのだ。

志温には先に降りてもらい鳥居の所で待つてもらっている。

そしてようやく熱が下がったので、綾も鳥居へ向かおうとして降り始めたのだが。

どこかで道を間違えたらしく、見覚えの無い場所に出てしまったのだ。

そこはちよつとした広場で、ベンチが数脚ある、薄暗い場所だった。

綾はそこで一人ベンチに座っている顔見知りの女性に遭遇する。

「何だ綾か・・・どうした？」

かつての中学生時代の先輩、榎並 清瀬だった。

「清瀬先輩？」

意外な人間に意外な所で出会い綾は驚きの声を上げる。

「清瀬先輩も祭りに来たんですか？」

「……違う、これも仕事だ……まったく十倉達に同じ事聞かれたぞ。」

綾の質問に清瀬は機嫌悪そうに答える。

「栄依子さん達も来ているんですか？」

「ああ、一之瀬や百地、千石も居たぞ。」

花名達4人で来ているらしい、まあ彼女達なら当然かなと綾は思った。

「それじゃ清瀬先輩は何かの用事で？」

「地域貢献の一環だよ、子供が多いからな、安全確保の為に近隣の教師なんか借り出された。」

そう言う事かと綾は納得出来た、まあブルーマーメイドも海上で行なわれる行事などに隊員がボランティアで警備や救護役で参加する事があるからだが。

「……ここに来た理由は分かりましたが、こんな所いて仕事になるんですか？」

綾の疑問に清瀬はそっぽを向いてしまう、さぼりらしいと綾は察し苦笑いを浮かべる。

「先輩らしいですね。」

「ほっとけ。」

清瀬の隣に座り綾が半ば呆れた様に言う、まあ昔から気が進まない事には、徹底的に手を抜くのが多かった彼女らしい話しだが。

「そう言えばあの時に栄依子さんに送ってもらいましたが、大丈夫でしたか？」

休暇で陸に戻って来た綾に清瀬から突然「飲みに行くぞ、拒否権は無い。」と連絡があったのだ。

別に予定の無かった綾は清瀬らしい誘い方だと思いつながら参加したのだ。

しかし飲み誘ったわりに清瀬は酒に弱かった、あつと言う間に泥酔状態になってしまった。

その為綾は清瀬の友人で飲み会に参加していた西村基と彼女を自宅マンションまで連れて行くこうとしていたところで、栄依子に出会ったのだ。

その直後、基と綾に連絡が入り、基の方は店に忘れ物取りに、綾は一旦横須賀の基地に戻らなくてはいけなくなったのだ。

困った二人に栄依子が「私を送って行きましようか？」と申し出てきてくれたので頼む事にしたのだ。

幸い清瀬のマンションが直ぐ近くだった事もあって。

「だ、大丈夫に決まっているだろうが。」

珍しく動揺している清瀬に綾は首を捻る、何か問題であったのかと思つて。

実はあの後、酔っぱらっていた清瀬が栄依子と朝まで一緒に居たのだ、しかも手首を縛つて。

何だか危ない話だが、別に何かあった訳では無い、とは言え教師としてはばつの悪い話しなのは確かだ。

「そ、そうですか。」

何だか触れない方が良くと判断し綾は話を打ち切る、もつとも後日栄依子から聞かされるのだが。

「ああそうしてくれ・・・それにしても綾、その浴衣姿似合っているじゃないか。」

動揺したのも僅か、清瀬はそう言つて綾をからかってくる。

「え、いやそんな事は・・・」

「相変わらずの美人ぶりだな。」

何時もの調子を取り戻した清瀬に綾は溜息を付くしかなかった。

「ところでお前さんも此処で何してるんだ？」

清瀬の問いに綾はようやく自分が道に迷つていた事を思い出す。

「・・・艦長がそんなんで船は大丈夫なのか？」

綾から理由を聞いた清瀬は呆れた様に言う。

「いえ海の上では迷つたりは流石にありませんよ。」

艦には優秀な航法システムに専門の乗員が居る、艦長が方向音痴でも問題は無い・・・

筈だ。

「鳥居に行くなら、ここを出て左の道を行け、後は一直線だから綾でも迷わないだろう？」

悪戯っぽい表情を浮かべながら清瀬は道順を教えてくれる。

「・・・ありがとうございます、それじゃ先輩また。」

何となく悔しいが迷っていたの事実だったので綾は礼を言つて志温の元へ向かった。

「おお、借り一つだ綾。」

それは後が大変そうだなと綾は溜息を付くのだった。

綾が去った後、清瀬は夜空を見上げて呟く。

「さて何をしてもらうか・・・楽しみだな。」

その後綾は迷う事も無く志温と合流し帰宅したのであった。

夏はまだ続く・・・

お泊り会 1

その日花名は来るべき学期末試験対策で栄依子達とお泊りの勉強会を開く事になっていた。

まず最初にたまたまがてまりハイツに到着したのだが。

「たまちゃん、これからも花名ちゃんの事宜しくね。」

「はい！不束者ですが幸せにしてみせますから。」

何故か結婚の申し込み(?) になっていたり、その後駅で待ち合わせた栄依子達と…
「本当に辛い体験でした。うなぎの香しい香りの中でひたすら働いた私を待っていたお昼ご飯は…持ち込みのお弁当で…」

とたまたまの時職業体験の話で盛り上がったたりしながらてまりハイツに向かっていた。

「今日は従姉の志温さんはお出掛けなのよね?、そう言えば綾さんは?」

栄依子がふと花名が前に話していた事を思い出して聞いて来る。

「うん、志温ちゃんは同窓会だって、綾さんもまだブルーマーメイドのお仕事からまだ戻っていないくて。」

お蔭で花名はこの勉強会が無ければ今日の夜は一人で過ごさなければならぬとこ

ろだったのだ。

「だから皆が泊まりに来てくれて嬉しいのは勿論なんだけど、ちよつと安心し出来るかなって。」

「まあ一人じゃ何かと不安になるわよね、そうか綾さん居ないのか：ちよつと残念ね。」
そんな花名の気持ちを理解しつつ、綾が不在な事を残念がる栄依子だった。

だったのだが・・・

「ねえ花名、前を歩いている人ってもしかして綾さん？」

栄依子の言葉に花名が前を見ると、白い服にキャリーバッグを引いている女性に気付く。

「うん、そうだね栄依子ちゃん、綾さん！」

その花名の声に振り返る女性は栄依子の言う通りブルーマーメイドの制服と制帽を身に纏った綾だった。

「あ、花名ちゃん、それに栄依子さん達もお久し振りですね。」

微笑みつつ（栄依子を見て少し引きつつたが）花名達が近づいて来るの待つ綾。

「お帰りなさい綾さん。」

「ほんとにお久し振ですよ綾さん、お帰りなさい。」

「お帰りなさい綾お姉さん。」

「お帰り綾。」

綾を囲み花名、栄依子、たまた、冠の4人が挨拶してくる。

「今日お帰りだったんですね、確か予定では？」

栄依子が微笑みながら綾に聞いてくる、何だか機嫌が良さそうなのは久々に会えたからだ。

「帰港直前に任務が入りましたから、お蔭で一週間も伸びてしまいました。」

そんな栄依子に苦笑しつつ綾が肩を竦めて答える、まあ何時通り便利屋として厄介事を押し付けられたのだが。

それが終わり若宮はようやく今日の朝、横須賀基地に帰港出来たのだった。

「それで皆さんは何時ものお泊り会ですか？」

花名の部屋に栄依子達が泊り掛けで遊びに来ている事は綾も知っている。

「そうだったら・・・どんなに良かったでしょうか・・・」

たまたがこの世の終わりの様な顔をして言うので綾は不思議そうな表情を浮かべてしまう。

「もうすぐ後期試験が有るので、皆でお泊りの勉強会をする事になって・・・」

「あ・・・なるほど、そういう訳ですね。」

花名の説明に綾は納得し、たまたの落ち込んでいる理由を察した。

「まあ学生にとつては試験や勉強が仕事みたいなものですからねたまてさん。」
綾が慰めるとたまては頭を抱えて叫ぶ。

「ああ、早く就職したいです、そうすれば試験なんか無くなるのに……」

その絶叫(?)に栄依子達は半ば呆れた表情を浮かべてしまう。

「いえそんな事は無いかもしれませんがよたまてさん。」

「……?」

頭を抱えていたたまてが綾を見る。

「ブルーマーメイドだって、今の階級より上になりたければ昇格試験を受けなければならぬし、職種に就く為に必要な資格を得るのに試験を通れなければならぬ事もありますから。」

だからブルーマーメイドにおいては、例えば女子海洋学校を卒業しても、試験から無縁になるとは限らないのだ。

綾だつて艦長候補生として訓練を受けつつ、各種試験に合格せねばならなかつたし、それに合わせて二等保安監督官になる為の試験だつて受けなければならなかつたのだ。

「そうだつたんですね、綾さん凄……」

栄依子が綾の話を聞いて心底感心した様に言う、花名や冠も同様な表情だつた。

「ううう、そうなんですか……はあ。」

たまては更に落ち込んでしまった様だった。

それを見て苦笑していた花名が何かを思いついたのか綾に話し掛けてくる。

「そうだ綾さん、前みたいにもた勉強見て貰えませんか？」

「花名それって？」

突然の花名の言葉に栄依子が不思議そうに問い掛ける。

「うんちよつと前の話なんだけど・・・」

花名はその時の事を栄依子達に話すのだった。

お泊り会2

それは少し前の話、たまたま英語のリスニングテストとレポート提出が重なってしまった事があった。

だが頼りにしていた志温が所用で出かけてしまい花名はパニック状態になってしまった。

そんな花名に綾が声を掛けて来てくれたのだった。

まあ花名が自分の部屋の前で奇妙な踊り（笑）していたのを見かねてだったのだが。事情を聞いた綾がそれならお手伝いしましょうと言ってくれてのだ。

「綾さん英語の発音も正確で分かりやすかったし、論文の方も的確な指摘があって、テストやレポートの評価が結構良かったんです。」

「そう言えば花名、それで榎並先生に誉められていたわね。」

その時の事を思い出し栄依子は言う。

『今回は一之瀬ががんばったな、中々良かったぞリスニングもレポートもな。めったに誉める事の無い清瀬がそう言って花名を誉めたのだから。』

花名の話聞いて綾はあの時の事かと思いが当たった、実はあの後清瀬に会った時に、

『お前教師でもなったらどうだ、私より教え上手じゃないか。』
と散々からかわれたものだ。

「だから今回もリスニングテストとレポート提出があるからどうかなくて。」
英語のリスニングテストにレポート提出が重なっている為に綾にまた助力を頼もう
と言う訳だ。

ちなみに志温は今回も用事があり手伝えないらしい。

「そうなんだ・・・だったら綾さんお願いしても良いですか?」

そうであれば綾に教えてもらうのも良いかと栄依子は考える、何より彼女と色々触れ
合える。

清瀬同様栄依子にとって綾は気になる存在だからだ。

「なるほどそれは名案ですなあ・・・綾お姉さん私からもお願いします。」

「うんお願い綾。」

たまたと冠も異存無い様だった。

「まあそれでしたらお手伝いしますが。」

綾も皆からこう言われれば断りきれない、結局手伝う事になった。

てまりハイツに到着後、栄依子達は花名の部屋に、綾は着替える為自分の部屋に向
かった。

そうして勉強会が・・・始まらなかつた。

普段着に着替えてきた綾に栄依子のフアッションチェックが入った為だ。

「駄目ですよ綾さん、そんな組み合わせじゃ・・・」

即座に綾の部屋に戻され、栄依子による着せ替えが始まってしまった、その為勉強会開始が30分送れた。

綾は始まる前から疲れを感じてしまったのだつた。

その後、勉強会は順調に流れ時は夕方になった。

「つ、疲れました・・・」

「お腹減つた。」

机に突つ伏してぼやくたまてと、栄依子に身体を預け眩く冠。

そんな2人を見て栄依子は苦笑を浮かべつつ言う。

「本当にそうね、でも思つたより進んだわね、これも綾さんのお陰ですね。」

「そう言ってもらえると手伝つて良かったと思えますね。」

栄依子に着替えさせられた服、白のブラウスと青のフレアスカート姿の綾が微笑んで答える。

そんな4人の元に花名がやって来て言う。

「お風呂溜まったよ皆。」

勉強会が終わったので皆風呂に入りその後食事と言うスケジュールになっていた。

「それじゃあ私はこれ……」

綾としては勉強会にだけ参加の積もりだったので、そろそろお暇しようとして声を上げ様として……

「そうだ、私入浴剤持って来たんだけど、入れても大丈夫かな花名？」

カバンを開け入浴剤を取り出した栄依子に阻止（笑）されてしまう。

「うん大丈夫だよ、じゃあ綾さんからお風呂どうぞ。」

阻止されたうえに入浴する事になっている様だった。

「いえ……私は別に……」

自分の部屋の風呂が有るので綾は断ろうとしたのだが。

「どうぞどうぞ、一番風呂行っちゃって下さい綾お姉さん、色々お世話になりましたし。」

たまためにそう言われて上に……

「じゃあこの入浴剤お願いしますね。」

入浴剤を栄依子に渡され結局綾は断れ切れず入浴してゆく事になったのだった。

「何ゆえ私は花名ちゃん部屋の風呂に入っているんでしょうか？」

風呂場のシャワーで身体を洗いながら綾は悩んでいた。

とは言えせっかくの好意なのだからと納得する事に綾はした。

「そう言えば入浴剤入れないと。」

風呂につかろうとして綾は栄依子から貰った入浴剤の事を思いし浴槽に入れる。するとお湯が白くなりとりろみが増してゆく。

「えつとこれって?」

躊躇しつととりろみの増した浴槽に入る綾。

「ひゃああ!」

全身を包む何とも言えない感覚に綾があげた悲鳴が風呂場に響いた。

次に入浴したのは栄依子と冠。

「美味しそ。」

と冠が言つて栄依子の指を舐めたり。

その次に入った花名が「一人風呂はそこまでです!」と言われてたまために乱入されたりして全員の入浴は終わったのだった。

そして冠待望(笑)の夕飯の時間。

とりろみ風呂に因んで、たまため特製八宝菜・・・とりろみがたつぷりが振舞われる。」

もちろん皆の評判は良く、花名が八宝菜の人生に思いをはせたり、黙々と冠がお代わりを連発したりした。

「本当に美味しいですねこれは・・・でも私がお相伴に預かって良かったでしょうか?」

「美味しさに綾も感動したが、元々夕食までご馳走になる積りではなかったのになって聞いてしまう。」

「どうぞお気になさらずに・・・綾お姉さんのお陰ですつごく捗りましたから。」

「ええ、それにしても綾さんはやっぱり凄い人なんですね。」

たまための言葉に栄依子も続く。

「まあ、英語もレポートも仕事のうちですからね。」

ブルーマーメイドにとつて英語は公用語扱いだし、艦長としてレポートの作成や確認は必衰なのだから。

その後5人は花名達の高校やブルーマーメイドの話題で盛り上がりつつ夕食を終えるのだった。

お泊り会3

夕食を終えた花名達は片付けを済ますと次の予定を開始する。

それは何故かたまたまのお勧め（？）で『ギャルゲー』をする事だった。

皆で出来るゲームだと思っていた花名達は『ギャルゲー』言うジャンルに戸惑う。

まあ女子高校生のするゲームではないかもしれないなあと思はる。

このメンバーの中ではたまたまと同様に『ギャルゲー』を知っている人間は綾だけだろう。

元男だっただけに内容は理解している、やった事は無いが。

そしてプレイを行なうのは栄依子。

「何で私が？」

任された栄依子は困惑している、花名と冠も理由が分からず同じ様な感じだ。

一方綾は思わず納得していた、と言うのも以前たまたまから栄依子のプレイガールぶりを聞かされていたからだ。

栄依子の休日予定のメモがたまたま曰く、「ハーレムルートの攻略チャート見たいですね。」だったらしい。

「選択肢を一つ間違えると刺されるパターンですね。」

そして何だか物騒な事もたまては言っていたなと綾は思い出す。

兎も角栄依子は困惑しつつゲームを始め、それを興味深げに見る花名と冠、どや顔（何故に？）のたまて、そんな皆を苦笑しつつ見守る綾だった。

「な、なにか見てるだけでドキドキしますね。」

花名は食い入るように画面を見つつそう言う。

まあ確かにそれはあるかもと綾、ゲームをやった事は無いがプレイ画面等を動画で見た事があったからだ。

それは人の恋路を隠れて見ている様な背徳感みたいなものがあると綾は思ったものだ。

そんな花名と綾に得意げにゲームの説明をするたまて。

「私の一押しはこの子ですね。」

ゲームのパッケージイラストに描かれているキャラ達の中から1人を指差してたまてが言う。

「この子は？」

冠が違うキャラを指差して聞いて来る。

「あ・・・その子は登場した時彼氏さんが居るのでダメです。」

「それじゃ付き合うのは無理なんだ。」

花名がちよつと残念そうに言うのと突然たまでが目のハイライトを消して答える。

「いえ。まあ付き合えますが・・・ほら元カレが居た訳ですし・・・『今までもこれからも私の事しか好きにならない子が良いんですよ。今までもこれからも』つてなります。」
「たまちゃん・・・顔怖いんだけど・・・」

何でそこでたまでまでヤンデレ化するんだろうと綾は苦笑してしまう。

そんな時軽やかなゲームのSE音が部屋に響き、皆が画面を見る。

「な!?」この短時間で全ての女子の恋心をカンストさせてますよ、ほんと栄依子ちゃん怖い娘・・・!」

それを見て本当にハーレムルートを達成出来そうだなと納得してしまふ綾だった。

ちよつと波乱の有ったゲームタイムを終え花名達は就寝の為布団を敷き始める。

綾も泊まっていたいかないかと栄依子に誘われたが、流石にそれは辞退させてもらった。

花名の部屋は2組の布団を敷いただけで一杯だ、そして1組事に2人一緒に寝るのだ。

もし一緒に寝るならどちらかに潜り込まなければならぬ、流石それは遠慮したい綾だった。

「それじゃ今日はありがとうございまして綾さん。」

部屋に戻る綾を階段手前まで花名は見送ってくれる。

「いえ、私も楽しかったですよ花名ちゃん。」

横須賀女子時代に同じ様な事を薰や友人達とやった事を思い出し懐かしさを覚えた綾だった。

「はは、それじゃまた誘いますね。」

悪戯っぽい笑みを浮かべ花名が言うのと綾は苦笑してしまう。

「ではお休みなさい花名ちゃん。」

「はいお休みなさい綾さん。」

こうして花名達との勉強会の1日は終わったのだった。

花名服を買いに行く1

てまりハイツの一室で花名が泣き声を上げていた。

「わ、私……知らない子になっちゃったのかな……」

その日自室で本を読んでいた花名の元に志温が尋ねて来た。

「葉月さんからお届けものよ。」

「わあ！もしかしたら新しいお洋服かな？」

母親である葉月はよく花名宛に洋服を送ってくる事がある。

「あれ……志温ちゃん荷物は？」

だが志温が持つて来たの一通の封筒のみだった。

「それが花名ちゃん宛てには、この封筒だけだったの。」

志温にも訳が分からなかった様で首を捻りつつ封筒を花名に渡す。

渡された花名が中身を確認して見ると……現金が入っていた。

「は、花名ちゃん!？」

急に泣き出す花名に志温は慌てるのだった。

『いやだからね、別に花名の事を見捨てた訳じゃなくて、花名も高校生なんだし私が選ぶ』

より自分で選びたいかなと思ったから。』

急遽連絡をしてきた花名に葉月は困惑しつつ答える。

「ねえお母さん、私って見捨てられちゃったの!?!」

葉月が電話に出た途端、花名がそう言って泣きついてきたからだ。

別に葉月は花名を見捨てた訳では無かった、当たり前だが。

ただ今度は花名の方が困惑する事になった。

「自分でって急に言われても・・・」

『花名も自分で好きな服あるでしょ?』

もちろんそうだが、何時も買ってもらってる服に不満がある訳でも無い花名としては

悩んでしまう。

『どんな服選んだか後で写真送ってね。』

だが葉月はそんな花名の悩みなど気にせずと言って来る。

「そ・・・そんなお母さん!?!」

『楽しみにしてるわね、それじゃあね花名。』

通話が終わった携帯を花名は呆然と見守るだけだった。

なお、花名と電話終了後の一之瀬家で葉月が夫である健に「はーちゃんの選ぶ服何時も花名に似合ってるからな。」と誉められて喜んでいたのは余談である。

結局花名はどうすれば分からないまま学校に行く羽目になったのだが。

悩んでいる事に気付いた栄依子達のアドバイスもあり、4人で花名の服を買いに行く事が決まった。

あと皆でパフエを食べるおよパフエ（花名の服を選びパフエを食するコース）も。翌日買い物に行く約束をして花名はてまりハイツに帰って来た。

自分の事を心配して色々考えてくれる栄依子達の事を思うと嬉しかったが、服選びはやはり悩む花名だった。

そんな花名はてまりハイツの2階廊下が騒がしい事に気付く、女性2人の声、1人は志温の様だがそうするともう1人は綾だろうか？

予定では今日てまりハイツに戻って来る事を花名は思い出す。

そのまま自分の部屋に戻ろうとした花名だったが、2人が何をしているのかと好奇心が沸いたので2階に上がって見たのだが。

「えっ……」

そこで見た光景に花名は固まる。

「大丈夫ですって綾さん。」

「何が大丈夫なのか判りません志温さん。」

綾の部屋の前で押し問答する綾と志温、珍しい光景だが花名が固まったのはそれが理

由では無かった。

綾と志温が何故か制服姿だったからだ、それもどう見ても女子校生が着る様な．．．
まあ志温が自分の通っていた高校の制服姿をするのは花名も何度か見た事がある。

『ふふふ、似合ってるかな花名ちゃん。』

だから花名が固まった一番の理由は、綾もまたセーラー服姿だった事だ。

そのセーラーカラーと袖に青いラインの入った白のセーラー服と、裾に白いラインの入った青いスカートに花名は見覚えがあった。

横須賀女子海洋学校の制服だった筈だ、前に卒業アルバムで見たから間違いないと花名は思った。

「!?花名ちゃんこ、これは．．．」

「あらお帰りなさい花名ちゃん、あ見て綾さんの横須賀女子の制服姿。」

花名に気付き顔を青くして弁明しようとする綾と、嬉しそうにその制服姿を見せようとする志温。

てまりハイツの2階廊下は混沌とした状況になっていた。

「つまり綾さんのお母さんが仕立て直した横須賀女子の制服を送って来て、それをどうしようかと悩んでいる所を志温ちゃんに見られたと?」

綾からの説明でようやく事態を飲み込めた花名だった。

「こんなに素晴らしい姿なのに隠すなんて、もったいないですよ綾さん。」
「いえ私はこんな姿を他人に見せたくはありません。」

まだ押し問答を続ける2人を見ながら花名は心底こう思った。

何でこの大人2人は、高校時代の制服を着ているのに違和感がまったく無いのだろうか。

もちろんこれで女子高生ですと言っても誰にも信じないだろうが、その歳でそんな制服姿をしているのに2人からまったく痛々しきと言うものを花名は感じられないのだ。

そう2人共似合いすぎているのだから始末が悪かった。

美人はどんな格好しても様になるんだなと花名は溜息を付くのだった。

花名服を買いに行く2

部屋に戻って来た花名は机の上にある母親から送られて来た現金入りの封筒を見て溜息を付く。

ちなみに綾と志温のコスプレ（笑）姿による押し問答は放置してきた。

まあ最終的には外出しない代わりに写真を撮る事で妥協しそうだったが。

「私らしい服って……どんなだろう。」

今まで自分で服を選ぶなどした事の無い花名にとって今回のハードルは高かった。

せめてもの救いは栄依子が来てくれる事だろうか、彼女の服選びは確かだったからだ。

その時だった、花名の携帯からメールが着信した事を知らせる音がした。

「えっメール……栄依子ちゃんから?」

直前まで考えていた栄依子からのメールに花名は驚きつつ内容を見る。

『綾さんの横須賀女子の制服姿、ちよー最高ね花名。』

どうやら志温は撮影した綾の制服姿を栄依子に送ったらしいと花名は苦笑する。

志温と栄依子が何時の間にかメールアドレスの交換をしていた事を花名は最近知っ

た。

きつかけは志温の就職浪人を栄依子から聞かされた時で、そのコミユカにたまては驚愕していたが。

『直接見れた花名と志温さんが羨ましい、私も今度会ったらぜひ着てもらおうつもり。』

「ははは栄依子ちゃんらしいね・・・綾さんがんばつて下さいね。」

もはや栄依子によって着せられる運命が決まっている綾に花名はエールを送るのだった。

「あれ・・・?」

そんな栄依子のメールの最後に『追伸』とメッセージが書かれている事に花名は気づく。

『あ、それで明日の件で花名に頼みたい事があるんだけど・・・』

翌日

郊外にあるアウトレットパークに花名は来ていた。

ここであれば結構手頃な値段で様々な物が手に入るので花名や栄依子達は良く利用する。

「花名。」

「花名ちゃん、こっちですよ。」

「やつと来た。」

栄依子とたまたまて、冠が花名を見つけて声を掛けて来る。

「皆その今日はありがとう・・・まだ何買つて良いか分からなただけど。」

3人に礼を言いつつ花名は苦笑しつつ答える。

「無理に今日買わなくても良いんだし、似合つてる服をゆつくり探していけば良いじゃないのかしら」

そんな花名に栄依子は微笑ながら励ましてくれる。

「う、うんありがとう栄依子ちゃん。」

「花名は素材が良いから何でも似合うと思う。」

「そうですよ、花名ちゃんはおむちちゃんと同じで最高の素材ですからね。」

たまたと冠がどや顔で励まして(？)くれる。

でも素材つて・・・誉めてくれているのだろうが少々複雑な花名だった。

と此処までは何時もの4人の会話だったのだが・・・

「あの・・・どうして私まで此処に来なければならぬのでしょうか？」

そう何故かこの場所に綾も居た、思いつきり困惑した表情で。

「ふふふいらつしやい綾さん、花名ありがとうね。」

栄依子は花名に礼を言いつつ、機嫌良さそうに綾を向かえる。

「あ、あの綾さんごめんなさい、栄依子ちゃんにどうしてもって言われて。」
前日来たメールの追伸の内容がこれだったのだ。

『綾さんも是非連れてきて欲しいの、あつもし渋ったら・・・大変な事になりますよって
言つてね。』

何だか脅迫している様で花名としては気が引けたのだが、栄依子が何を計画しているのかと知りたいと言う事もあり、綾の部屋行き誘ったのだ、栄依子の台詞を言つて。

花名にとつては好奇心が思いやりを凌駕した瞬間だった。

「もう良いです、それより花名ちゃんのを服を選ぶだけですよね？」

綾は花名の事だけだと強調したのだが・・・

「もちろん綾さんの服もですよ・・・決まっているじゃないですか。」

何が決まっているのかと綾は言いたい気分だった、兎も角このままでは着せ替え人形にさせられるのは今までの経験上確定だったので何とか断ろうとした時だった。

「何しろ天音さんからも頼まれていますから。」

栄依子の口から何処かで聞いた様な名前が出て来て綾は思わず呆けた表情を浮かべてしまう。

「えつと栄依子さん、その天音さんつてまさか・・・」

「はい桜井 天音さん、若宮の副長をしている方ですよね。」

やはり聞き間違いでは無かった様だった、それにしても何で天音と栄依子が知り合いなのか、と綾は混乱する。

「半月前に横須賀中心街のお店に行つた時にお見かけして声を掛けたんです、前に写真で見せてもらっていたので直ぐに分かりましたから。」

確かに若宮の事を話した時に天音を副長だと紹介はしたが、まさか出会つたからと言つて直ぐに声を掛けるとは・・・

綾は今更ながら栄依子のコミュニケーション能力を侮っていたと痛感した瞬間だった。

花名服を買いに行く3

「流石に最初は驚いていたんですが、私が綾さんの知り合いと言うと直ぐに打ち解けました。」

衝撃の事実に綾が混乱しているのを他所に栄依子は得意そうに話す。

「そして綾さんの事で意気投合しました、でその時服装の話が出て、天音さんから是非見てくださいと頼まれたんです。」

副長、貴女は一般人の女子高生と何をやってるんですか？、綾はそう叫びたい気分だった。

「そう言えば綾さん、真冬さんと言う方は天音さんのお知り合いなんですか？」

「えっ真冬さんですか？」

栄依子の口からまた聞いた事のある名前が出て綾は驚かされる。

「はい、私が声を掛ける前に天音さんと話していた方で・・・何だか険悪な雰囲気だったもので。」

天音の知り合いと言うのならやはり宗谷 真冬と言う事になる、でも険悪な雰囲気と言うのは信じられない綾だった。

2人は同期で前に見た時は特段仲が悪い様には見えなかったからだ。

実は何故険悪だったのかと言えば、綾はまだ気付いていないのだが、真冬が彼女を強制執行課に引き抜こうとしていたからだだったりする。

「おお天音、実は神城艦長を強制執行課に欲しいと思ってるんだが。」

その日、再会して早々挨拶に抜きで真冬は天音こう言ったのだ。

「艦長は私達乗員と若宮にとつて必用な人です、勝手な事言わないで欲しいですね。」

真冬の失礼な言葉に天音が即座に言い返し2人は栄依子の言う通り険悪な雰囲気になる。

まあ綾を気に入って手元に置きたいと思う真冬と取られまいとする天音、この2人が出会えば当然そうなる訳で・・・だから危うく横須賀中心街で壮絶なキャットファイトが勃発するところだったのだ。

まあその場では真冬が姉である真霜と会う約束があり、結局時間切れで勃発しなくてすんだのだった。

そして真冬と別れた天音に栄依子が声を掛けたと言う訳だった。

「私があの方はお知り合い合いなんですかと聞いたら『真冬何て女私は知りません。』と言ってました。」

それって知っているって言っている様なものじゃないかと綾は内心苦笑する。

「所属する部隊は違いますが、彼女は私と同じブルーマーメイドの隊員ですよ。」

強制執行課については部外秘扱いだったのでその辺は詳しく話さずに説明する綾。

「そうだったんですね・・・中々凛々しい方でしたけど。」

まあ確かに凛々しいと言えるかも知れない、犯罪者の乗る船に真っ先に突入するくらいだからと綾は思った。

「出来れば真冬さんとも仲良くなりたいですね。」

にこやかに言う栄依子を見て、彼女なら真冬とも難なく親しくなるだろうなと思う綾だった。

「まあそう言う訳で綾さん・・・逃がしませんよ。」

微笑みながら見つめる栄依子に蜘蛛の巣に捕まった獲物同然の綾は諦めるしかなかった。

「綾も素材が良いから・・・楽しみ。」

「そうですねこれは花名ちゃん同様期待出来そうですね。」

たまたと冠もそう言つて花名と綾を見つめてくるので、花名と綾は苦笑するしか無かった。

そんな時、店員の声が響いてくる。

「ただいまよりマグロの解体ショーを始めます！皆様見学に来て下さ〜い！」

それを聞いたたまてが興奮した様に冠に話し掛けてくる。

「冠ちゃん聞きましたか!?これは是非参加しなくては!」

「合点承知。」

冠が頷いて答える、こちらでも普段見られない程興奮している様だった。

「と言う訳でちよいと失礼します!」

「失礼する。」

そう言い残し全力ダッシュでマグロの解体ショーを見に向かうたまてと冠。

「え?たまちゃん、冠ちゃん?」

「・・・えつと。」

取り残された花名と綾はそんな2人を呆然と見送るだけだった。

「2人とも先に行ってるからね。」

一方栄依子は大して気にした様子も無く見送る。

「それじゃ行きましょうか花名、綾さん。」

たまてと冠を見送った栄依子はそれはもうにこやかに笑って2人に声を掛けてくる。

「うん栄依子ちゃん。」

「・・・お手柔らかにお願いしますね。」

緊張気味の花名と最早諦めの境地になる綾だった。

花名服を買いに行く4

洋服店に到着した栄依子と花名、そして綾。

色鮮やかな服が並び多くの女性達で賑わっており花名と綾は気遅れ気味だ。

対して栄依子か何時もにましてテンションが高い、まあ普通はこちらが女の子としては正常な反応なのかもしれない、花名と綾がちよつと変わっているのだ。

花名としてみれば母親の選ぶ服は可愛いとは思うけど時々子供っぽいなど感じる事もあった。

かと言って大人っぽい服をと思ってもまだ自分には似合っていない気がするのだ。

だから栄依子の様にテンションが上がらないのだ、色々考えすぎて楽しめないのだつた。

一方綾の方が・・・これはずばり言って過去のトラウマに起因している。

女性になり始めての女物を母親に着せられたのだが、はつきり言って玩具扱いだった。

一応教育と言っていたが明らかに自分で遊んでいたと綾は思っている。

そして横須賀女子時代は薫と友人達、ブルーマーメイドに入ってから副長を筆頭に

若宮の乗員達、そして新たに栄依子が参加、何だか加速度的に着せ替え人形化が進んでいるんじゃないかと綾は感じている。

その所為もあり綾は服選びが苦手なのだ。

「ゆつくりで良いんじゃないかな、素直に今の花名が好きな物を着たら良いと思うわよ。」

あれこれ悩み始めた花名に栄依子は優しく言う。

「無理に何時もと違う服を着てるのも花名らしくないしね・・・それはそれで可愛いと思うけど。」

そんな栄依子の言葉に救われる思いがする花名、それに後押しされる様に彼女は先程から気になっていた服を取る。

「栄依子ちゃん・・・やっぱりこれ・・・かな・・・」

その服を見て栄依子は満足そうに頷く。

「それ花名らしいわよ。」

「え？ 私らしい・・・かな？」

花名はその言葉に赤くなるが、一方で自分の選択が誉められた様な気がして嬉しかった。

「うん、とつても素直な可愛い服よ・・・綾さんは決まりましたか？」

栄依子は次に綾の方を見て聞いて来る。

「えつとこんなところですか。」

綾はそう言つてブラウスとスカートをを見せてくるのだが。

「・・・綾さん。」

「え、いや、その・・・」

「・・・(ひゃあ)・・・」

静かだがその言葉の奥に強い怒りが籠つた栄依子に綾だけでなく花名まで固まる。

「そのブラウスにそのスカートは合いません・・・どうやら調教、いえ教育が足りない様ですわね。」

「え、栄依子さん今調教つて言いませんでしたか？」

不穏な言葉に綾は聞き返すが、栄依子はそれを無視すると傍らに飾つてあつたワンピースを手に取る。

「じゃあさつそく試着しましょうね花名、綾さん。」

「え、い、今？」

「ちよつと待つて下さい私は・・・」

「すみませ〜ん店員さん試着室借りますね。」

躊躇する2人を他所に栄依子は早速試着させる積りらしい。

その意気込みに花名と綾は圧倒され言う事を聞くしか選択肢は無かったのだった。

花名服を買いに行く5

「すみませ〜ん店員さん試着室借りますね。」

栄依子その言葉で早速試着が決まった花名と綾、だがその表情は対照的だった。

自分で始めて選んだ服を着る嬉しさと恥かしさの花名と、栄依子の生贄（笑）にされる恐怖と羞恥心の綾では仕方が無い話しだが。

試着室に入り試着する花名と綾、それをスマホを見ながら栄依子は待っていた。

まず花名の方が・・・

栄依子の凄さに感服していた、自分と違ってきはきして落ち着いてるし、花名に似合うの見付けられるなんて、もしかして本当に女子高生でなく大人？と考えて前日見た夢を思い出し再び自己嫌悪になる。

「この服似合ってるのかな・・・私なんだかちよつとだけ大人っぽくなった、つてえっ？」
鏡に映る自分の姿にそんな気分になっていた花名は突然試着室に顔を出して覗いた栄依子に驚く。

「どう花名?」

「え、栄依子ちゃん?!」

思わず顔を真っ赤にして、両手で身体を隠そうとしてしまう花名。

「わく、良いじゃない花名、凄く似合ってるわよ。」

その賛美を聞いてますます顔を赤くしてしまふ花名だった。

そしてそんな花名をじつと見つめて来る栄依子。

「栄依子ちゃん？」

「.....」

沈黙する栄依子を見て花名は何だか不安になってしまふ・・・やはり似合わないのかと思つて。

「花名、なんか大人っぽくなつたみたい。」

満面の笑みを浮かべ栄依子は花名が予想もしなかつた事を言つて来たのだった。

それに対し花名は思わずこう言つてしまふ。

「止めて止めて栄依子ちゃん、氣遣いなど無用なのです！」

某プラウザゲームに出て来る、某駆逐艦の様な口調になる花名だった（笑）。

微笑ましい笑みを浮かべて花名を見ていた栄依子は次に隣の試着室で着替えている綾の方へ移る。

「さてどうですか綾さん？」

同じ様に試着室に顔を入れ綾に尋ねる栄依子に綾は慌てて花名の様なリアクション

をしてみよう。

「ちよ、栄依子さん声を掛けてからにしてください……着替え中だったどうするんですか？」

着替えた姿を見られない様に必死に隠そうとする綾に栄依子は目をきらりと光らせて答える。

「それはそれで……私としては嬉しいですね、綾さんの下……」

「わわわ、言わなくても良いです栄依子さん。」

「これではどちらが年上か分からない、まあ何をやっても綾は栄依子には勝てないのだが。」

「うん素敵です綾さん、思った通りですよ。」

「そ、そうですか……私には大胆過ぎる様な気がするのですが。」

前から見ると普通っぽいのだが、背中から見ると結構身体のラインがはつきり見えるのだ。

「本当だ、綾さん似合ってますよ。」

栄依子の言葉が気になり花名は試着室を出て来て、同じ様に覗き込んで来る。

やっぱり自分より大人だと、この時ばかりは花名はそう思った。

「あの2人共そのくらいで……恥かしいのですが。」

2人の言葉に顔を赤くし恥かしがる綾に栄依子と花名は年上ながらとても可愛いと思っただ。

特に栄依子は綾に対する感情が、榎並 清瀬に劣らない程強くなって行くのを自覚していた。

自分は結構気が多いのかな、栄依子は内心苦笑してしまうが、まあそれも良いかなと綾を見て思うのだった。

花名服を買いに行く6

「まったくもう・・・そう言えば花名ちゃんもその服似合ってますよ。」

恥かしがっていた綾は栄依子と共に覗き込んで来た花名見て言う。

「大分大人っぽくなりましたね、ねえ栄依子さん。」

「綾さんもそう思いますよね、花名ほら綾さんもそうだって。」

「だから気遣いなど無用なのです！」

2人の賞賛に花名はやはり某駆逐艦の様な口調になってしまふのだった。

「大人っぽくなったというか少し成長したのかも・・・」

自分の姿を見ながら花名は呟くと栄依子はそんな彼女を見て何かに気付いたのか聞いて来る。

「胸とか？」

栄依子の問いに恥かしそうに俯きながら花名が答える。

「う・・・うん、実は下着のサイズも合わなくなった・・・」

「それも付き合おっか？」

花名のそんな姿を微笑ましく見ながら栄依子が提案して来る。

「え……良いの?」

思わぬ提案に花名が聞き返す。

「良かったらお供します。」

微笑んで栄依子は承諾する、言われなくてもその積もりだったのだから。

「良かった、志温ちゃんと一緒に来てつてお願いしようと思つてただけど……志温ちゃんからしたら私の胸の増減なんてアリンコが止まったくらいのものだろうなつて。」

花名はそう言つて溜息を付く、確かに志温さんの胸の大きさとから言えばそうなるかも、綾も思つてしまうのだつた。

「あはは、志温さんから見たら誰もが皆アリンコになつちやうかもしれないわねえ、それでどうする、服買った後で行く?」

栄依子もそう感じたのか、苦笑いを浮かべながらこの後の予定を提案する。

「あの……出来たら下着買う時は2人だけの時が……」

「そうなの? たまやかむはからかつたりしないと思うわよ。」

まあからかつたりしないだろう……羨ましがるかもしれないがと綾。

「うん、それは分かつてるんだけど……」

どうやら花名も綾と同じ様に感じたのか困つた表情で答える。

「……うん分かつたわ花名、今度3人で行きましよう。」

そんな花名の心情を察して栄依子は新たな提案をして来たのだった。

「3人?」

花名が不思議そうな表情を浮べて聞き返して来る。

「そう3人、私と花名、それに綾さんとね。」

「ちよ、何で私まで?」

栄依子の新たな提案に綾は慌てしまう。

何しろ下着買いに行くと言う行為は綾にとつては未だに苦行なのだから。

思い出せば、母親に初めてブラとショーツを着せられた時は、恥かしさと女になったと自覚させられたショックで半日寝込んだのだ。

そして海洋学校時代、薫や友人達に連れて行かれ（もちろん強制的にだ）、綾はトラウマを植えつけられてしまったのだ。

「何を言っているんですか綾さん、この前の身体計測で胸が成長したんですよ、それでブラが合わず大変な事になっているそうじゃないですか。」

「!?何でその事を知っているんですか栄依子さん。」

だが綾のトラウマを気にする事も無く、それどころか誰にも話していない事実を指摘してくる栄依子。

実は最近行なわれた健康診断の身体計測で胸が成長していた事が分かったのだ。

海洋学校時代以来の事だが、この歳で今更と言う思いと恥かしさで、そのデータは艦長権限で封印した綾だったのだが。

しかもその所為でブラが合わず、着替えの度に苦労している事まで知られている事に綾は動揺させられる。

「天音さんから聞きました。」

「副長、貴女は一体何をしているんですか!？」

さも当然ですと言う顔で答える栄依子に綾は頭を抱え絶叫してしまうのだった。

まあ天音にしてみれば綾の事を全て把握しているのは当然だと考えており、艦長権限など意図も簡単に突破してしまったのだ。

あとサイズが合わず苦労している事は、天音自身と乗員達の日撃でとつくの昔に分かっていた事だった。

綾は着替え時恥かしさで気付いていなかったのだが、周りの者達はその姿をちゃんと観察（笑）していたのだ。

若宮の艦上ではプライベートなど存在しない事を綾は知らなかった。

花名服を買いに行く7

綾が副長との今後の関係を考え直すべきだろうかと苦悩していた時だった。
「わあ!?!かむ?」

栄依子は突然後ろから解体ショーから戻って来た冠に抱き着かれてしまう。

「かむもう終わったの?」

「うん終わった。」

「いや凄かったですよ解体ショー!!」

一緒に戻って来たたまたまが興奮して栄依子に話し掛けて来る。

「堪能した、もちろん味見もした。」

冠も満足そうに栄依子に抱き着きながら答える。

「また見たいですな。」

うんうんと腕を組みながらたまたまが言う。

「ところでそのTシャツは何んなんでしようか?」

『赤身にまぐろに大トロ』と書かれたTシャツを着ている冠とたまたまに綾が眩く。

行く前には着ていなかったもので、わざわざ購入したのだろうかと思つた。

「すっかりマグロに魅せられちゃって。」

栄依子も苦笑しつつ、綾同様に冠とたまてを見る。

「これからはマグロの時代！」

何故かドヤ顔の冠だった。

「花名ちゃん、綾姉さん！そのお洋服凄く似合ってますよ！めんこいです、このTシャツと良い勝負ですよ。」

たまてが試着した綾と花名の姿を見て、目を輝かせて言ってくる。

「マグロの輝きと良い勝負。」

冠が親指を上げて決め台詞を言う、意味はまったく不明だが。

「意味は分からないけど褒められているんでしょっか？」

「さあ、それは私にもわかりませんが・・・」

綾と花名は顔を見合わせると苦笑する。

それに対し栄依子が笑いながら答える。

「意味は分からないけど絶賛よ！」

どうやら冠とたまてに褒められているらしい、綾と花名は恥ずかしさに頬を赤く染めて再び顔を見合わせるのだった。

そして綾と花名は試着したその服を購入したのだった。

その後5人は雑貨屋に来た。

「ここは一点ものも多いから楽しいのよね。」

店の中の様々な雑貨を見ながら、栄依子は楽しそうに話す。

「前花名とたまの誕生日の時に送ったプレゼントもここで買った。」

冠はそう言つて置いてあるぬいぐるみくを見ながら言う。

「本当だ〜!」

栄依子達と初めて部屋で勉強会をした時に、プレゼントされた物と同じぬいぐるみくを見つければ花名は微笑む。

ちなみに綾は花名の部屋で見た事があり、彼女から栄依子達からの誕生日プレゼントだと聞いたので、微笑ましく皆を見ていた。

「そう言えば今日は栄依子ちゃんとかむちちゃんの誕生日の間の日じゃないですか!」

たまたが前に聞いていた栄依子と花名の誕生日を思い出して聞いて来て来る。

「確かにそうね。」

栄依子が頷いて答える。

「そうだったんですね、お2人共誕生日おめでとうございます。」

綾がそれを聞いて栄依子と冠に微笑みながら言う。

「ありがとうございます綾さん。」

栄依子は綾の言葉に嬉しそうに答える、気にしている人に祝って貰えたのだからそれは当然だろう。

「綾感謝。」

冠も頬を少し赤くしつつ感謝する。

「だったら栄依子ちゃんと冠ちゃんの分のぬいぐるみを買うのはどうかな？」

花名はふと思いつきそう提案して来た。

「それは名案です！じゃあ花名ちゃんは栄依子ちゃんの分をお願いしますね、私がかむちゃんの分を買うですよ。」

たまたがそれに乗り花名にそう言ってくる。

「良いわね、皆でお揃い・・・そうだ綾さんの誕生日って何時なんですか？」

花名とたまたまの提案に嬉しそうに答えた栄依子は傍らで自分達を見ていた綾に質問する。

「え？私ですか？、私は・・・」

綾の誕生日は栄依子と冠の中間辺りにあった。

「だったら綾さんのも買いましょう、代金は私が出しますから。」

さも名案だと栄依子が言い出す、まあ綾に対し清瀬同様に強い思いを抱く彼女としては誕生日を祝う事は外せなかったからだ。

「いえ、私は……」

「あ、それ良いと思うよ栄依子ちゃん。」

「確かに良いと思いますよ栄依子ちゃん。」

「うん名案。」

流石に悪いと思ひ断ろうとした綾だったが、栄依子の提案に乗り気の花名達に遮られてしまう。

「そうだ栄依子ちゃん、代金は私も出すよ、綾さんには一杯お世話になったし。」

「そうですね私も出しますよ、本当にお世話になりっぱなしですし。」

「もちろん出す……綾に感謝したい。」

話がどんどん進み、綾は困ってしまう、何しろこの中では自分が一番年上だ、年下の栄依子達にそんな事をさせる訳にはいかないと思つたからだ。

「……駄目ですか綾さん？」

躊躇している綾に気付いた栄依子が何時もと違い不安そうな顔で聞いて来る。

「いえそう言う訳では……分かりました構いませんよ、でもそれなら私にもお二人のプレゼント代を出させて下さい。」

そんな栄依子の顔を見た綾は受ける事にする、出来れば彼女にそんな顔をさせたくないからだ、その代わりに二人のプレゼント代を出す事にする。

「はいそれで構いません、花名、たまたま、かむ良いわよね？」

「うん。」

「OKですよ。」

「構わない栄依子。」

花名達も賛成し、綾の誕生日プレゼント購入が決まったのだった。

花名服を買いに行く⑧

「栄依子ちゃん冠ちゃん、綾さん、何色が良いかな？」

「選んで下さいさあさあ！」

早速購入するぬいぐるみを綾達に聞く花名とたまたまて。

「んくくくく。じゃあお言葉に甘えて。私はこの子かな。」

「この子が呼んでる。」

栄依子と冠は並んでいるぬいぐるみの中から選ぶ。

「綾さんは？」

一人どれが良いか悩む綾、何しろこういった物を今まで自ら選んだ事が無かったからだ。

と言うのもこういった可愛い小物系のセンスも服同様無く、大概是薫が選んでくれたからだ。

「それじゃこれで。」

「えつと綾さん？」

「うくん綾さん、それはちよつと・・・。」

「綾、それは止めた方が良い。」

「何と言うか、素晴らしいセンスですなあ、はあ……」

選んだぬいぐるみを見た4人の反応からして、服同様相変わらずそっちのセンスは最悪だった様だ。

結局栄依子と冠が選んだぬいぐるみの色違いを進められ、それに決めた綾。

余談だが今回の事で、栄依子が更に綾の調教いや教育を決意したのだった。

「それでこのぬいぐるみはたまと花名のと一緒に飾つてくれない?」

購入後栄依子は花名にそう提案すると冠も頷いて言う。

「私と栄依子も花名やたまと一緒に居たい。」

その姿にたまてが感激したのか冠を抱きしめて言う。

「なんて良え子やく〜!女手一つでよくここまで育てはったな栄依子はん!」

それを聞いて栄依子が呆れた様に言う。

「たま、かむの捕獲テクニク上がってない?」

たまてがその栄依子の誉め言葉(?)にドヤ顔で答える。

「日々精進しますから。」

一体何の精進なのかとたまて以外の者が思った。

「それで花名、お願い出来る?」

とりあえずたまためのドヤ顔をスルーして栄依子が聞いて来る。

「勿論だよ！、そうだ綾さんのぬいぐるみも一緒にどうですか？」

栄依子の提案に花名は感激の面持ちで答えると、ふと気づいたように綾に聞いて来る。

「私のぬいぐるみですか？」

意外な花名の提案に綾は驚いて聞き返す。

「そうですね綾さん、もし良ければ一緒に置かせて下さい。」

栄依子としても、先程冠が言った様に綾ともこれから一緒に居たいと思ったからだ。

「これで皆何時も一緒に事ですわね！」

「うん、それは良い話。」

たまためと冠も賛成の様で、ここまで言われては承諾するしかなく、ここに綾のぬいぐるみも花名の部屋に飾られる事になった。

その後、綾と花名達は計画通りにおよパフエ（花名の服を選びパフエを食するコース）を実行するのだった。

「今日は皆ありがとう、お陰で素敵な服が選べたと思う！」

駅前で解散する際、花名は感激の面持ちでそう栄依子達にお礼を言う。

「いえいえどういたしまして。」

微笑んで答える栄依子。

「今度それ着て皆でお出掛けしましよ〜!」

たまでもサムアツプして答える。

「うん!」

更に嬉しそうに花名は微笑ん頷く。

「その服でパフェ食べに行ったり、お寿司食べに行ったり、かつ丼食べに行ったりしたい。」

「どんどん服がメインから外れていくなあ。」

「そうですね。」

冠の提案に栄依子と綾は顔を見合わせて苦笑しあう。

「じゃあ花名ちゃんまた学校で。」

「またね。」

「また。」

そう言つて駅の中に消えて行く栄依子達を見送る花名と綾。

「それじゃ私達も帰りますか。」

「はい綾さん。」

夕日の中、親しげに話しながら二人は帰路に付くのだった。その夜のでまりハイツ。

「今日はお魚が安かったからお刺身にしてみたのよ。」

夕ご飯を食べる為部屋に來た花名に志温が嬉しそうに刺身の乗った皿を見せて言う。

「美味しそう、もうお腹空いちやった。」

それを見てお腹を触りながら花名も嬉しそうに答える。

「それでね。あまりにも良い素材だったから兜煮を作ってみたの。」

そう言つてマグロの兜煮を見せる志温に花名は驚いた表情を浮かべる。

「素材つて、何で兜煮？」

「目玉にはDHAが沢山含まれてるのよ。」

驚く花名にそんな解説を始める志温だった。

「あ、そうだ志温ちゃん。」

美味しい刺身とちよつとグロい兜煮に舌鼓をうっていた花名が、何かを思い出したのか志温に話し掛けて来る。

「ん？どうしたの花名ちゃん？」

同じ様に舌鼓をうっていた志温がはしを置くと花名の方を見て聞いて来る。

「えっとね、ご飯食べたからお願ひがあるんだけど・・・」

恥ずかしそうに顔を俯かせながら花名が言う。

「またお風呂と一緒に入って欲しいとか？」

「そ、それはもう良いよ志温ちゃん、じゃなくてお母さんに渡されたお金で洋服買って来たんだけど……」

前に一緒に風呂に入った時の事を思い出し花名は恥ずかしくなったが、気を取り直し本題に入る。

「良かったら写真を撮って欲しいの、それをお母さん達に送ろうと思って。」

あの時の母親との約束を果たそうと花名は思ったのだ。

「良いわよ、葉月さんに見せてあげましょう、そうだちゃんとセットや小物も用意しないとね。」

どこからともなく謎のトロフィーを出す志温。

「ええ……別にそれはいいよ！」

一体何処から出したのかとか、何のトロフィーなのか気になった花名だが、とりあえず断る。

気を付けないと何が出て来るかわからないと花名は改めて思った。

夕食を終えた花名は今日買った服を着て志温の部屋に向かった。

そして部屋に入って声を掛けようとして。

「志温ちゃ……」

「じゃーん！どうかしら花名ちゃん？」

何故かあの制服姿をした志温に遭遇した。

「志温ちゃん!？」

その姿に思わず絶句してしまふ花名だが、志温はまったく気にしていなかった。

だが花名の驚愕はそれだけでは終わらなかった。

「更にゲストをお呼びしました。」

そう言つて隣の部屋から、横須賀女子の制服姿をした綾を引つ張り出して来たのだ。

「綾さん!？」

思つてもみななかった人物の登場に花名は更に驚愕する。

「は、花名ちゃん……その見ないで……」

顔を真っ赤にして俯く綾、その姿に花名の表情は驚愕からときめきに変わつていった

(笑)。

実は花名が買った服に着替えに行つてゐる間に、志温は綾の部屋に強襲を仕掛け、瞬く間に横須賀女子制服に着替えさせて連行して来たのだ。

その手際の良さは栄依子に負けず劣らなかつたと、後に綾は花名に語つたものだ。

「折角なんだし3人で撮りましょう。」

「ええ〜!？」

「ちよつと待つて下さい志温さん、いくら何でもそれは・・・」

志温の提案に綾と花名は思わず慌ててしまう。

「準備も完了してますから、さあさあ二人とも並んでね。」

二人の慌てぶりなど気にせず志温は三脚に乗せられた愛用の一眼レフの前に押し出す。

「断る暇など与えずに・・・二人は顔を見合わせて溜息を付くしかなかった。」

花名服を買いに行く9

三脚に乗せられた一眼レフの前に立つ3人。

花名は兎も角、何で自分がこんな格好（横須賀女子制服）なのか綾は頭を抱えたくない。
る。

「その服凄く可愛いわね。」

一方綾同様の制服姿でごきげんな志温は花名の着替えた姿を見て誉めて来る。

「そ、そうかな・・・?」

花名は志温の言葉に恥ずかしそうに答える。

「花名ちゃんに似合ってるわ。」

「ありがとう志温ちゃん。」

「あ、もちろん綾さんもですよ。」

「はあ・・・ありがとうございます。」

花名が似合っているのは確かだが、今の自分の姿が似合っていると言うのは、あまり嬉しくない綾だった。

年齢を考えると・・・

「いきなり写真送ってびっくりしないかな・・・」

そんな事を気にする花名に志温が微笑みながら答える。

「絶対喜ぶわよ、そうだ葉月さんも制服姿送ってくれないかしら。」

期待溢れる志温に花名は苦笑して言う。

「それは流石にお父さんが止めると思うよ・・・」

そう言えば家の母も綾と志温同様に女子高生の制服姿が似合いそうで花名は内心溜息を付く。

しかもあの母の事だ、喜色満面で着そうで、父も大変だなと花名は思わず同情してしまふ。

「えっと志温さんやっぱり私は写らない方がいいのでは？花名ちゃんのご両親が心配なさるかもしれませんし。」

いくら何でも下宿先に居る人間がこんな格好で写っていたら両親は変な心配をするのではないかと綾は思ったのだが。

「ああそれは大丈夫ですよ、葉月さん綾さんの事気に入っていますから。」

「へっ?」

そんな綾に志温は心配無いと言ってくるが。

「気に入ったって・・・私、花名ちゃんのお母さんにお会いした記憶無いんですが。」

花名の両親が何度かてまりハイツに来てゐる事を綾は知つてゐるが、ブルーマーメイドの任務の関係でまだ会つた事が無かつた筈だからだ。

「ああ、この前こちらに来られた時に綾さんを見掛けたらしいですよ、『志温ちゃん、てまりハイツの2階から降りて来たブルーマーメイドの制服姿の美女さんつてもしかして?』と聞かれましたから。」

偶々花名の部屋から出た葉月が2階から降りて出かける綾を偶然見かけていたらしい。

その美女ぶりに興奮した葉月に志温は綾の事を詳しく教えたのだ。

『志温ちゃんに聞いていた通り本当美人さんね、はあ感動だわ。』

心底感嘆していたと言う葉月の様子に綾は顔を真っ赤にしてしまふ、まあ自分の知らない所でそんな事になっていれば当たり前だ。

ちなみに綾がてまりハイツに住んでゐる事を志温は話してはいた、まあ娘の下宿先の住人だから当然だが。

「だから葉月さん喜びますよ、機会があれば写真送つてくれないかと頼まれていましたし。」

とは言え綾の承諾無く送る訳にかなかつたので、今回の事は渡りに船だと志温は言うのだが。

出来れば真つ当な服で撮って欲しかったと切に思う綾だった。

「さあさあ花名ちゃん、綾さん、並んで並んで。」

「うん。」

「は、はあ。」

そんな綾の思いなど気づかず、志温は二人を一瞬レフの前に並ばせ、自分も花名の隣に立つ。

「花名ちゃん。高校生っぽくなったわね。」

「え!？」

突然そんな事を言われ驚いた向いた花名が志温の方を向いた瞬間にシャッターが切られた。

「あ・・・」

「ちゃんと前向いておかないとく」

志温が微笑みながら言うが、突然そんな事を言われればそうなるだろうと綾は二人を見て苦笑する。

「だって志温ちゃんが変な事言うから・・・」

当然花名もそんな志温に文句を言うが。

「あつ！あのサメのパジャマ姿も送りましょうね花名ちゃん。」

「志温ちゃん！あれは駄目だよ〜！」

「サメのパジャマ？」

二人のやり取りに綾は首を捻って聞いて来る。

「この前花名ちゃんが私の部屋に泊まった時に着たパジャマなんですよ、それが可愛くて。」

「へえ。」

「と言う訳だから花名ちゃん直ぐに着替えてね。」

「志温ちゃん・・・」

「それは楽しみですね。」

「綾さんまで・・・」

期待に満ちた表情を浮かべる綾と志温に花名は真つ赤になってしまふ、まさか綾までそんな事を言うなんてと思ひながら。

結構綾も志温に毒されて来た様だった。

『一之瀬花名、17歳、まだ友達に秘密は言えてないけど何時かは自分の口からちゃんと言えたら良いな・・・遠回りになったけど私の幸せはゆっくり始まる・・・』

何時かは自分の秘密を皆に話したいと思う花名、そして出来れば綾と薫の様に栄依子達となりたいと切に願った。

素晴らしい友人達と大人達に囲まれ花名はとても幸せだと思った。
そしてその幸せはこれからも続いて行くのだと・・・

木組みの家と石畳の街にて

「うん、相変わらず美味しいですね。」

古いが趣のある調度品で飾られた喫茶店で綾はコーヒーを楽しんでいた。

「それは何よりです綾さん。」

そんな綾の席に喫茶店の店員である少女が近付いてきて言う。

薄水色のストレートロングヘアをしたその少女は店の看板娘である香風 智乃だった。

だが店員と言う割にはまだ幼い容姿なのだが、それは彼女がまだ中学生だからだ。

一見クールな物言いの少女だが、本当は歳相応に感情豊か事は短い付き合いだが綾は理解している。

綾がこの喫茶店、ラビットハウスを度々訪れる様になったのは幾つかの偶然が重なったからだ。

まず木組みの家と石畳の街にある基地が飛行船の部品や整備機材を扱っている為、若宮がよく寄港する事があった。

そして綾が気まぐれに街を散策しようと考えた事、それまでは基地の外に出るなど考

えもしなかったのに。

当然初めての街だった為道に迷い、道を聞くついでに喉を潤そうと入ったお店が、智乃が居た『ラビットハウス』だったと言う訳だ。

『も、もしかしてブルーマーメイドの方ですか?』

店に入った瞬間、店員に『いらつしやいませ。』でなく、そう言われ綾はかなり驚かさされた。

その店員が今綾の傍に立っている智乃だったのだ。

どうやら智乃はブルーマーメイドに憧れているらしく、制服姿の綾を見て我を忘れてしまったのだ。

まあそれがきっかけで智乃と親しくなり、そして綾がここのコーヒーを気に入った事もあり、それ以後若宮が寄港するたびにラビットハウスに来る様になったのだ。

一方智乃と綾のそんな関係に危惧を抱いているのが、智乃の姉を自認する保登 心愛だった。

妹として智乃を愛している心愛にとって綾はライバルと言っていい存在だ。

綾がラビットハウスに来る度に今の様に親しげにしているのだから心愛としては心穏やかではいられない。

「そう言えばこの前の進路調査で女子海洋学校を第一希望で出しました、一応学力は問

題ありませんでした。．．．あとは体力試験の方を何とかすれば。」

「確かに女子海洋学校入学には学力の他にそれもありますから、私も苦勞させられました。」

心愛にしてみればこれも心穩やかで居られない理由だ、智乃は女子海洋学校に入学しブルーマーメイドになるつもりなのだ。

心愛がラビットハウスで働き始めた頃は、祖父の後を継いでバリスタになると言っていたのだが、綾に出会った事で諦めかけていたブルーマーメイドへの憧れが再燃したのだ。

父親にも「お前の人生だ、どちらに決めても反対はしない。」と言う言葉もあり、智乃は女子海洋学校への進学を決めてしまったのだ。

なお、ラビットハウスのオーナーであり、智乃の祖父であるティツピーも心愛同様シヨックを受け、息子である父親と揉めたのだが結局押し切られてしまった。

今も智乃の頭の上で「私の後を継いでくれると言っていたのに。．．．」と嘆いている。とは言え愛する孫娘が自分で決めた事だ、反対するのは忍びない、ティツピーこと祖父は半ば諦めていた。

これは心愛も同様で、「自分の通っている高校に来て欲しいのに。．．．」、でも愛する妹が決めた事だし。．．．と。

まあそれも有り綾はラビットハウスに来る度にティッピーと心愛の恨みと羨望の視線に晒される羽目に陥っていた。

「えつとチノちゃん、1人のお客様にずっと付いていたらまずいんじゃないかな。」

綾と智乃の親密そうな姿に耐えられなくなったのか心愛が引きつった表情で話し掛けてくるのだが。

「・・・他のお客さんなんて今居ませんから問題ありません、ココアさん邪魔しないで下さい。」

残念ながら一発で撃沈され心愛は深く落ち込みながらカウンターに戻って行った。

「うんココアにとっては致命的な一撃だったな。」

ラビットハウスでアルバイトをしている天々座 理世が苦笑しつつ言う。

まあ理世にしてみれば心愛の気持ちは分からないでも無かったが、智乃が自分で決めた事なのだから、姉と言うなら見守ってやれば良いと思っている。

「まあそう落ち込むココア、チノはあれでもお前を結構頼りにしてるんだぞ。」

落ち込みながらカウンターに戻って来た心愛の肩を叩いて言う。

「それは分かっているんだけど・・・やっぱり寂しい。」

カウンターに顔を付けて心愛はぼやく。

「まったく・・・そう言えばココア、お前のお姉さんそろそろ来るんじゃないのか。」

「はっ・・・そうだ、ああまたライバルが増える。」

心愛の姉である保登　モカ、有り余る姉オーラで智乃を虜にする（笑）存在。

綾と共に智乃をめぐるつてのライバルだと認識しているのだ。

そして何でも自分より旨く出来てしまう姉に心愛は昔からコンプレックスを感じさせられていた。

もちろん心愛だつてモカが自分の事を大切にしてくれて居る事は分かつてはいるのだが。

「久しぶりにあの姉オーラが見られるな。」

「もうりぜつたら人事みたいに・・・」

文句を言おうとした心愛の言葉は次の瞬間ラビットハウスに進入してきた人物によつて遮られた。

「ココアちゃん、お姉ちゃんが来ましたよ!!」

「え、お姉ちゃん? つてきやあ!」

言葉を遮られてだけでなく、突然抱きしめられ心愛は悲鳴を上げてしまう。

ちなみに誰も助けようとはしない、こうなつたらモカが満足するまで決して心愛を離さない事はラビットハウスの人間は知っているからだ、しかし今日は様子が違った。

「保登主計科長?」

「え？・・・か、神城艦長なんでここに？」

綾がモカに掛けた言葉によって。

「いやまさか艦長がラビットハウスの常連だつとは驚きました。」

「私も主計科長がココアさんのお姉さんだったとは思いませんでしたよ。」

衝撃の出会いの後、保登主計科長ことモカは、神城艦長こと綾の座っていたテーブルに居た。

最初は艦長と同席なんてとモカは躊躇したが、綾が今は若宮の上では無いので気にしなくても良いと言つて座らしたのだ。

艦長らしいなとモカは心が温かくなる、彼女にとつて綾は深い敬愛の対象なのだ。

「まあ私は幾つかの偶然の結果ですよ、でも良いお店に素晴らしいコーヒー、店員さんも可愛いですしね。」

そう言つて綾は笑う。

「そうですね私もその点は同意します、一押しのお店はココアちゃんですね。」

モカも笑つてそう続ける。

「それにしてもお2人が同じ艦の上司と部下だったなんて驚きました。」

綾にお代わりのコーヒー、モカに注文の紅茶を運んできた智乃が2人に声を掛ける。

「まあ確かに、こんな偶然なかなありませんね。」

「はい艦長。」

綾とモカは顔を見合わせて微笑む。

「……ところでココアさん、何でお姉さんがブルーマーメイドの隊員だって教えてくれなかつたんですか？」

冷たい視線と声で、綾とモカの傍らにいた心愛に質問する智乃。

「……！」

思わず姿勢を正してしまう心愛、視線が彷徨い汗がどつと噴出してしまふのを抑えられなかつた。

「ココアさん？」

「ひつ御免なさい、その隠す積もりは無かつたのよ……」

心愛にしてみれば自分の姉までブルーマーメイドの人間だと知られたら益々智乃を取られそうだと思つたのだ。

智乃の責めに心愛は此処から早く逃げたい心境だったが、残念ながら彼女への責めはそれだけでは無かつた。

「そうだ、ココアちゃん、何で艦長がラビットハウスの常連つて教えてくれなかつたの？」

今度は姉であるモカから責められるのだった。

「えっと忘れていました御免なさい。」

その点について言えば心愛の弁解は無かった、本当に忘れていたのだ、姉が若宮の乗員だったと言う事を。

本来だったら綾が若宮の艦長だと知った時点で思い出せばよかったのだが、智乃の事で頭が一杯だった心愛はすっかり失念してしまっていたのだ。

「まあ2人共、ココアさんだつて反省している様ですしそのその位で許してあげたらどうですか？」

綾が苦笑しながら智乃とモカを宥める。

「艦長がそうおっしゃるなら。」

「綾さんがそう言われるのなら。」

何で2人は綾の言葉なら素直に聞くの？心愛は心の中で涙を流すのだった。

ラビットハウス、木組みの家と石畳の街にあるお店。

そこで繰り広げられる物語り。